

友達の少ない僕が幼馴染のお手伝いを頑張る事になった

なんちゃって提督

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

友達の少ない少年が引越した先で再会した橙色の髪の少女に頼まれて彼女達のお手伝いをしていくお話

※勢いで書き始めてしまった初投稿作品になりますので文章等に至らない部分が多くなると思いますので温かい目で見てやってくださると幸いです。

※どういったタグをつけたらいいかもあまり理解していませんので、こういうタグつけた方がいいよ！ というものがあれば指摘していただけると有難いです。自分でも気づき次第、タグは追加していきます。

※オリジナル人物が原作の人物と深く関わっていく作品になりますのでそういった

表現が苦手な方は閲覧しないようお願いします。

※誤字脱字はチェックしているつもりですが、もしもあれば指摘してください。幸いです。

※アニメ等の原作を先に見てもらってから読むのを推奨しています。  
のんびり更新になると思いますが、よろしくお願いします！

# 目次

プロローグ	1	客さんが数人しかいなかったらいいよ？	169
再会	6	ファーストライブを終えて	203
幼馴染二人目	19	幼馴染の妹ちゃんが反抗期のようで辛い	220
出会いときっかけ	38	マネージャーに筋肉や体力は必要ないなんて思ってもそれを口に出す事はできない	248
マネージャー就任？	62	人を見た目で判断してはならない、というのとははや常識	276
知り合い以上友達未満	81	座談会にて	307
お悩み相談室？	102	幼馴染に友達ができたらしい	350
作詞作曲って素人が簡単にできるものじゃないと思います。	120	閑話休題Ⅰ	379
幼馴染の友達がハイスペックすぎる件	150		
某48グループも初期の頃のライブはお			

教え子が二人に増えるようですよ？

412

油断すると感傷に浸ってしまう性格をど

うにかしたい

438



# プロローグ

「今日入学された新入生の皆さん、これからの学校生活を有意義で実りのあるものにすべく——」

なんて事を長々とその学校の校長先生が喋り続けるのをしつかりと一言一句聞き逃さずに聞いている生徒が何人いるだろうか。そういう僕もほとんど聞き流しているから他人の事言えないのだけど

周囲をチラツツと見れば、新たな高校生活への緊張している生徒が半分、あまりの退屈さに眠気からくる欠伸をかみ殺している生徒半分といった感じだ。ちなみに僕は緊張しているせいで全く眠気を感じない

「——校長先生、ありがとうございます。それでは次に在校生による校歌斉唱です」

長かった校長先生の話が終わり、先輩方による校歌の披露が始まった。それを半分聞

き流しつつ、僕が考えている事はただ一つ

(友達……できるかなあ)

中学時代も友人は少なかった。これはコミュ力がないというよりも、かなり人見知りが激しいこの性格によるもので生まれてこの方、かなり苦労してきた

もちろん直そうと努力はしているつもりなのだが、なかなか上手くいかないままこうして高校生活が始まってしまった。正直、不安しかない

(いやいや、高校では積極的に、自分から友達を作るって決めただろ！)

中学まではずっと同じ友達と一緒にいたのだが、彼らはこの高校にはいない。さらに言えば同じ中学からこの音乃宮に進学してきたのは僕だけなのだ

「——以上で入学式を終了いたします。新入生は先生方の指示に従って、それぞれの自分達の教室に移動してください」



そんな司会の先生の声を聞いて周りの学生が一斉に立ち上がる。一瞬遅れて慌てて立ち上がったので隣の女の子に笑われてしまった……恥ずかしい……

――

「よし、全員席に着いたね。私がこの1年C組の担任の牧野かなえです。これから1年という短い間ですがよろしくお願いします。それじゃあ、早速だけど一人ずつ自己紹介していつてもらおうかしら。出席番号が早い順にね」

僕達の教室に戻って席に着くと、担任である牧野先生の自己紹介が終わり、今度は学生が自己紹介をする番になった

出席番号が早い順という事は、僕が自己紹介をするのはかなり後ということになる

僕の一つ前の溝口くんが緊張しながらも簡単に自己紹介を終え、いよいよ出番が回ってくる。あれ、やばいぞ、緊張して頭が真っ白に……

「あ、え、」

な、何をやってるんだ僕は!?

「えっと……あの」

今日この日分かったのは

「僕は、林堂悠つて言います……」

人間はそう簡単には変われないっていう残酷で当たり前な事だった

結局、その日はクラスの誰とも話すことなく、下校することになってしまった

ああ……さよなら、僕の高校生活……

首からチェーンによつてぶら下げられているリングを指先で弄りながら、寂しく家に向かつて歩きだした

## 再会

「はあ……」

がっくりと肩を落として一人で下校する

結局、友達どころか誰とも話せなかった……

僕、ひよつとして中学から何も成長してない？ 人見知りもかなり直ってきたと思つたのにあのザマだ

いやいや、まだ一日目だし希望はまだまだあるよね。プラスに考えようプラスに。ポジティブシンキング、大切大切

「何を一人でブツブツ言ってるのよ」

「うひゃあ!!」

いきなり背後から声をかけられ驚きのあまり大きな声を出してしまい、慌てて後ろを振り返るとそこにいたのは昔から交友のある、友人の一人

「ちよ、いきなり大声出さないでよ! びっくりしたじゃない!」

「そ、それは僕の台詞だよ! いきなり後ろから声かけられたら誰だってびっくりするよ!」

「ナニソレ、イミワカンナイ! 悠くんがあまりに挙動不審で怪しかったからせつかく声をかけてあげたっていうのに!」

「うぐ」

何も言い返せない自分がとても情けないです

「……それはそれとして」

「なによ、少しは落ち着いたわけ？」

「さっきのはあんまり深く聞かないでくれると助かるかな……それで真姫は学校はどうだったの？」

「別に普通よ。まだ入学初日なんだから特に何かある方がおかしいじゃない」

そう言う彼女のフルネームは西木野真姫という。真姫との付き合いは小学校四年ぐらいからなので、友達が少ない僕にとって数少ない幼馴染と言える存在だ

「それもそつか。そりゃそうだよね、あはは……はあ」

「深く聞くなとか言っておいて溜め息なんてつかないでよ。馬鹿っぽいから」

真姫の僕に対する当たりは結構強い。付き合いも長いので慣れたと言えばそこまでだが、やはり少しだけ傷つく

「これでも勉強頑張ってるんだから馬鹿は酷いんじゃないかなあ」

「勉強頑張ってるのは知ってる。貴方がよく、あの”音乃宮”に入れたわね。今でも少しだけ信じられないもの」

酷い言われようだ、とも思うが、実際その通りだった

僕が通う音乃宮学院はこの辺りじゃかなり有名な進学校で偏差値もかなり高い。この学校に入る為に僕は死に物狂いで勉強しなければならなかった

「それにしても、本当にどうして音乃宮に進学したの？ 受かったら教えてくれるとか言ってもつたいぶっておきながら、未だに教えてくれないじゃない」

「やっぱり真姫には内緒」

「それぐらい教えてくれないじゃない。ケチ」

この理由は言ったら笑われるだろうから言えない。何と言われようともこれだけは言えない

「そういえばお母さんが久しぶりに真姫に会いたいんだってさ。そのうち暇な日にでもウチに遊びに来てよ、喜ぶからさ」

「露骨に話を逸らしたわね……まあ、いいわ。そのうち挨拶しに行くわよ」

「ありがとう」

これ以上の追及は無駄だと分かったのか、真姫は何も言ってこなかった。それなりに付き合いが長いと相手の考えている事がなんとなく分かるというのは本当だったらしい



「あ、部活とか決めた？」

「まだよ。だから一日目なのにそこまで考えてるわけないじゃない」

「だけどやっぱり真姫だったら吹奏楽部とか？ 文化系の部活だよー、きつと」

「……言ってなかったかしら」

何気なく言った僕の言葉に対して、真姫の言葉はどこか棘を感じた。何か気に障る事でも言っちゃったかな？

「私ね」

その言葉を聞いて

「音楽、やめるから」

僕の思考は完全に停止した

「……………え？」

同時に歩いている足も止まってしまう。この子は一体何を言ってるんだろう、と思った

「あのねえ」

呆れたように、真姫は言う

「私が大学は医学部に入らなくちゃいけないのは知ってるでしょ？」

それはもちろん。よくよく知ってるよ。だけど、それが何の関係があるっていうのさ

「だから、高校生活は勉強に集中しなきゃいけないの。だから私の音楽は——もう終わり」

少しだけ、悲しそうな真姫の顔を見て我に返った。慌てて彼女の決断を引き留めようと言葉を探した

「あ、あのさー」

「つて言っても完全にピアノとかから離れるわけじゃないから」

……へ？

「本気で勉強しないといけないけど、息抜きは必要でしょ。だからたまにはピアノを弾いたりするかもしれないわ。習い事をしたりをやめるって事」

よ、良かった……てつきりもう二度とピアノを弾かないとか言い出すのかと思ったよ

「何を思いつきり間の抜けた顔してるのよ」

「いやあ、安心しちやつてさあ〜」

意味が分からないように、怪訝そうな顔をする真姫

「だって、僕はてつきりピアノも弾かなくなっちゃうのかと思つてき。そしたらもう真姫のピアノ聞けなくなっちゃうでしょ？ そしたら凄くシヨツクだなーつて。前も言つたけど、僕は真姫のピアノが好きだから」

「……ツ／＼／／ なにそれ、意味分かんない」

「あはは！ そのままの意味だよ」

「ふん！」

「え、なんで怒つてんの？」

「怒つてないわよ馬鹿!!」

「めっちゃ怒ってるじゃん……はあ」

急に早歩きになって僕より少しだけ前を歩く。素直に褒めてあげたのにどうして怒ってるんだろ……でも、真姫は昔からこんな感じだしそんなに気にしなくても大丈夫そうかな

「悠くんだってヴァイオリン辞めたくせに……」

「何か言った？」

「別に。ほら、さっさと帰りましょ」

やっぱりね。ちよつと先に進んだ所で振り返って僕の方を見た。こうして改めて見ると本当に綺麗になったよね……って何を変な事考えてるんだ僕は。そんな事考えてたつてばれたら何を言われるか分かったもんじやない

ぶんぶん頭を横に振って雑念を弾き飛ばすと、笑顔を作って真姫の隣に並ぶ。そこからは割とどうでもいい話をする時間が続いた

「それじゃあ私はこっちだから」

「分かった、それじゃあまたね。そのうち暇な日あったら本当に僕の家に来てよ。前の家より結構綺麗なんだから。君の家には負けるけどね」

「なにそれ嫌味？まあ、いいわ。そのうち気が向いたら行つてあげる。それより……」

真姫は僕の首元に視線を落として

「それ、まだ着けててくれたんだ」

真姫の視線の先にあるのは指輪。チェーンによって首からぶら下がっているせいでペンダントの様になっているもので

小学校六年の僕の誕生日に真姫がプレゼントしてくれたものだ

「うん、僕の宝物だからね。ちよつとボロボロになっちゃったけど……」

大切に扱っているつもりだが時間の経過と共にどうしても傷やら汚れやらがついてしまう。定期的に拭いたりしているのだけど

「そんなに大切にしてくれてるんだ」

「物は大切に扱う主義なんです」

恥ずかしくなった僕は真姫から視線を外してリングを指で弄りながら答えた

「……そっか」

真姫は素っ気なく言つて踵を返す。やば、気持ち悪いって思われたかもしれない。でも本当に大切にしてるんだから、仕方ないよね？

「それじゃあまたね」

今度こそ真姫と別れる。僕は手を振ったが、軽く目に入れてだけで振り返してはくれなかった。高校生になってますます可愛くなつたのは良いけど素っ気なくなつたな……ちよ、ちよつと寂しいなんて思つてないんだからね

ちなみにだが僕は最近になつてこの辺りに引越してきたばかりだ

そうは言つても小学校まではこの辺りに住んでいたので地理はそれなりに理解している。随分変わったような気がするが、もちろん変わつていない部分もあると思う

そういった風景を懐かしみながらも僕は明日からの高校生活を考えると憂鬱になるのだつた

友達、できるかなあ……



## 幼馴染二人目

「ただいまー」

「おかえりなさい。意外と早かったじゃない」

「今日は入学式だけだっって言っただじゃん。早いのは当たり前でしょ」

「そうだけど久しぶりにこの街に来たんだから会いたい友達とかいるでしょ……あ、ごめん」

わざとらしく、ニヤニヤしながら口元に手を当てている女性は僕の母親である。ちなみにフルネームは林堂まどか。なんだか魔法少女になれそうな名前だが、そんなとんでも能力はありません。奇跡も魔法もないのです

「アンタ、昔から友達少なかったもんねー。会いに行けるような子なんていないかー。ごめんごめん私とした事がすっかり忘れてたわー」

てへぺろ♪ みたいな感じで舌まで出している。本当にこの女性は僕の母親なんだろうか？ まず息子に友達がいなくて分かってるなら心配くらいするべきだろう

「……うるさいな。余計なお世話だよ」

しかし母さんの言う事は間違っていないので何も言い返す事ができずに、適当に答えて自分の部屋がある二階へ行く。相変わらずとんでもない母親だ。もちろん嫌いではないけど

「ああ、ちよつとちよつと。冗談じゃない怒らないでよー」

笑いながら呼び止めてくる。まだ何か用があるのかな？ というよりも笑って言う事じゃないでしょ、それ

「私はこれから晩御飯の支度をしなくちゃいけないんだけど、お醤油切らしてるの忘れててねー。買ってきてほしいのよ」

「えー、だったら僕が家に帰ってくる前にメールとか電話とかしてくれればよかったじゃん」

「だって忘れてたんだもん♪」

「もん♪ じゃないよ、全く……」

いい歳してすぐにぶりっ子するんだからー

ストーンと

あまりにも軽い音で僕の背後の壁に何か突き刺さった。顔のすぐ横にあるそれを見れば、壁に刺さっているのは母さんが日頃愛用している包丁

「何か言ったかしら悠くん？」

母上様、僕は今何も言つてませんが。満面の笑みを浮かべているのが逆に恐ろしい

――

「いつてきまーす……」

「はーい！ 気をつけてねー！」

抵抗やら反抗やらは本当に時間の無駄にしかならないので大人しく出発する。それにしてもしつぎ投げたものが間違つて僕に刺さつたらどうするつもりなんだろう。あの人は「てへぺろ♪」で済ませそうで怖い

「てか、どこで買えばいいんだろ……」

家を出て少し歩いた辺りで僕はスーパーマーケットとかの場所を知らない事を思い出した。四年くらい前の記憶を遡ってもほとんど思い出せない

頭を使っても無駄だと悟った僕は迷わず文明の利器に頼る事にした。スマホには使利すぎる機能であるGOGOマップというアプリが搭載されている。これのおかげでよほどの方向音痴でなければ目的地に辿り着くことができる

「えーと……一番近いスーパーは……つと、意外とここから近いんだ」

マップで検索をかけてみたところ、現在位置から歩いて十分もかからなそうだ

そのこの公園を通ったら少し近道になるっぽい。この辺りの散策も兼ねて通ってみようかな

公園に入ると反対側から女の子が三人こっちに歩いてくるところだった。遠目からなのではつきりはしないが、確かあの制服は真姫と同じ、音ノ木坂のものだったはずだ

「あれ？」

「……？」

真姫と同じ学校の人なんだー、くらいにしか考えていなかった僕の顔を女の子の中の一人がガン見していた。な、なんだろ。まさか不審者だと思われた？　もしもJKに通報なんてされようもんなら人生が変わる

できるだけ目を合わさないように、何事もないように通り過ぎようとするが、やはり女の子は僕の事を見つめている

「んー？」

その人は視線だけでなく声まで出して僕を見ている。ひよつとして逆に向こうの方が不審者なのかも……いやいや、それはないよ、うん

そしていよいよすれ違おうと三人の横まで来た所でさつきから熱い視線を僕に送っていた女の子が大きな声を出した

「……やっぱり！」

「ひっ!? い、いきなりなんですか!？」

本日二度目のびっくりして変な声を出してしまったわけだが、それはいきなり声をかけてきた女の子以外の二人も同じだったようで、ビクツと肩を震わせていた

「うわー、久しぶりだね! 元気だった!？」

「え、あの、えつと……」

いきなり話しかけてきたけど、この人誰なんだろう？

自他共に認めるコミュ力不足の僕に、女の子の友達なんて真姫以外にはいないし……

こんな可愛い女の子の知り合いなんて尚更……あ、考えたら恥ずかしくなってきた。目が見れない

「穂乃果、いきなり失礼ですよ。相手の方も困ってるじゃないですか」

そう言うのは、黒くて長い綺麗な髪の人。なんとなく真面目そうな雰囲気が出ている

「あ、そっか。えへへ、私ったら久しぶりすぎて浮かれちゃったよー」

「それで、この人は誰なの？ 穂乃果ちゃんのお友達？」

そう言うのは、ページュっぽい髪の女の人。この人はなんだか柔らかかそうな雰囲気を持ち主だ

「うん、穂乃果のお友達のはるちゃんだよ！」



はるちゃん……？ 僕の事をそう呼ぶのは今までで一人しかいなかったはず。それにさつきから周りの二人はこの人の事を「ほのか」と呼んでいる

「あ……」

そこから導き出される人物はたった一人しかいない

「もしかして……高坂、穂乃果ちゃん？」

「？ そうだよー……ってもしかしてはるちゃんってば私の事忘れちゃったの!? 酷いよーっ!!」

「(っ、っ)めんー！」

僕は素直に謝った。まさかこんな所で穂乃果ちゃんと再会するなんて思っていなかった。けど冷静に考えてみたら彼女の家はこの近くだったしバツタリ会ったとしても何の不思議のないのだが

## 高坂穂乃果

僕がこの街にいた頃だから、小学校低学年とかそのぐらいの時期に母さんが穂乃果ちゃんのお母さんと友達だったという理由で僕も一緒に彼女の家にお邪魔した時に知り合っただ

今よりも他人と話す事が苦手だった当時の僕に、穂乃果ちゃんが積極的に話しかけてくれたおかげで無事に仲良くなる事ができたという過去がある。ちなみに小さい頃から僕は人見知りです

「むー…私にはるちゃんの事忘れた日なんて一日もなかったっていうのに、意外と薄情だったんだね」

「うう……ほんとにごめんなさい……」

ジト目で見てくる穂乃果ちゃんに対して、申し訳なくなりもう一度謝罪する

「穂乃果ちゃん、あんまり苛めたら可哀想だよ。その人も反省してるみたいだし、許してあげて？」

「……」とりちゃんがそう言うなら、仕方ないなあ」

穂乃果ちゃんの視線からキツさがなくなり、僕は内心、ほっとする。あんな目で見られ続けてたら心臓に悪い

穂乃果ちゃんを宥めてくれた人は笑顔を作って挨拶してくれた

「初めまして、私は南ことりって言います。よろしくね、えっと……」

言葉に詰まる南さんを見て、僕も名乗っていない事を思い出す。うう、初対面の人に挨拶するとか心臓に悪い

「あ、えっと、僕は林堂悠って言います……」

ちよつと言ひ淀んでしまつたがなんとか自己紹介を終える事ができた。人見知りの僕にしては上出来だつたと思う

「林堂くんね、改めてこれからよろしくね♪ ほら、海未ちゃんも挨拶しないと」

「わ、私もですか？」

いきなり話を振られて慌てる黒髪の人。あれ、ひよつとして僕と同じ人見知りするタイプなのかな。というよりいきなり知らない男に自己紹介するっていうシユチュエーシヨンはなかなかないよね

「えつと、私は園田海未といいます」

「えつと、園田、さん。よろしくお願ひしますね」

「はい、こちらこそよろしく……」

お互いに言動がかなりぎこちない。間違いない。この人は僕と同じ人種だ。そして僕が一番会話に困るタイプの人だ

自己紹介を終えて、再び穂乃果ちゃんが声をかけてくる

「ここで会ったって事は、ひよつとしてまたこっちに引越してきたってこと?」

「そうだよ。僕は音乃宮学院に入学したから」

「えー! はるちゃん音乃宮なの!?!」

「ふあー…林堂くんって頭良いんだねえ」

南さんが感心するように言った。褒められることに慣れていない僕は慌てて否定する

「そ、そんな事ないです……ギリギリで入学して、何か間違ってたら落ちてたってレベルでしかないですから」

「それでも凄いいよ！ はるちゃんってそんなに勉強得意だったっけ？」

「引越してから結構頑張ったんだ。目標ができて」

「目標？」

……しまった。つい口が滑った。誰にも言っていないので何となく言いづらいというだけの秘密の目標。穂乃果ちゃん達には なんでもないよ、といって誤魔化しておいた

「穂乃果ちゃんは音乃木坂に入ったんだね。母さん達と同じ」

「そうだよ。よく分かったね？」

「うん。僕の知り合いが音乃木坂に通ってるからね」

「知り合い？」

何故か穂乃果ちゃんの顔が曇った。何か気に障るような事言っちゃったのかな？  
思い当たるフリーズは全くないけれど

「でもその子は一年生だから穂乃果ちゃんは知らないと思うな」

「ふーん……あ、そうだ！」

面白くなさそうな顔から一転、笑顔になった穂乃果ちゃんは鞆から携帯電話を取り出して

「連絡先交換しよ？　せつかくこうやってまた会えたんだし」

「それもそうだね。あ、LAMEやってる？」

LAMEというのはスマホにインストールできる無料トークアプリだ。え、LINE？ 知らない子ですね

「うん、やってるよ。それじゃはるちゃんのID教えてー」

僕のIDを教えて検索をかけてもらう。するとすぐに僕の方にも友達に追加しますか？ という通知が来たので穂乃果ちゃんを追加しておく

「これでよし、と」

穂乃果ちゃんは満足そうに携帯を鞆の中にしまった

「これからどこに行くところだったの？」

「母さんにおつかいを頼まれちゃって」



「そうなんだ。もしも何もないんだったら久しぶりに私の家に遊びに来てほしかったんだけど……」

「そ、そんなに落ち込まないで。連絡先は交換したんだし、お互いに暇な時間が重なれば遊びに行くから」

しゅん、と肩を落とす穂乃果ちゃんに慌てて今度遊びに行くと言つてフオローを入れる。でも改めて考えたらこうやってさらつと女の子の家に遊びに行く約束ができるだなんて僕は成長しているんじゃないだろうか

「ねえねえ穂乃果ちゃん、もし今度林堂くんが遊びに来る時はことりもお邪魔していいかなあ?」

「え」

「もちろん! あ、海未ちゃんも来るよね?」

「ふえ!? わ、私もですか?」

「あ、いや、あのー…」

訂正。やっぱり僕は何も成長していないみたいだ。こんな会ったばかりの人達と同じ空間に放り込まれたら緊張で頭がおかしくなってしまうかもしれない。考えただけで顔が熱くなってしまう

「それじゃあ決まりだね! あ、はるちゃん逃げちゃ駄目だからね?」

「ツ!!」に、逃げるって何? 僕が穂乃果ちゃんから逃げるわけないじゃないかー嫌だなもう」

僕の心を読んだかのように釘を刺してきた。確かに僕は分かりやすかったかもしれないけど、穂乃果ちゃんの写真がとても怖いです

なんかかんやあつたけどこの日は穂乃果ちゃん達とはそれで別れて、僕は本来の目的

であるお醤油を手に入れて自宅へと戻った

そして遅くまで穂乃果ちゃんとチャットをしていた。女の子ってどうしてあんなに話題が豊富なんだろう……やっぱり久しぶりに会えて嬉しいって思ってたかたりするのかな？ 僕も結構嬉しかったし

改めて穂乃果ちゃんの家遊びに行くという約束をしてから僕はベッドに倒れこんだ。勉強は、明日から頑張ればいいや

……あ、穂乃果ちゃんって今考えたら年上じゃん

# 出合いときつかけ

新学期が始まって数日が経ったが――

相変わらずぼっちの僕です

いやね？　少しずつだけど喋るようにはなってきたよ？　勘違いしないでね？　ただ一緒に遊んだりする友達がいなくていうだけだからね？

運動が苦手な僕は体育系の部活に入ったらついていけないくて速攻で辞める自信があるし、かといって手先が器用なわけでもないので文化系の部活にも入りづらい

そうこう考えている間に部活に入る機会を逃して現在に至るのです、はい。ヘタレでごめんなさい。僕は他人と喋るのが怖いんですよ。慣れればかなり平気なんでしょう。一般的には誰でもそうだと思う、そんなツツコミはいらないです。僕も分かっていますからね

授業が全て終わり、みんなが楽しそうにこの後の予定を組み立てているのをどこか遠くに聞きながら僕は帰る支度を始めた

さて、この後どうしようか

家に帰ってしたい事があるわけでもないし、散策の続きとかいいかも。まだ家の周りと学校の周りとかしか歩いていないし

(秋葉原とか見に行ってみるのも楽しそう。僕が前に住んでいた時よりもお店がかなり増えてるみたいだね)

思い立ったが吉日、ということとで今日の方針は決定した。一人でアキバ探索である

寂しくなんてないもん　と自分に言い聞かせながら僕は学校を後にした

――

無事に秋葉原に到着した僕は、立ち並ぶビルの群れに圧倒されていた

「ふあー……凄いなあ」

思わず独り言が零れてしまうほどの都会感。僕が以前ここに住んでいた時よりもかなり近代的な街並みになっているのは間違いない

放課後とはいえ平日にも関わらずかなりの人が闊歩している

「ん？ なんだろ……」

人々が口々に何かを言い合いながら一か所に集まっていく。なんとなく気になった僕もそちらの方へと足を向ける

「よ、つと……」

凄い人だかりだったけど、揉みくちやにされているうちにいつの間にか一番前へと出ることができた

揉みくちやにされたせいで多少崩れた制服を整えてから顔を上げると、そこにいたのは三人の女の子

「オーツ」

輝きを感じた

具体的に何かとは言えないけど彼女達から僕は何かを感じ取った

中央にいるおでこを出している女の子が何かを言っている気がするが、それはあまり耳に入ってきてはくれなかった

彼女達がステージの上に立ち、始まった歌とダンス

それは僕の素人目からすれば、プロの動きと遜色ないもので

僕はそれら全てに魅了されていた、と言っても過言ではないだろう

それほどまでに僕はこの瞬間、彼女達に見惚れていた



不意に

センターで踊る例のおでこを出している女の子と目が合った……気がした。これだけの人数だ。きつと僕ではない誰か、もしくは人ではなく僕がいる方向を見ただけなのかもしれない

「あ……」

パチンと

擬音がつきそうなくらい綺麗に彼女はウインクをした

それはきつと彼女とつてファンサービスにしかすぎない

その程度のもの

だけど僕には分かる。極限に集中しなければならぬステージの上でさりげなく他の事に意識を向けて難なくこなしてしまう事の難しさを

「——突然ごめんなさい！　だけどこんなに沢山の人が集まってくれてとても嬉しいです！」

その言葉に現実には引き戻されると彼女達のステージは終わっていた。観衆からは三人に対して惜しめない拍手と歓声を送られている

三人はそれに笑顔で応えながらお辞儀をした

「みなさん、今日は本当にありがとうございましたー！　これから私達『A—R—I—S E』をよろしく願います！」

最期にそう結んで彼女達はステージを降りた。それに合わせて集まっていた観衆も少しずつ散っていく。僕は集まっていた観衆の中で最後までその場に残っていた

賑やかな音楽も、騒がしい観衆もいなくなった街の一角で、ふと思った

「……帰ったら久しぶりにヴァイオリン、弾こうかな」

腕はかなり鈍っているだろうけど、別に他人に聞かせるわけでもないから適当に誤魔化せばいいだろう。問題はそれに僕が納得できるかどうかになりそうだ

――

先程のライブはどうやらゲリラ的なものだったらしく、その場に居合わせることできた僕はかなりラッキーだ。今日についてるかもしれない

家に帰ってヴァイオリンをちよつと弾いたら宿題と予習をやつて「……てく  
ださい」って、ん？

どこかから小さな声がする。どこだろう？ 周辺をきよろきよろと見回すとガラの悪い高校生か大学生くらいの四人組の男が二人の女の子を取り囲んでいた。きつと質の悪いナンパかカツアゲだろう

道行く人もきつと気づいてはいると思うが面倒に巻き込まれるのを嫌つてか、誰も女の子達を助けに行こうとはしない。明らかに二人は嫌がつているのにも関わらず、だ

人は事件や事故といったものを目撃した際、自分以外にも沢山の人間がその現場を見ていた場合は「きつと誰かがやるだろう」と勝手に結論付けて極力関わるのを避けようとするという。特にこの時間帯は学生が多いのでどうしてもそうなってしまうのだらう

かく言う僕もその中の一人。もしもあの間に入って男達とケンカにでもなれば、もの

の数秒でボコボコのサンドバックにされてしまうのは目に見えている。よくいる物語の主人公みたいに「ケンカめっちゃつえー!」みたいなのは僕には当てはまらない。下手をしたら中学生や女の子にまで負けるんじゃないかっていうレベルで貧弱だ

(とりあえず僕にできるのは警察を呼ぶ事だけだ……ごめんね)

名前も知らない女の子達に心の中で謝罪を入れながらポケットから携帯を取り出して警察に助けを求める事にした

—————

## 花陽 side

今日は学校が終わってから私のお友達の星空凜ちゃんと一緒にお買い物をするために秋葉原に来た。凜ちゃんと一緒にお洋服を見たり、私が好きなアイドルのグッズを見るのに付き合ってもらったりとかなり楽しかった

そしてそろそろ帰るといふ流れになった所で、怖い男の人に声をかけられた。最初は無視して逃げるつもりだったんだけど、逃げようとしたら同じように怖い男の人が三人やって来て私達を逃がさないように取り囲んだ

逃げ場がなくなつて凜ちゃんは私を庇うように前に出て男の人達と言ひ合いをしてるけど、私達を逃がしてくれるつもりはなさそうだ

私は情けないけど、凜ちゃんの後ろから前に出る事はできなかつた。だって、本当に怖かつたから

私が盾にしてしまっている凜ちゃんの身体も小刻みに震えていた。きつと怖いのを

我慢して私を庇ってくれている

なんとかしなくちやー

そればかりが頭の中をぐるぐると回り、良い解決策は全く思い浮かんでこない

すると凜ちゃんが意を決したように自身の拳を握り締めたのが分かった

そして息を大きく吸い込んで

「きゃあーむぐっ!?!」

「おおっと、助けを呼ばれたら面倒だからなあ。少しの間大人しくしてもらおうぜ。そっ  
ちの大人しいキミは大丈夫だと思うけど一応、な?」

叫ぼうとした凜ちゃんの口に手を当てて強引に黙らせる

「り、凜ちゃん！」

「むぐ、もがあ、むぐーっ!!」

押さえつけられてるのにも関わらず、凜ちゃんはなんとかその拘束から逃れようと身をよじるが男の人の力の方が当然ながら強いのでそれは叶わない

「おい、暴れんなって……ちっ、しょうがねえ」

「手荒な真似すると後がめんどいからやめとけよなー」

「わあつてる。少し黙らせるだけだ。お前らはそっちの奴押さえとけよ」

「おっけー」

「ひっ!?!」



会話が終わると凜ちゃんを押さえている方とは逆の腕を高く振り上げる。そしてそれをそのまま凜ちゃんの頭上に向けて振り下ろした

「凜ちゃん!!」

私は思わず大きな声で叫んでいた。その後によく拘束から逃れようと努力したがもう遅い

振り下ろされた拳はそのまま凜ちゃんに

「——あ?」

当たらなかつた

いきなり走ってきた誰かが、振り下ろされた腕を掴んで止めたからだ

その人は俯き気味のまま、怪訝そうに見ている男の人に向かって言い放つ

「お、女の子に暴力は、流石にいけないと思うんです……だ、だから落ち着いて、ね？」

これが私と凜ちゃんと、助けてくれた男の子——林堂悠くんの初めての出会いだった

やっってしまったー

僕が男の腕を掴んで最初に思ったのはまずそれだった。本当は警察を呼んでこの場から立ち去るつもりだったけど、女の子が殴られそうになつていてのを見て思わず飛び出してしまったのだ

「あ？ おいおい誰だよにーちゃん。この子達の友達？ もしかしてどつちかの彼氏だったたり？」

そんなわけない。この女の子二人とは喋った事も会った事もない。本当に今日、というか今偶然居合わせただけ

「だんまりじや何も分かんないんだけど。おにーさんは気長い方じゃないんだけどなー」

明らかに怒気を含んだ声に僕は慌てて掴んでいた腕を離す。それを合図にするかのように他の三人の男も僕を取り囲む

ああ、下手をすると本当に現世とサヨナラしそうな状況です……僕も何か凄い戦闘術習っておけばこの場も難なく乗り越えられただろうに

いやいや駄目だ。僕は真姫に「モヤシ」って言われるくらいに情けない男だった。どうあがいても絶望です、本当にありがとうございました

僕がこれから自分の身に降りかかるであろう災厄に思考を放棄しかけていると、黄色というかオレンジというか、といった色のショートカットが良く似合う女の子（この状況でここまで観察できた僕を褒めて欲しい）に目線だけで「逃げて」と伝える

アイコンタクトなんてもちろんしたことないが、状況が状況だけにすぐに相手に伝わったようだ。人間死ぬ気になれば割と何でもできるっぽい

「で、でも……」

小さくそんな事を言っているような気がしたが、僕としては早いとこ安全な場所へと

行つてできれば警察とかに助けを求めてくれると助かるかなー、なんて思つてたりする。僕一人でこんなイカツイおにーさん四人を相手にするのは無理です。例え一人でも死ぬ

「あ、テメー!!」

女の子は散々迷つていたようだが意思を固めたように走り出し、僕の後方にいたもう一人の女の子の腕を引っ張つてこの場から離脱した

「まあ、もういいよ。逃げられたなら仕方ねえ。アイツらの代わりにコイツでストレス発散するとしようぜ」

標的を彼女達から僕へと完全に移行した男達はその包囲網を少しずつ狭めてくる

確実に、煽っている。楽しんでる

その事に怒りを覚えても僕にはどうする事もできない。今できるのはこれから降り

注ぐであろう暴力の嵐に耐えるだけだ

「さあ、覚悟できてんだらうなあ？」

「ひっ」

口から小さく情けない声が零れるがすぐに閉じ、ぎゅつと奥歯に力を入れて身構える

そこからはとにかく痛かった

男の拳、足、肘、膝、などあらゆる暴力が襲い掛かってきた

「あつ、ぐう……」

ものの数分で僕は悲鳴も上げられないほど痛めつけられた

全身が痛い……今日はついてるかと思っただけど厄日だったか油断したよ。意識、手放

したら楽なんじゃないかな、うんそうしよう

「コイツ、弱くね？」

「殴ってるこつちの心が痛むくらいに弱いな」

「まあ、そろそろ財布の中身でも頂いて今日はパーッと……つて、ん？」

そう言つて男は僕の首の辺りをゴソゴソと漁りはじめる。あれ、何してるんだよ、僕の財布はそんなところに入ってないよ。はっ、もしかしてこの人そつちの気が……やめてください僕はノンケですよ

「コイツの首にかかつてたんだけど、これ結構高そうじゃね？」

「ツ!？」

まさか、『あれ』を盗られた!?

混濁としていた意識を覚醒させ、慌てて首元を確認すると、まだチェーンは首にかかったままだった

「それって指輪？」

「ああ、チェーンで首からぶら下げられるようにしてるみたいだ。少し古そうだけど……まあ、売ったら遊ぶ金の足しにはなんだろう」

「……離してください」

「ああ？」

痛む身体に鞭を打ってネックレスを掴んでいる男の腕を鷲掴みにする

「その手を離してください、言ってるんですよ……ッ！」



「こ、コイツなんだよ急に……」

「財布でも何でもくれてやるからそれだけは渡せないって言ってるんだ！」

急に大声を出したので男達が驚いたように僕を見る。とんでもない事を勢いで口走ってしまったのは分かっているが、止められない

痛みのせいで乱れた息を整えながら精一杯睨み付ける

これだけは、渡せないんだ。財布なんかよりも大切に。下手をしたら命より大切な、僕の一——

「おい、そこで何をやってる!!」

「なッ!?!」

「やべっ、警察かよ！」

「ちっ、とにかく逃げんぞ!!」

「こら!! 待ちなさい! 止まれ!!」

二人の警察官が逃げた男を追っていき、別の警察官が僕の傍に近寄ってきた。僕の惨状を見て顔をしかめて

「これは、酷いな……すみませんが、すぐに救急車を呼ぶので少しの間待っていてください」

「ははっ……ありがと、うごぎいます」

警察が来てくれたということで緊張の糸がぶつぷりと切れた僕はその場にへたり込んでしまった。あの子達、ちゃんと警察を呼んでくれたんだ。おかげで本当に助かった

よ

「……ふう。良かったわ」

「……ふう。良かったわ」

余計な事を色々考えているせいで僕は気づかない

事の一部始終を見ていた人影が存在していたことに

## マナージャー就任？

前回のあらすじ！

一人で（ここ重要！）秋葉原を散策していた僕は『A—R—I—S—E』という三人組の女の子に出会い、そのステージに魅了されました！その後、家に帰ろうとした所で今時こんな奴らいるかっていう不良男子に囲まれていた女の子達を助けようとして逆にボロボロにされて病院に運ばれてしまいました……かっこつけても駄目なモノは駄目だね、うん

病院に運ばれて検査をしてもらったところ、骨に異常はなかったので簡単に治療をしてもらって痛み止めの薬をもらって病院を後にした。ちなみに病院にて僕を診察した先生に「キミ、丈夫だね」と茶化されたり、病院に来てくれた母さんに「何やってんのよ、アンタも男なら不良の十人や二十人軽くいなせるようになりなさい！それじゃあ助けたっていう女の子にも示しがつかないでしょうが！」って怒鳴りつけられた。先生の冗談はともかく、母上様、貴女の愚息はそんな大人数を片手で蹴散らせるような戦闘

民族ではありませんよ。というよりも一対一でも無理です

そんなこんながありました、名誉の負傷(?)をした僕の一日は終わったのでした。そして今日はというトーーー

「スクールアイドル?」

『うん、穂乃果とことりちゃんと海未ちゃんの三人で始めることにしたんだー』

LAMEの通話機能を使って穂乃果ちゃんー高坂さんと電話をしている

「それはまた急な話ですけど何かあったんですか?」

『それがね……実は音乃木坂って来年から生徒の募集をしなくなっちゃうんだって。それで今の一年生が卒業する時に廃校になっちゃうかもしれないの。私は音乃木坂がなくなっちゃうなんて嫌だから何とか廃校を食い止めたくて、どうすればみんなが音乃木坂に注目してくれるかなって考えたらちようど今スクールアイドルって流行ってるで

しよ?。」

「それで高坂さん達がスクールアイドルとして有名になって音乃木坂の名前を広めることによつて少しでも生徒を集めたいってことですか?」

『そうそう! さすがはるちゃん、話が早くて助かるよー』

気楽そうに高坂さんは言うけど、実際そんな簡単にはいかないと思う。スクールアイドルなんて昨日見た『A—R—I—S—E』くらいしか知らない僕でもそれくらい分かる。まして有名になるだけならまだしも、学校存続がかかっているのだ。簡単なわけではない

「ところでどうしてその事を僕に教えてくれたんです?」

『そりゃあ、はるちゃんにも色々お手伝ってもらおうと思つて』

「………具体的には?」

『え?』

少しの間、電話の向こうの声が沈黙した

「考えてなかったんですか……」

『か、考えてたよ! 例えば……そうだ、一緒にダンスを考えてもらったりだとか曲を作ってもらったりとか、あと衣装を作ってもらったり!』

この人は僕が同じ高校に通っているとでも勘違いしているんだろうか? それとも彼女達のスクールアイドルのマネージャーにでも気づかないうちに就任していたんだろうか。どちらにしろ僕が手伝える事などたかが知れている

だけどもあ、そんな事は関係ないんだけどさ

「僕にできそうな事なら喜んでお手伝いします」

『ほんとに!? やったー!!』

握っている携帯の向こうから一段と大きな声が聞こえて思わず耳から少し遠ざける。そんなに喜んでくれるのは僕としても悪い気はしないけれど

「応援してますから頑張ってくださいね。時間があればライブとかも見に行きます」

『ライブは絶対来てくれなきゃ駄目だよ』

僕のライブ観戦は絶対なのか。相変わらず強引だけど、それがこの人らしさでもあるんだよね

『ていうかさー』

ん? 急に声のトーンが低くなったぞ

『はるちゃんどうして敬語で喋ってるの?』



「え？」

どうしてつて言われても、貴女が年上だからとしか言えないんだけど。他に理由はないと思います

『禁止』

「は？」

『はるちゃんは穂乃果に対して敬語使っちゃ駄目だからね』

「え？　ちよ、ちよつと高坂さんー？」

『その高坂さんつてのいうも禁止！　穂乃果つて呼んでくれなきや嫌！』

僕はそれを聞いてしばらくマネケにも口をぽかーんと大きく開けたまま固まってし

まった

この人は何を言っているんだ。先輩に対して敬語を使うのは当たり前じゃないのか？  
いかに今まで先輩と呼べる存在と無縁だった僕にだってそれぐらいの事は分かる

『はるちゃん返事は!?!』

「は、はいー!」

鬼気迫る感じで返事を求められて思わず反射的に返事をしてしまう。こういった強引さもあの頃と変わっていないなあ、なんて思ってしまう

「で、でも本当にいいの?」

『いいいったらいいの!……はるちゃんに敬語使われるなんて距離を置かれてるみたいで何か嫌だから』

最期になるにつれて高坂さんー穂乃果ちゃんの言葉は小さくなっていった。なんだか別に悪いことなど一切していないのに罪悪感を感じさせるような声だった。なので僕は素直に折れることになった

「それじゃあ、今まで通り穂乃果ちゃんで……」

『穂乃果って呼び捨てでもいいんだよ?』

「そ、それは流石にハードルが高いよ」

『むう、遠慮なんかしなくてもいいのに』

不満そうな声を発する穂乃果ちゃんだけど、一応これで納得してくれたみたいだ。僕もこれぐらいフレンドリーに他人と接する事ができれば友達増えるのかなあ。いやいや、これはこの人が特殊なだけで他の人間がやっても上手くいくとは限らない

穂乃果ちゃんには昔からそういう所があつた。信じたくなるというか、ついていき

くなるというか

『それでね、明日から朝練を始めるって二人と相談したんだけど』

「ん？」

朝練？ いきなり話が飛んだ。僕が少し考え事をしている間にも穂乃果ちゃんの話は続いていたようだ

『はるちゃんも明日一緒にやらない？ 朝練』

「え」

なん、だと……っっていうベタなボケは口には出さない。けどそれぐらい驚いたのは確かだ。別に早起きが苦手なわけでは無い。そりゃ朝が辛い時もあるけれど、驚いた理由はそこじゃない

「えっと、どうして僕が穂乃果ちゃん達と一緒に朝練しなきゃいけないの?」

『そんなのはるちゃんが一緒の方が楽しそうだから決まってるじゃん!』

とんでもない理由だった。僕は思わず頭を抱えながら

「朝練するのに楽しさを求めちゃっていいの?」

『練習だからこそ真面目に楽しくやるべきだと思うの!』

なるほど、もっともらしい意見だ。確かにどうせやるなら楽しいに越したことはない。でも仮に僕が参加して穂乃果ちゃんが楽しくなったとしても、他の二人はどうなんだろう。ほぼ初対面の人間がいると何かとやりづらくなりそうだけど

『それなら大丈夫だよ。ことりちゃんは良いよって言ってくれたし、海未ちゃんに関しても人見知りを直す練習だっていうことにしたから』

それだけ聞くと園田さんが可哀想だ。どうやらあの三人組のリーダーはなんとなく分かっていたことだが穂乃果ちゃんらしい。この人は一度言い出したら止めづらいから……それを知ってる僕は園田さんと南さんに少しだけ同情した

「けど、そこが面白いとも言えるんだよね」

『?・何の話?』

「ううん、なんでもない。とりあえず朝練やる時に顔くらいは出すよ。どこに何時に集合なの?」

『えつとね、神田明神に七時だよ』

七時か。妥当な時間だけかなり早い。そうなると前の日に学校の準備を終えていたとしても余裕を持って六時前には起きたいな

「分かった。僕は見てるだけだけいいんだよね?」

『うん！ だけど、もし変なところとかあったらどんどん言っしてほしいかな』

運動が得意ではない僕ではアドバースできることなんてないと思うんだけどな。いや、待てよ？ 良い機会だから、身体の効率的な鍛え方とか勉強してみるのもいいかもしれない。そういった面でなら穂乃果ちゃん達の役に立ってる気がする

『それなら明日のメニューは海末ちゃんが考えてくれるらしいんだけど、今度からははるちゃんもメニューを考えるのを手伝ってあげてくれるかな？』

園田さんが練習メニューを考えるって事は、あの人は運動が得意なのかもしれない

『海末ちゃんはねー、弓道部のエースだし家が道場をやってて、えーと、なんだったけ……伝統的な踊りの……日舞？ をやってて小さい頃から剣道とか柔道とか色々習ってて凄いだよ！』

なんて穂乃果ちゃんが懇切丁寧に説明してくれた。どうやら園田さんは運動が得意

とかというレベルではなくスーパーマンであるらしい。あり得ないとは思いますが、彼女とケンカにでもなったら瞬殺されそうだ……僕は絶対に園田さんを怒らせない事を心に誓った

「へえ……そんな人がいるなら僕の仕事はなさそうだね」

『あはは……そんな事言わないで、ね?』

「分かってるよ。言ってみただけ」

どうせ部活にも参加していないわけだし、彼女達のサポートをする時間ぐらいは作れるだろう

「それじゃあ明日も早いんだしもう切るよ」

『もうこんな時間かー。寝坊したら海未ちゃんに怒られるだろうから気をつけなきゃ』



「だったらちよつと長電話しすぎちゃったね」

時計の針は既に十一時を指していた。明日六時に起きるといふ事を考えれば若干遅い気もする時間である

『いやー、ついついはるちゃんと話すの楽しくて喋りすぎちゃったよ』

「僕は話聞いてただけなんだけど……」

幼馴染の穂乃果ちゃんに対してでも上手く話題を作り出す事ができない僕のコミユカルのレベルはかなりヤバめだ。絶望的なまでに低い。どうして穂乃果ちゃんが僕に話しかけてくれるのかがいまいち分からない。僕としては嬉しいんだけどね

とりあえずそれで通話を切り上げて僕は充電がかなり少なくなってしまうスマホに充電器を接続してから机に向かった。そこに置いてあるパソコンの電源を入れてインターネットに繋ぎながら棚に並んでいた身体の仕組みについて小難しくまとめられている参考書を手に取った

――

次の日、目を覚ました僕は下に降りて行って朝食を取ってシャワーを浴びて身支度を整えてから家を出た。ちなみに母さんに穂乃果ちゃん達の朝練の手伝いに行くと言ったら「そういえば久しぶりに穂むらの饅頭が食べたいわね。今日の放課後買ってきて♪」とおつかいを命令された。僕が学校に行っている間に自分で買って来れば早いの。もちろん大人しく母の言葉には従っておく。母は強し

「う〜…今日も良い天気だなあ」

大きく伸びをしながら小さい声でそう言った

僕は雨が嫌い

じめじめしているし、気が滅入ってくるような気がするし、傘を持ち歩かなくちゃいけないし。そして何よりー

あの日の事を思い出してしまう

「…：…なんて、ね」

やっぱりこの街に来ると思い出してしまう。嫌な記憶だ。しかし今は頭をこれから行われる穂乃果ちゃん達の朝練の事に切り替えて集合場所である神田明神へと足を向

ける

「あ」

「あ……」

「神田明神のかなり近くまで来たところで穂乃果ちゃんの友達の園田さんと鉢合わせた。この前見た制服ではなく、動きやすそうなジャージを着ている

「お、おはようございます……」

「おはようございます……」

互いにそれだけしか言葉を発する事ができず、気まずいような空気が流れたまま同じであろう目的地向けて歩き続ける

（き、気まずい……ッ！よりもよって園田さんと鉢合わせになるなんて何か話さない

といけないんだろうけど何も思いつかないよー頭が真っ白にー)

(き、気まずいです……:よりにもよって一人でいる時にこの人と鉢合わせてしまうなんて穂乃果の話では年齢は私より一つ下だということでしたしここは私がリードしてあげなくてはならないのは分かっているのですがほぼ初対面の男の子と喋ることなんてー)

「はあ……」

二人の溜め息が完璧に重なった。その事に二人は気づかない

「あ、あの」

「……」

外側から見ると意外と息が合いそうな二人なのだが今はまだまだぎこちないままである

(き、気まずい……ツ!!)

結局ろくな会話もできないまま、  
神田明神に到着した

## 知り合い以上友達未満

僕は今、穂乃果ちゃん達の朝練を見学しているわけなんだけど

「……………絶対きつい。死ぬ」

練習風景を見て思わず独り言が漏れてしまった

現在時刻は午前七時十分。こんな朝早くから汗をかくというだけでも尊敬できると  
いうのに

「ほら、穂乃果にことり、ラスト三往復ですよ」

「ひ、ひい〜!!きついよお……………」

この神田明神には神社っぽく長い長い階段があるわけだがその階段をダッシュで往復しているのだ。今の穂乃果ちゃんと南さんは小走りになっているかどうかも疑問という速度だが、それも仕方ないだろう

確か穂乃果ちゃんの運動神経は悪くないはずだ。小さい頃僕を引きずって走り回っていたんだから。だけど本格的に運動するとなれば別だという事だろう

南さんに関しては、完全に独断と偏見で申し訳ないが運動はあまり得意そうには見えなかった。実際に走っているのを見ている感じ、僕の予想は間違っていないかったようだ  
「( )までやるんですか？」

「はい。やるからにはスクールアイドルといえど中途半端は許されませんのであるの二人には多少辛いかもしれませんが、身体作りからしっかりとやってもらいます」

きつぱりと園田さんは言い切った。ちなみに彼女に関しては同じ数のダッシュを既にやりきっている。この人、怪物ですか？ あのダッシュの速さはおかしかったと思う



んだけど。ここの階段結構長いよ？ キツさは多少では済まないと思います

「それより、えつと、林堂くんはどうしたんですか？ その怪我」

「あ、えつと……こ、転んで階段から落ちちゃいました」

咄嗟に嘘をついてしまったが、素直に不良にボコボコにされました、なんて言えるわけがなかった。こんな僕にだって少しぐらいのプライドはある

「かなり酷い怪我のようですが大丈夫ですか？ そんな状態なのにこんな朝早くから穂乃果の我儘に付き合わせてしまってすみません……」

「あ、いえ……僕が勝手にドジしちやっただけなんで……気にしないでください」

今気づいた事だけど、普通（？）に園田さんと話せるようになってるじゃないか。ふふ、確実に成長している……ッ!!

「な、何をニヤニヤしているんですか？」

「はっ!?! な、なんでもないです!」

いけないいけない、ついつい顔に出てしまっていたようだ。園田さんは僕を不審者を見るような目で見ている。うう……そんな目で見ないでください。まだ大して仲良くない女の子と会話できるなんて僕にとっては奇跡に近いのだから

「あ、二人も終わったようですね」

そんな園田さんの言葉に階段の方に目をやると、穂乃果ちゃんと南さんが走り終えたようだった。二人とも地面に手と膝をつけて呼吸を整えている。一目で疲労困憊であると分かるのだが

「穂乃果ちゃん、南さん」

二人は返事はできないように顔だけこちらに向けてくる

「疲れてるのは分かりますがすけど息を整える時はなるべく顔を上げたほうが良いですよ。下を向くと逆に呼吸がしづらくなってしまうそうですから」

「そ、そう、なの？」

穂乃果ちゃんの切れ切れの言葉に頷いて答える。昨日少しだけ本で読んだ程度の知識だけだね

「最初は辛いかもしれないけど、えっと、頑張ってください」

僕はメニューをこなしていないので偉そうに言えるが、穂乃果ちゃん達からすればかなりきついだろう。人間は辛い時はどうしても下を向いてしまう生き物だし

「……うん、分かったよはるちゃん」

ぐつ、と足と腕に力を込めて

「私がやるって言って、海未ちゃんや、ことりちゃん。そしてはるちゃんにまで協力してもらってるのに……下なんか向いてる暇なんか、ないよね！」

言つて、勢い良く立ち上がる。その顔は辛そうだけど、それでも笑っていた

それはみつともない笑顔だったかもしれない

だけどそれは、僕がずっと憧れていた笑顔で

僕を、僕らを引つ張つてくれる笑顔だった

穂乃果ちゃんにつられてその場にいた僕達も笑顔になる。辛そうにしていたはずの南さんですらも頑張つて立ち上がった

「みんな。ファイトだよ!!」

昔からの決め台詞とも言えるもので全員にやる気が再チャージされた

「あれ!? そういえばはるちゃんその怪我どうしたの!？」

「今更それ聞くんだ……」

「さあ無駄話は止めて、次は筋トレを始めますよ。早く準備してください」

僕の怪我の話は無駄話ですか、園田さん

「ええーッ!? う、海未ちゃんの鬼ー!!」

「叫ぶ元気があるのならまだ大丈夫ですね」

「ふええええ……」

「あ、あははは……」

良い感じで収まりそうだったのにも通りの穂乃果ちゃんと鬼教官園田さんのせいでやっぱり前途多難なんだと再認識させられた、そんな朝練だった

――

それからさらに数日が経ち、僕の周りでちよつとした事件があつた。まあ、事件と言つても悪い話ではない

「おはよう林堂くん」

「お、おはよう立花さん」

「おっす」

「あ、おはよう東島くん」

そう、クラスメイトの二人と喋れるようになったんだ！ これは自他共にコミユ力不足だと痛感している僕からすれば大事件だ

喋れるようになったと言っても、挨拶してちよつと喋るくらいでしかないけど。ああ、そういうえば昨日は東島くんとはお弁当を一緒に食べたっけ

ちなみに立花さんのフルネームは立花咲、東島くんの方は東島和彦という

この二人との出会いはたまたま掃除の班が一緒になったのがきっかけだった。大人しそうな雰囲気立花さんとはともかく、身長が僕より頭一つ以上大きい東島くんはかなり怖かった。下手したら頭二つくらいは大きいかもしれない。今度身長聞いてみよう

そういうわけで僕の高校生活も少しだけ楽しくなりそうなのだが

「りんどー、お前部活とかやんねーの？」

授業と授業の休み時間になって僕の机の上に顎を乗せながらいかにも気怠そうに東島くんがそう訊ねてきた

「今のところやる予定はないけど……」

「だったらさ!!」

ガバツ！ と顔を上げて目を輝かせながら

「俺と一緒にバスケット部入ろうぜ！」

とか言ってきた



「い、いきなりだね？」

「いやー、高校でもバスケやるって決めたのはいいんだけどよ。同じ中学で音乃宮に来たやついないからちつとばかり寂しいと思ってたんだよな」

バスケか。身長だけで見たら東島くんは凄く上手そうだ。ダンクシュートとか普通に出来そう

僕は少しだけ考えてから

「誘ってくれたのは嬉しいんだけど僕は運動苦手だから……」

「そんな事言わずに俺を助ける為だと思ってさ！」

「そうは言われても……」

どうしよう困った。ここで断ってせっかく話せるようになった東島くんに愛想を尽かされても困る。だけど僕がバスケット部に入部した所で試合に出る事はおろか、三年間続けられるかも怪しい

それで穂乃果ちゃん達を手伝うという約束をしてしまった以上、放課後が空いてないと言うのは少しまずい

その為もう一度、断る事にした

「ごめん東島くん……僕にバスケットは向いてないんだ。それに放課後ちよつとやる事があって……」

「あ？ 部活も入ってないのに何があんだよ」

「えっと、友達の手伝い……としか言えない」

「なんだそりゃ」

呆れたように彼は言うが、間違つた事は言っていないはずだ

「分かつたよ。やりたくない奴を無理に入れた所でそんな奴続かねーしな。諦めて別の奴探す事にするよ」

「ご、ごめんね」

何謝つてんだよ と東島くんは小さく笑つた。見た目はかなり怖いけどやっぱり良い人みたいだ

「じゃあその代わり俺が試合に出る時はちゃんと応援に来てくれよな?」

「……も、もちろんだよ!」

「そんな時はでっけー声で応援しろよ」

「……」

「そこで黙るのかよ!!」

「ほ、ほら授業始まつちやうから席に戻らないと」

「テメエ……」

逃げたな　と小さく呟きながら東島くんは自分の席に戻って行った。僕は大きい声を出すのは苦手なんだよ、ごめんね。頑張つて応援はするけどさ

――

その日最後の授業である現代文が終わり、帰る支度をしながらSHRが始まるのを待っている

「林堂くん、ちよつといいですか」

「あ、立花さん……どうしたの？」

僕の机の横に立花さんが立っていた。この人はあまり感情を顔に出さないタイプのようなので何を考えているのか分からない。まあ、僕に他人の感情を読み取るなんて立派なスキルはないんだけど、それでも分かりづらいタイプの人間だと思う

「この前のお礼がしたいんですけど」

「この前？ ……ああ」

この前のお礼というのは僕と立花さんが関わるきっかけになった出来事

この音乃宮学院では何故か沢山の動物を飼っている。アニマルセラピーだとか校長の趣味だとか色々噂されてはいるが真相は定かではない

とにかく飼われている動物のお世話は学生がすることになっていて今月の担当は僕達のクラスだった。担任の先生に「キミは放課後ヒマそうだから」という理由で飼育委員なんてものに任命されてしまったのだ。まあ、昼休みとかは確かに暇だし動物は好きだから別に良いんだけど

そして一人では流石に大変だろうということで、立花さんにも話がいったらしい。担任は「女子と二人だと嬉しいでしょう？」なんて言ってきたが、僕からすれば初対面の女子と二人きりにされるなんて拷問に近いと最初は思った。立花さん、喋らないし

「林堂くん？」

「え？」

「どうかしましたか。さつきから一言も喋りませんが」

「あ、えつと……ごめん」

「別に謝る必要はないと思いますけど。それよりお礼は何がいいですか」

「お、お礼なんて別にいいよ。そういうのを求めてしたわけじゃないし」

「そうは言われても何かしないと私の気が済まないんです。何でもしますから」

ん？ 今何でもって言ったよね？ ってそうじゃないだろ僕。どこのホモビだよ

立花さんが言うお礼というのは何日か前に動物のお世話をしている時に貧血になって倒れてしまった彼女を僕が保健室に運んだという事へのお礼だ。僕じゃなくてもあの場にいたら誰だって同じ事をしたと思うから気にしなくていいんだけどな

しかし何か言わないと立花さんは納得しそうにない

「うーん……あ、そうだ」

少し悩んでから思いついた事を言ってみる

「今度さ、僕が勉強で分かんない事があつたら教えてくれるっていうのはどうかな」

「そんな事でいいんですか？」

意外そうに立花さんは僕の顔を見つめてくる。そんな事って言っても他人に勉強を教えるなんてなかなか労力があると思うんだけど。ひよつとして立花さんってめっちゃ頭良いとか？

「僕にとっては充分すぎるよ」

というかこれ以上の要求は逆に僕の心がもたない。話せるようになったと言っても



彼女と喋るのはまだ緊張するからだ

「……そうですか。なら、授業や宿題で分からない所があったら何でも聞いてください」

「うん、そうさせてもらうね。それじゃあ、今日はこれで」

「あ……」

「? どうかした?」

「いえ、これを機にLAMEのIDを教えてもらおうかと」

「うええええツ!？」

思わず素っ頓狂な声が出てしまった。こんな僕にクラスメイトの女の子と連絡先を交換するだなんて素敵イベントが発生して良いんだろうか

「嫌、でしたか？」

無表情が少しだけ落ち込んだような顔に変ったような気がして、慌てて首を横に振る

「そ、そんなことないよ！ ただいきなりでびつくりしただけで……」

「そうですか。それなら早速交換しましょう」

「う、うん……」

立花さんに言われるがまま、僕はIDを登録させられた。この人、意外と強引な所もあるんだなあ……

「ありがとうございます。それじゃあ林堂くん、さようなら」

「あ、うん。さようなら……」

そのまま何事もなかったかのように僕の席から離れ、自分の鞆を手にとると教室を出て行った

「……僕も帰ろ」

嵐のように僕のLAMEに追加されたIDは、この学校において東島くんが続いて二つ目のものだった

## お悩み相談室？

僕は今、呼び出されてとある喫茶店に来ている。僕一人だったら一生入る事はなさそうなお洒落な内装の喫茶店だ

誰に呼び出されたのかというと、目の前で綺麗な赤色の髪の毛の先を指先でクルクルと弄っている幼馴染

「それで、こんな所にまで呼び出して何の話？」

真姫は運ばれてきたコーヒーやケーキには手もつけず、そっぽを向いている。コーヒーが飲めるなんて大人だなって思う。ちなみに僕の目の前にあるのはオレンジジュースとショートケーキ。何さ、悪い？

「……ちよつと悩みつていうか、相談があつて」

しばらくしてから真姫はようやく口を開いた

「悩みか。僕でよければ何でも聞くけど、何があったの?」

「実は、私にしつこく付きまどってくる人がいて困ってるの」

なん、だと……まさか真姫がストーカー被害に遭っているというのか。確かに可愛い昔から男からの告白は絶えなかったと噂されていたし華のJKになった今、あり得ない話ではないけども……

「とは言ってもストーカーとかじゃなくて学校での話よ」

「あ、そうなの?」

真姫の言葉に若干拍子抜けした。学校でしつこい人がいるとなると部活とか課外活動の勧誘か何かだろうか

「なんかウチなんかでスクールアイドル始めたって言ってる人がいて、そのリーダーっぽい人が『私達と一緒にスクールアイドルやろう！』ってしつこいのよ」

真姫は少し疲れたように小さく息を吐いた。って、スクールアイドル？ 真姫の言うしつこい人物に心当たりがありすぎて困るんですが

「私は勉強で忙しいからそういうのはいいですって言っても『練習だけでも見に来て』なんて言われちゃったし」

「えっと、真姫？ ちなみにそのしつこい人の名前って分かる？」

僕は九割九部九厘の確立で分かりきった事を確認の為に聞いてみる

「名前？ んー…確か、高坂先輩、とかいったかしら。それがどうかした？」

ピンゴだ。僕は思わず頭を抱える。数少ない僕の知人がこういった形で関わる事に

なるなんて何か奇妙な縁を感じてしまう

「その高坂さんって人、僕の知り合いなんだけど」

「え、そうなの!?! 初耳よ、そんな話」

「だって言っただけじゃなかったからね」

「貴方ね……」

そんな僕の交友関係を真姫に報告しているわけじゃないか。友達が少ないから言うまでもないってのはあるんだけど。やべ、考えたら泣きたい

そんなネガティブな考えはどこかへ放り投げて、ひとまずは真姫の相談に答えよう。強引過ぎるくらい穂乃果ちゃんに対するフォローぐらいはしてあげなきゃ

「その人を知ってる僕から言わせてもらえば、真姫を誘ってるのは単純に一緒にやりた

いからだよ。それ以外の理由はきつとないと思う」

「……どうして私なんかを」

「穂乃果ちゃん……高坂さんのインスピレーション、直感じやないかな」

「なにそれ、意味分かんない」

「あの人ってそういうところあるからさ。少し強引な所もあるけど、支えてあげたくなくなるというかついていきたくなくなるというか……」

話しながら穂乃果ちゃんとの幼少時のエピソードを思い出す

あの頃は完全にインドア派だった僕の腕を引つ張つて外に連れ出すなんてのは当たり前。妹の雪穂ちゃんも一緒に遊んだこともあった。 「星が見たい！」なんて突然僕の家に突撃してきて僕の家の屋根に登って一緒に星を見たりもしたっけな。他にも――



「ちよつと、悠くん」

真姫の呼びかけによつて思考から現実へと戻される

「随分と高坂先輩と仲が良いみたいね。だらしくニヤニヤしちゃつて」

「に、ニヤニヤなんてしてないよ」

「してたわよ。それで、結局高坂先輩とはどういう関係なワケ？」

「関係つて……そんな大袈裟なものじゃないって」

「もしかして彼女とか？」

「ち、違うよ！」

慌てて否定する。確かに穂乃果ちゃんは可愛いしとっても魅力的な人だけど、僕なんかじゃ……ね

「ふーん……」

それにしても穂乃果ちゃんの話題になって時から真姫がやたらと不機嫌だな。これはひよつとして

「もしかして真姫、妬いてー」

「ふんっ!」

「ぎっ!」

少しからかってやろうと思った僕の言葉は真姫の鋭い脛蹴りによって最期まで言えなかった。僕が出した変な声によって店の中にいた他のお客さんの視線が向けられるが、痛みに悶える僕はその事を気にする余裕などない

「ツーー!!　じよ、冗談じゃん。そんなに怒らなくても……」

「悠くんが変な事言おうとするのがいけないのよ!」

そう言つて顔を逸らす真姫の横顔はかなり赤い。きつと照れているんだろう。彼女はこういう話題には弱いという事を知っている僕はそう決めつける

「それで、話を元に戻すけど真姫はどうしたいの?」

脛の痛みがそれなりに引いた所で僕は話を戻す

「わ、私は……」

「どうしてもやりたくない?」

「だって、勉強頑張らなくちゃいけないわけだし、アイドルなんて軽い音楽私には合わな

いもの」

「そうかもね」

一応、真姫の言葉に同意しておく。彼女が普段聞いている音楽はジャズやクラシックといったものが多い。真姫はあまりテレビなども見ないタイプだったはずだからアイドルの音楽にそういったイメージを持っているのも分かる

僕自身も音楽なんてヴァイオリンが少し弾けるくらいだし、アイドルの良さなんて素人知識程度にしか知らない

「でもさ、音楽って感動するよね」

「え？」

意味が分かっていないのか、真姫は少しだけ目を丸くした。だけど僕の言葉の意味はそのままの意味

「良い音楽って心に響くよねって話。それはアイドルも同じなんじゃないかなって思ってた」

先日偶然見た『A—R—I—S—E』の路上ライブの時、僕は確かに感動していた。涙を流すとか分かりやすい表現ではなかったけど、とにかく心を打たれていた

ステージで軽快な音楽と共に華麗に踊る三人の少女に

「もしアイドルの音楽が軽くて嫌いだって思ってるなら、真姫が変えればいい話だよ。穂乃果ちゃん達のグループを軽くない音楽に、さ」

「……そもそも私はやらないって言ってるんだけど」

「良いじゃんちよつとくらい寄り道したって。勉強ばかりで息苦しく感じてるんでしょ？ 息抜きも兼ねて試しにやってみるのも悪くないと僕は思うな」

言い終わると真姫は凄く驚いたような顔をしていた。僕、そんな変な事言っただけじゃないんだけど

「私、勉強ばかりで息苦しいなんて言っただけかしら」

「いや、言われてない。ただ今の真姫見てたら何かつまんなそうにしてるからそうなのかなって思っただけで」

「……………こういう事にはすぐに気づくのね」

「地味に長い付き合いだからね」

笑いながら言うと、何故かまた呆れたように溜め息を吐かれた

「悠くんって……………いや、やっぱりなんでもないわ」

「な、何さ。気になるじゃん」

「なんでもないって言ってるじゃない。しつこい男は嫌われるわよ?」

「うぐつ……」

それは困る。非常に困る。ただでさえ友達が少ないと言うのに真姫に嫌われてしまつては僕の人生は詰みだ。そこまで言うのは大袈裟かもしれないけど、それぐらいシヨックを受けることは間違いないだろう

「ほんと。締まらない人ね」

「言い返す言葉もございません……」

真姫はおかしそうにクスクスと笑っている。からかわれていると分かっているけども実際に何も言い返せない、辛い

「でも、ありがと。少しは気持ちが悪くなった気がする」

そう言う真姫の顔は最初にこの店に入った時よりも穏やかだった。どうやら少しは悩みの解決の手助けにはなったらしい

「これぐらい、お安い御用だよ。さ、そろそろケーキ食べよ？」

「そうね。せっかくここに来たんだから。結構美味しいんだから味わって食べなさいよ」

僕は目の前に置かれてそのまま手を付けずにいたモンブランをスプーンですくって口に運ぶ

「ん、美味しい」

丁度良い甘さで僕の好きな味だった。こんなお店を知っているだなんて流石としか言えない。これからもたまに来たいくらいにはケーキは美味しかった



「でしょ。ここのケーキ結構好きだからたまに来ちやうのよね。一人で考え事するのも悪くないし……つてほんとに幸せそうに食べるわね」

呆れるような声で言われるが、仕方ないじゃん。甘いもの大好きなんだもん

ケーキはすぐに食べ終わってしまい、それからは真姫と話をお互いのカップの中身が空になるまでお喋りを楽しんだ

「……そろそろ帰りましょうか。すっかり話し込んだわね」

「そうだね。でも、たまにはいいんじゃない？ 真姫とこんなにゆっくり話すなんて久しぶりだったし僕は楽しかったよ」

「そうね、中学校の時よりは確実に会う機会が少なくなってる」

そう言う真姫の顔が寂しそうだったのは僕の見間違いだったかもしれない。僕の見間違いかもしれないけど、もし事実だったら？ こんな時なんて声をかけてあげればい

いんだろう。こういつた経験の皆無と言ってもいい僕の頭では答えは出そうにない

「また、何かあればいつでも言つてよ。できる限りで力になるからさ」

その為、当たり障りの無さそうな言葉しか出てこなかった自分が少しだけ情けなく思つた

「……ありがとう」

それでも真姫はそっぽを向いて髪の毛の先を指で遊びながらそう言つてくれた。やっぱり照れてる真姫は可愛いな。これを言つたら拳の一つや二つが飛んでくるだろうから言わないけど

僕は伝票を手に取り席を立つ

「自分の分くらい出すわよ。むしろ話を聞いてもらったんだから私が」

「いいからいいから。たまには僕にも格好良い事させてよね」

男というのは単純な生き物なのでついつい女の子の前では見栄を張ってしまう。というよりも僕に關して言えばこういう時ぐらいしか真姫相手に自分の良い所をアピールできないのだから

真姫が何か言う前に会計を済ませて喫茶店を出た

「さ、いこ? 今日は家まで送っていくからさ。ボディガードの代わりとして」

「ふふ、随分頼りないボディガードね」

「うぐつ……面目ないです」

冗談よ と言って真姫は歩き始める。肩を落としていた僕も慌てて追いつき彼女と肩を並べて歩く

並んで歩いて帰るだなんて恋人みたいで少しだけ気恥ずかしかったけど、たまにはこういうのも悪くないよね。真姫はいつも通り素っ気ないから僕の妄想での話でしかないっていうのが少しだけ悲しかったけど仕方ない

「悠くん」

「ん?」

「ありがとう」

何のお礼がよく分からなかったけど、こう答えなきや駄目だと思つた

「どういたしまして」

その後、無事に真姫を家まで送り届けて僕も自宅に向けて歩き出した。ここから地味に遠いんだよね。しかし真姫と一緒に帰れたご褒美だと思えば安いものである

「明日は朝練にも顔出さなきゃ、あと帰ったら宿題も……」

忙しいな、と思いつつも充実しているような感じがする。部活と勉強を両立している人はこんな気持ちなんだろうか

ちなみに喫茶店の会計が予想以上でびっくりしたのは真姫には絶対に内緒にしておこう……お嬢様恐るべし

作詞作曲つて素人が簡単にできるものじゃないと思います。

僕は今日も今日とて早起きをして穂乃果ちゃん達の朝練を見守っている。見守っていると聞くとこの場に僕は必要ないじゃないかと思うかもしれないが、実は少し前から園田さんと二人で練習メニューを考えており、れっきとした仕事があるのだ

「三人共お疲れ様です」

そう言つて三人にそれぞれタオルと飲み物を手渡す。うん、この辺がマネージャーっぽくなってきたような気がする

「ありがとうございます」

「林堂くんありがとう」

「はるちゃんってば気が利くなー」

各々が僕の行動に対してコメントをしながら休憩に入る

「ちゃんと軽く柔軟をして身体をほぐしておいてくださいね。特に穂乃果ちゃん」

「ううっ！ 分かってるよー…」

ストレッチを済ませれば今日の朝練は終わりだ

「はるちゃん押してー」

「はいはい」

地面にべったりと座っている穂乃果ちゃんの背中に手を当てて軽く押す。あまりやりすぎると逆効果だから気をつけながら力を込める。少し離れた所で園田さんと南さ

んもストレッチを始めていた

「痛くない？」

「大丈夫だよ」

最初に比べたらだいぶ柔らかくなってきたかな。穂乃果ちゃん、すっごい身体固かったんだよね

「ねー、はるちゃん」

「ん？」

「今日の放課後、うちで海未ちゃんところりちちゃんと三人で話し合いするんだけどはるちゃんも来ない？」

「話し合いって何の？」



「作曲とか作詞とか衣装とか……色々！」

なるほど、活動するにあたって山積みになっている問題を解決する為の話し合いか。行ってももちろん良いんだけど僕に何ができるだろうか

「僕に手伝える事なんてあるかな？」

「三人より四人の方が良いアイデアが出るに決まってるよ！ だからお願い！」

そこまで頼まれて断ったら男じゃないだろう。決して見上げながらそう言ってきた穂乃果ちゃんが可愛かったからではない。断じてない

「あ、でも園田さんと南さんはいいの？ 僕と一緒にいても」

「昨日話したら大丈夫だって！」

早い。昨日の時点で僕の予定は決まっていたということか。穂乃果ちゃんの行動力は本当に驚かされる

「放課後も練習してるんだよね。何時に穂乃果ちゃんの家に行けばいいのか後から連絡してくれる?」

「うん、分かった!」

そう言って穂乃果ちゃんは満面の笑みを作った。やっぱり昔から笑顔が似合う人だよな。眩しい笑顔って言うのはこういうものなんだと思う

「あ、今日行くついでにと言ったらあれだけど、また穂乃果ちゃんの家のお饅頭を買おうかな。母さんが喜ぶし」

「ほんと? 買っていつてくれたらお母さんもお父さんも喜ぶな。それから今日は家に雪穂もいるはずだから挨拶してあげてよ。きつと喜ぶから」

「雪穂ちゃんか。前にお饅頭買いに行つた時はいなかったんだよね」

「そうそう。その話をお母さんが雪穂にしたらすつごく悔しそうにしてたんだよ？」

「悔しそう？ どうしてだろ」

「そりゃあ、雪穂も久しぶりにはるちゃんに会いたかつたからに決まつてるじゃん！」

その話が本当だつたら素直に嬉しいと思つた。ちなみに雪穂ちゃんというのは穂乃果ちゃんの妹だ。あの子ともよく遊んだりしたんだよね。懐かしいや、元気かな

そんな話を穂乃果ちゃんとしていると、少し離れた場所にいる二人が

「……今更かもしれませんが林堂さんと穂乃果は随分と仲が良いみたいですね」

「そうだね。見て羨ましいくらいだよ」

「彼と穂乃果は結局どういう関係なのでしょうか……幼馴染というのは分かりましたが」

「あれ〜？ ひよつとして海未ちゃん、嫉妬してる？」

「なっ!? ど、どうしてそういう話になるのですかことり！」

「海未ちゃんの気持ちは分かるよ。だって穂乃果ちゃんってば林堂くんが来てから凄く楽しそうだもんね」

「わ、私は別にそんなつもりじゃ」

「今日聞いてみない？ 林堂くんは穂乃果ちゃんの事をどう思ってるのか」

「ええっ!? こ、ことり破廉恥です！／／／」

なんて会話が行われていた事を僕達は知らないのだった

――

朝練を終え、穂乃果ちゃん達と別れて自分の学校に向かった。これから学校だつてい  
うのが少しだけ憂鬱だったりするけど、頑張らないと

朝練に顔を出すようになってから必然的に僕が教室に入るのはクラスメイトの中でも遅い方になったのだけだ

「あれ？ 東島くん」

「おっす」

廊下でばったりと東島くんと鉢合わせた。彼は学校に着いてからどこかに行っていたのではなく、今まさに登校してきたかのように肩に学生鞆を担いでいる

「お前、最近来んの遅いけど何してんだよ？ 寝坊か？」

「寝坊じゃないよ。ちよつと朝から用事があつて」

話をしながら教室に向かって歩く

「そう言う東島くんこそ今日は遅かったね」

「ああ。俺は今日から朝練に参加することにしたんだ。つっても今日は人数が少ないから軽くダツシユしてからシューティングしかしてねえけど」

「へー、随分と熱心だね」

「ああ、高校でもバズケやるからには勝ちたいからな」

朝からダツシユを自主的にやるなんて東島くんはひよつとしてバスケットめちやくちや上手いのかな。見た目で言えばかなり上手そうだけでも

「それで林堂は結局どこに入部するんだよ」

「僕は、帰宅部だよ」

「そんな部活存在しねえよ」

「だってどこにも入部するつもりないし……」

「おいおい、部活に入った方が高校生活楽しくなるとか思わねーのか？」

「勉強もしなきゃいけないし……それにちよつとボランティアみたいな事やってるか  
ら」

「ボランティアってゴミ拾いとか？」

「そういうのじゃなくて、えっと……」

「どうしよ、まさか友達がスクールアイドルをやってるからその手伝いをしてるなんて  
て言いづらい」

「いや、ゴミ拾いとかだね。うん、そうだよ」

「お前嘘下手すぎるだろ……」



東島くんは呆れたように息を吐いて

「ま、言いたくないってんならそれでもいいけどよ。困ったことがあったらすぐに言えばよな」

東島くん……なんて良い人なんだろう。最初怖いとか思ってたがごめんなさい。人は見かけによらないっていうのは本当だね

「ありがとう。困った事があったら頼りにさせてもらおうね」

「おう」

今度バスケット部にレモンのはちみつ漬けとかを差し入れに言ってあげようと思った朝の出来事だった

放課後になり、穂乃果ちゃんたちが練習をしている間暇だった僕は飼育係に任命された特権(?)として動物達と戯れたり本を読んだりして時間を潰していた

そして穂乃果ちゃんから『練習が終わったからウチに来て』と連絡が来たのは太陽が沈み始める時間になってからだった。こんな時間まで練習しているだなんて少し感心してしまう

若干名残惜しく思いながらも動物達に別れを告げ、穂乃果ちゃんの家である穂むらへ

と向かう。今更の説明になるかもしれないが、穂乃果ちゃんの家は和菓子屋さんを営んでいるのだ

僕の通っている音乃宮から穂むらまでは少しだけ遠い。今度から自転車を使つて移動時間を短縮した方が良さそうだ

「ん？ あれって……」

穂むらの近くまで来ると、入り口の前に人が立っているのが見えた

「こんにちは園田さん」

「あ、こんにちは林堂くん」

僕が軽く頭を下げて挨拶すると、園田さんは素敵なお微笑みと共に返してくれた。最初に会った時から考えると信じられないくらい打ち解けてくれていると思う

「園田さんは今来たんですか？」

「弓道部の練習が少し長引いてしまったので穂乃果とことりには先に帰っていてもらったんです」

なるほど、そういうことか。前に穂乃果ちゃんから園田さんは弓道部と掛け持ちであると聞いたのを思い出した僕は納得して頷いた

「それはお疲れさまです。とりあえず僕達も入りましようか。穂乃果ちゃんと南さんも待っているでしょうし」

「そうですね。あの二人とはいえ、待たせるのはあまり良くないですから」

ガラツと入口のドアを開けると、穂乃果ちゃんのお母さんがお饅頭のようなものを口に運んでいる場面に遭遇してしまった。今は勤務中ではないのだろうか

「あら、海未ちゃんに悠くんじゃない。いらっしやい」

口に入っていたお饅頭を飲み込んでニツコリと笑いながら挨拶をしてくれた。こういうマイペースっぽい所は穂乃果ちゃんとかかなり似ていると思う

「ことりちゃんも穂乃果も待ってるわよ。ほら、上がって上がって!」

「お邪魔します。二人とも穂乃果ちゃんの部屋ですか?」

「そうよー。あ、二人ともお饅頭食べる?」

「いいんですか? いただきますー」

「結構です。ダイエット中なので」

「ぱつぱつと園田さんが誘いを断った。というよりもダイエット……? 僕は園田さんをじつと見てから」

「……余計なお世話かもしれないけど必要ありますか？」

「必要なんです！」

見た目的には園田さんはダイエットする必要はないように思えるが、女の子には色々あるんだろう。よく分からない世界だ、と思う

「そう、残念ね。悠くんは？」

「あ、僕も結構です。その代わりに帰りにいくつかお饅頭を買っていきますから」

「あらわざわざ買ってくれるの？」

「母さんも食べるのでさすがにもらっていくわけにはいかないですし」

「まどかさんもたまには顔を出してくれればいいのに……あの人は相変わらず忙しいの？」

「最近には家にいる事が多いですよ。たまに助っ人を頼まれるとか言つてどこかに行つてますけど」

僕の母はああ見えて昔は凄腕のトレーダーで株やら投資やらでとんでもなく稼いでいたらしい。今はあんないい加減な人なのに、人は見かけによらないものだ。ちなみに穂乃果ちゃんのお母さんは僕の母さんの高校の時の後輩らしい。今でも付き合ひがあることからかなり仲が良い事が分かる

「ああ、海未ちゃんごめんね？ つい話し込んでしまった！ ささ、入つて」

すっかり空気にしてしまっていた園田さんに声をかけると穂乃果ちゃんのお母さんは僕達を二人が待つている部屋へと行くように促した

店の奥に案内され居住スペースとなっている場所から階段を上がり、穂乃果ちゃんの部屋へと向かう。部屋の場所は昔と変わっていないなら覚えてはいるが、もしも変わっていたら困るので僕は勝手知ったる足取りの園田さんの後ろをついていった

部屋の前まで辿り着き、園田さんがその扉を開け放った。そこにはもちろん南さんと穂乃果ちゃんがいたわけだが――

「あ、海未ちゃんにはるちゃんお疲れ様――。さき、座つて座つて」

「穂乃果ちゃん……南さんまで……」

「? どうしたの林堂くん、何かあった?」

「どうしたっていうか……そのお饅頭」

「あ、これウチの『ほむまん』ね! 今から二人の分も取ってくるから――」

「いやいや穂乃果ちゃん、僕が言いたいのはそういうことじゃなくてだね

「……二人とも、ダイエットはどうしたんですか」



僕の代わりに園田さんが二人に尋ねた。その声のトーンが低かったので少し怖いです

「あ」

二人は顔を見合わせて今気づいた、といった顔をしている。やはり園田さんだけではなくこの二人もダイエットしようという話の流れだったらしい

二人は「あはははは…」と申し訳なさそうに笑っている。穂乃果ちゃんは知ってたけど南さんも意外と天然っぽい部分があるのかもしれない

「まあ無理なダイエットは体に良くないって言いますし少しくらいは大丈夫だと思いますよ」

そもそも三人共太っているわけではないのだから気にする必要はないだろうに。もちろんお菓子の食べ過ぎはよくないと思うけどね

「そうかな？　そうだよね！　それじゃあ今から二人の分もー」

「駄目です」

園田さんがバツサリと僕の言葉を切り捨てた

「穂乃果はただでさえ間食が多いのですから意識して抑えるようにしてください。林堂くんが甘やかしてくれるからってそれに甘んじてはいけません」

「ううう…分かってるよー」

園田さんは鬼教官。こういった人物もグループには必要だろう。特にこのメンバーだったら尚更園田さんのこういった役割が必須と言えるだろう

「そ、それじゃ林堂くんと海未ちゃんが来たことだし始めよつか。決めなきやいけない事が沢山あるんだし」

「そうですね。まずは何から話しましょうか」

「やっぱり作曲だよ。作曲できそうな子も見つかったわけだからさー」

作曲できそうな子？ そんな子が音乃木坂にいるんだ。ゼロから作曲するのは言わずもがなかなり難しい。穂乃果ちゃんが言うその子にはかなりの音楽の才能があるの  
だろう

「その子に頼んでみるのですか？ しかしそう簡単に引き受けてもらえるとは……」

「うん。前に頼んだら断られちゃったんだ」

やっぱりね。別の当てなんてそうそう見つからないだろう。どうしようかな……ダメ元で真姫に頼んでみようかな

「そうだ。はるちゃん作曲とかできないの？」

「え」

な、なんで僕？

「だってはるちゃんってヴァイオリンすっごく上手だったじゃん！ だから作曲とかできるかなーって思ってた……どうかな？」

そうか、穂乃果ちゃんは知らないんだっけ

「あー…実はヴァイオリン小学校卒業と同時に辞めちゃったんだ」

「えー!？」

僕のカミングアウトに穂乃果ちゃんは目を真ん丸にして驚いている。それに対して僕は苦笑しか返す事ができない

「林堂くんヴァイオリン弾けるんだー」

「はい。ちよつとかじつてたくらいなんで大した事ないですけど……」

「でもはるちゃんつてば昔ヴァイオリンのコンクールで色んな賞もらつてたじゃん。結構凄いやつ。お母さん達が喋つてたの穂乃果覚えてるよ」

「よくそんな昔の事覚えてるね」

確かに穂乃果ちゃんの言う通り、何回もコンクールで色々な賞を受賞した事があるが、逆に言えばその程度でしかない。僕に作曲までこなせるような才能があったのならばきつとヴァイオリンを今でも続けていただろう

僕に、才能なんてなかったんだから

「と、とにかく、僕に作曲なんて無理だよ……」

ネガティブな発想に囚われそうになったが、慌てて頭の中から追い出した。やっぱり、今でもちよつとトラウマになってるんだよね……ヴァイオリン。独りで弾く分には好きなんだけどさ」

「そっかー…残念。やっぱり西木野さんにもう一回頼むしかないかなあ」

ん？ 西木野さんだつて？

「穂乃果、あんまりしつこくするとその人の迷惑になってしまうのではないですか？」

「そうかもしれないけど私は西木野さんと一緒にスクールアイドルがやりたいの！」

「ふふ♪ 穂乃果ちゃんはその人の事気に入ってるんだねえ」

「うん！ なんとなくだけでも西木野さんは私達にとって絶対に必要な人だと思うの。だから一緒にやりたい！ それにあの子ピアノがとっても上手なんだー、皆も一回聞いてみて欲しいな♪ 絶対感動しちゃうから！」

穂乃果ちゃんが言う『西木野さん』っていうのは確実に真姫の事だ。そういえば真姫が穂乃果ちゃんにしつこく誘いを受けているって言ってたし、ちよつと考えてみれば分かりそうな事だった

僕は真姫と友達だと言いだそうと思っただけどやめておいた。真姫はこの三人に直接誘ってもらわなければ意味がない気がしたからだ。穂乃果ちゃんのこの勢いなら僕が何も言わなくても真姫の事を誘い続けるだろうし心配いらなだろう

「それじゃ作曲の事はひとまず置いていて、次は作詞だね」

「ふふーん。それについては実はもう当てがあるんだもんね。ねーことりちゃん！」

「そうだね穂乃果ちゃん♪」

二人はそう言う顔を見合わせてからある一点に視線を集中させた

「ど、どうしてこっちを見るのですか二人とも」

そう、二人の視線は園田さんに集まっていた。話についていけない僕は見守る事しかできない

「だってー、海未ちゃんって中学校の時にポエムとか書いてたじゃん。穂乃果にも見せてくれたんだから覚えてるよ」

瞬間

「嫌です!」

いきなり大声を出したので少しだけ驚いた

「昔の話じゃないですか! 今思い出したら顔から火が出るほど恥ずかしいんですよ!」



俗に言う黒歴史って奴ですね。中二病的なあれですか。「俺の第三の目がー」みたいな恥ずかしいポエムを園田さんがノートに綴っていただなんて想像しづらいな

「でも私はすつごく良くできてたと思うんだけどなー」

「ことりも変な事言わないでくださいー！」

味方がいないと悟った園田さんは縋るような目で僕の方を見てきた。普段強気な海未さんのそういった視線はギャップがあつてかなり良かったが、今はそれについて触れるべきではない。確実に園田さんが怒る

「ぼ、僕も見てみたいかなー、なんて。園田さんのポエム」

縋るようだった園田さんの瞳が絶望に染まる。そんなに嫌なんですか

「裏切り者……」

「そ、そんなこと言われても……」

瞳を絶望に染めたまま、園田さんは僕を睨み付けてくる。その目、やめてください。怖すぎます。僕のノミの心臓にこれ以上の負荷をかけないでいただきたい

「と、とにかく私は嫌ですから!!」

そう捨て台詞を吐いて園田さんは全速力で部屋を飛び出していった

「あ、逃げた！ことりちゃん、はるちゃん、捕まえるよ！」

「ぼ、僕も!？」

「当たり前じゃん！海未ちゃん待てーっ！」

穂乃果ちゃんは真っ先に飛び出していった。それを見送る僕と南さんは顔を見合わせて苦笑いする事しかできない

「私達もいこつか？」

「そうですね……」

結局、この後嫌がる園田さんを捕獲することに成功し、全員で根気よく説得し続けたおかげか根負けした園田さんが渋々作詞の件について了承してくれた

「その代わりに、林堂くんにも手伝ってもらいますから」

「え、なんでー」

「て・つ・だ・つ・て・く・れ・ま・す・よ・ね？」

「……はい」

この日、僕のマネージャーとしての仕事が増えたのだった

## 幼馴染の友達がハイスペツクすぎる件

穂乃果ちゃん達のファーストライブの日はすぐにやって来た。結局、作曲は真姫がやってくれたらしく、その話を真姫にしたところ「私は作曲なんかしてない！」って言い張られた。あのテンパってる感じは私がやりましたって言うてるようなものだったけど、本人は頑として認めようとはしなかった

ちなみにこの日が来るまでにグループ名まで決まっていた。何でも、困った穂乃果ちゃんが設置した意見箱に『u, s』と書かれた紙が入っていて、全員が気に入ったのでそれに決定したらしい

『u, s』というのは『ミュージズ』と読み、どこぞの会社が発売している薬用石鹸ではなく、神話に登場する九人の女神の名前からとったのではないかとの事だった。誰が考えてくれたのかは分からないけど良い名前だと思う

僕は穂乃果ちゃん達に「絶対見に来てね！」と言われて放課後になって音乃木坂学院まで来たのは良かったんだけどー

「よく考えなくても部外者の僕が女子校になんか入れるわけないじゃないか……」

がつくりと肩を落として穂乃果ちゃんに電話をかけてみる。忙しいかなと思ったけど、僕の予想に反して数回の呼び出し音の後に応答があった

「あ、もしも穂乃果ちゃん？ 今少しだけ大丈夫かな」

『うん、大丈夫だけどどうかした？』

完全な部外者の男である僕が音乃木坂に入る事ができないと説明したら穂乃果ちゃんは『ちよつと待ってて！』と言い残して誰かと話を始めたらしい。らしいっていうのは電話越しなので穂乃果ちゃんの声が遠くなった事しか分からないからだ

『お待たせー！』

少し待っていたら穂乃果ちゃんの声が戻ってきた

『今からそつちにことりちゃんが行ってくれるから入校許可証ってやつを受け取って。それではるちゃんも入って来れるようになるから』

「え、南さんが？」

『うん！　ことりちゃんのお母さんはこの学校の理事長でね、頼んだらオツケーしてもらえたの！』

それは初耳だった。まさか南さんがこの学校の理事長の娘さんだなんて……園田さんもそうだけど穂乃果ちゃんの友達かなりスペック高くないですか？

「林堂く〜ん!!」

名前を呼ばれた方向に顔を向けると南さんがこちらに走って来ていた。かなり急い

で来てくれたのか、肩で息をしている。というか早すぎじゃないですか？ 穂乃果ちゃんから南さんが来るって聞いたのついさつきなんですが

「はあはあ……はい、これが入校許可証。首からかけてくれればいいから」

「あ、ありがとうございます」

僕はペコリと一礼する。そんな僕に南さんはやはり素敵な笑顔で返してくれる。やはり優しい人なんだな、と改めて思う

挨拶もそこそこに南さんに案内される形で歩く。他の生徒から奇異の視線が凄く気になった。女子校の中に男が紛れ込んでいたらそりや気になると思うけど、その視線がくすぐったくて何だか落ち着かない

「あはは、ごめんね。きつと男の子がいるのが不思議なんだよ。みんな悪気はないから気にしないでくれると嬉しいな」

「あ、いや、分かってます。大丈夫ですよ」

良かった、と言って南さんは僕より二歩分ほど前を歩く

「私達のステージは講堂でやるんだけど始まるまでまだ時間があるの。それでこれからライブの最終チェックとか色々やらなきゃいけないんだけど……」

「僕も手伝います。人手、多い方が良いですよね」

「ありがとう。でもその前に私のお母さんに挨拶に行ってもらえるかな。少し話があるって言ってたから」

話、か。何だろう

「ここが理事長室」

何の話をされるんだろう、なんて考えている間に理事長室の前に到着した。他の教室



の扉と比べると少し豪華だと感じる扉だった

南さんが小さく数回ノックすると中から返事が聞こえた。優しそうな声だ、という印象を受ける

理事長室に入ると、女の人が笑顔で迎えてくれた。この人が南さんのお母さんか

…かなり若い、と思う。南さんのお姉さんと言われても納得できる、と言っても過言ではない

「失礼します。お母さん、林堂くんを連れてきたよ」

「ご苦労様。さ、貴女はライブの準備をしてきなさい。大事なライブの前だっていうのに余計な手間を取らせちゃってごめんなさいね」

「ううん。我儘言ったのは私なんだから気にしないで。それじゃあ林堂くん、また後でね」

手を振って南さんは出て行った。一礼して応えた僕も皆の手伝いに行きたいとは思っているのだけど、先程からニコニコと素晴らしい笑顔を浮かべている南さんのお母さんが少しだけ怖い

「さて、と。林堂悠くん、でいいのかしら？」

「は、はい」

名前を呼ばれただけなのに背筋が伸びる。き、緊張してきた……

「単刀直入に聞くのだけれど……」

南さんのお母さんは笑顔を引っ込め、真剣な目で僕を見た。僕は思わず息を？む

「貴方、ことりの彼氏さんなの？」

「うええええ!?!」

予想の斜め上の質問に素つ頓狂な声を上げてしまう。え、誰かに似てるって？ 気のせいだよ気のせい

「あら？ そんなに驚くって事は凶星なのかしら」

「ち、違います！／＼／＼」

僕は慌てて否定した。僕ごときが南さんの彼氏だなんてそんな恐れ多い話はない。全力で頭を横に振って否定する

そんな僕の様子を見て南さんのお母さんはおかしそうに笑っていた

「ふふつ、冗談よ。ことり達に頼まれてあの子達のお手伝いをしてきているんですよ

う？」

じよ、冗談だったのか……いや、普通に冗談だったんだらうけど親御さんから「娘の恋人なのか」と聞かれるなんて心臓に悪い事この上ない

「急にスクールアイドル始めるなんて言い出したからびつくりしたのだけど、ことりも楽しそうだからついつい応援したくなっちゃうのよね」

「は、はあ……」

嬉しそうに話す顔はまさに母親の顔と言っていいものだったが

「それで、林堂くんはあの子達がスクールアイドルを突然始めた理由は知っているかしら」

不意に切り替わったその顔は南さんの母親としての顔ではなく、この音乃木坂学院の理事長という立場にある人間のものだった

「は、はい。この学校の廃校を食い止める為、ですよね」

「そう。もう聞いている通り、この音乃木坂学院は現在、廃校の危機にあります」

生徒数の減少の為に廃校の危機にある音乃木坂を救う為、穂乃果ちゃん達はスクールアイドルを始めたのは聞いていた

「ことり達がこの学校の為、そしてことりに関しては恐らく私の為にもスクールアイドルの活動を通じてこの学校の廃校を阻止しようと動いてくれているのがとても嬉しく思います。ですが……」

「正直な話、あの子達がどんなに頑張っても廃校の決定が覆るのは難しいと私は思いますが」

南さんのお母さんは僕の日を真っ直ぐ見つめて言い放つ

「スクールアイドル人気に乗っかり、この学校の知名度を上げようというのは分かりません。しかし同時にあの子達は厳しい競争に勝たなければならないというのも理解しています。普通に考えれば誰に聞いても無駄な事だと笑われて終わるでしょう」

それは僕も心のどこかで思っていた事だった。いかに穂乃果ちゃん達が頑張ったとして結果がついてくる保証なんてどこにもない。それどころか南理事長の言う通り、誰かに笑われ、誹謗中傷されてしまう可能性の方が高い

「それが分かっているながら貴方はどうしてあの子達に協力しているのですか？」

どうして、か

「友人だからでしょうか。それとも本当にあの子達の誰かに好意を寄せているからでしょうか」

僕は少しだけ理由を考える

「よかったらその理由を教えてくださいませんか？」

南理事長の真つ直ぐな視線

普段の僕ならとてもじゃないが耐えられずにすぐに逸らしてしまうだろう

だけど今だけは、目を逸らすわけにはいかなかった

「僕は、その……先程も言った通り、あの三人の誰かの恋人でもなければ、それどころか穂乃果ちゃん以外の二人とは最近知り合ったばかりで親しい友達とは決して言えないかもしれません」

これは本当の話で、未だに園田さんや南さんとはどうしてもぎこちない会話になってしまう事がある

「だけど、僕はあの三人に感じたんです。えっと、上手く言葉にはできないんですけど……言葉にするとしたら、輝き、かな」

心の中で自分の言葉を反芻する。うん、あの三人を表すならこの言葉がふさわしいと思う

「まだ始めたばかりなので決して三人のパフォーマンスは素晴らしいとは言えないかも知れません。それでもあの三人には他のスクールアイドルには感じない輝きがあるんです」

これはお手伝いを始めてから勉強も兼ねて沢山のスクールアイドルのMVやPVを見たりして感じたことだった。穂乃果ちゃん達には他のスクールアイドルにはない『何か』があつた

「正直、最初は穂乃果ちゃんに頼まれたから何となく引き受けただけでしたけど……今は僕が少しでもあの人達の力になってあげられたらと思ってお手伝いしています」

「なるほど。だけどさつきも言ったけど、廃校を阻止できる保証はないのよ？」



「でございます」

即答した事に南理事長は驚いていたが、僕自身も勝手に出た言葉に内心驚いていた。ただどこれは僕の本心で間違いない

「穂乃果ちゃん達は必ずやり遂げます。僕はそう信じています」

「そう……だけど、貴方まで心無い人に嘲笑われるかもしれない」

「そうかもしれませんが。だけど、僕はあるの三人の味方です。どこの誰に何を言われようと笑われようとずっと、僕だけはあの三人のファンであり続けます」

南理事長の瞳を真っ直ぐ見つめ返す。勢いそのまま喋ってしまったが嘘は吐いていない。厳しい道なのは重々承知の上だけど、穂乃果ちゃん達なら必ずできると信じているのだから

僕の選択はこれで間違っていないと断言できる

「……………」

それつきりしばらく無言の時間が続いたが、不意に南理事長が笑い出した。呆気にとられていた僕に気づいたようで

「ああ、ごめんなさい。まさかそこまで言ってくれるとは思っていなかったものだから……ふふ♪ 流石はまだかさんの息子さんといった所かしら」

「え？」

僕は耳を疑った。理事長は母さんの事を知っている？

「まだかさんは私の高校時代の先輩でね、生徒会長だったあの人にとってもお世話になったの。今でもたまに相談に乗ったりしてもらっているのよ」

「生徒会長!？」

「あら、聞いていないの? あの人はいつも学年主席ですつごい人気者だったんだから。私達後輩からすれば憧れの的だったのよ」

「学年主席!？」

二人が知り合いだったことにも驚かされたけど、あのいい加減な人が学年主席の上には生徒会長を務めていた方が僕にとつて驚きだった。しかも後輩達から憧れの的…どうやら僕の母上は本当に血が繋がっているのかと疑いたくなるぐらいのハイスペックレディらしい

「ことり達のお手伝いをしてきているのはまだかさんから聞いていたから知っていたの。あの子達にこの学校の命運の全てを任せているわけではないけど、希望の一つなのには変わりない…だからお手伝いをしてくれる貴方の覚悟も聞いておきたかった。ごめんなさいね、試すような真似をしてしまつて」

「あ、いえ、それは大丈夫です……けど、偉そうな事を言っておきながら僕に手伝える事なんて知れてますし……せめて今日は精一杯応援するつもりです」

「ありがとう。それだけでも充分よ。ところで」

理事長は笑顔の種類を変えた。所謂、悪戯っぽい笑顔に

「悠くんみたいな人だと本当にこつりを充分に任せられると思うんだけど……どうかしらっ。」

その言葉の意味を理解するのに僕の頭は数秒ほどの時間を要した

そして爆弾を投下されたのだと知った

ちなみにからかわれているのは重々承知だ。理事長は心底楽しそうに笑っているのだから本気で言っていないことぐらい僕にだって分かるが

「ねえ、どうかしら」

「くっ／＼／＼ お話は終わりましたよね!? し、失礼しましたー!!／＼／＼」

そういう冗談に慣れていない僕は思わず理事長室を逃げるように飛び出してしまった。というよりも冗談でも自分の娘をもらってくれだなんて言うだろうか普通。しかも今日初めて会った得体の知れない男に

「あながち冗談でもないのだけれど……それより性格はあんまりお母さんに似てないのね。からかい甲斐がありそうだわ♪」

なんて理事長が僕が部屋を飛び出した後に呟いていたことを当然知らない

「はあ、全く……あれ？」

夢中で走り続け、顔の熱さが引いた頃にふと気づく

「……、……だろうか……？」

初めて訪れた女子校で絶体絶命の予感がした

某48グループも初期の頃のライブはお客さんが数人しかいなかったらしいよ?

花陽 side

今日は新入生歓迎会。私に通っている音乃木坂学院の先輩達が一年生の為に学校の紹介とか部活動の紹介とかをやってくれる。これを参考に自分がどの部活に入るか決める人も少なくないと思う

全体的な説明も終わって今は自分達で興味のある部活を見学できる時間になっていたのでどの部活に入ろうか迷っている私は色々見て回っている。そしてこれからお友達達の凜ちゃんが見たいって言ってた陸上部の練習の見学に向かっている

「うゝ…長い話は苦手だにゃー…」

「あはは…凜ちゃん途中からずっと寝てたもんね」

「だって色んな人が代わる代わるに喋ってたら眠たくもなるにや！」

凜ちゃんは昔からじっとしているのが苦手だったので仕方がないと思うけど、本当に良く寝てたなあ。ふふ、寝顔が可愛かったのは凜ちゃんには内緒だね

「とにかく、陸上部の見学に行ってみようよ。場所は運動場かな？」

「そうそう。でも今日は雨が降っているからきつと体育館で練習してるはずにや。どんな練習してるのか気になるにやー」

「やつぱり、高校生の練習ってなるとかなりきつそうだよね……でもでも！ 凜ちゃんならきつと大丈夫だね、体力あるし運動得意だし！」

「うーん、あんまりきつい練習は好きじゃないんだけど……つてあれ？」

凜ちゃんが言葉を止めて歩くのを止めてどこかを見ている。私も何となくそちらの



方へ視線を向けるとほとんど同時に凜ちゃんは突然走り出してしまった

「あの人……」

「り、凜ちゃん!?!」

咄嗟に止めようと伸ばした私の手をすり抜けて凜ちゃんは行ってしまふ。慌てて私もその後を追いかけた

「はあ、はあ……は、速いよ凜ちゃん!」

凄いスピードで走り出した凜ちゃんだったが、距離自体はそんなに遠くなかったの  
ですぐに追いつくことができた。本当に凜ちゃんは足が速い

「あ、あの!」

「凜ちゃん?」

追いついた凜ちゃん是谁かと喋っているみたいだった。誰だろう？　って思いながら私はその人の顔を見ようと凜ちゃんの横に並んだ

「あ……」

その人の顔を見て、凄く驚いた。そこにいたのはもう会う事はないと思っていた人で「あ、えっと……？　お、お久しぶり、です？」

あはは、なんて困ったように笑っていたのは間違いなく、私と凜ちゃんを不良から助けてくれた男の子だった

――

s i d e o u t

「あ、あの！」

初めてやって来た未知の女子校で迷子になり、途方に暮れていた僕に誰かが後ろから声をかけてきた

ちなみに既に穂乃果ちゃん達に助けを求める旨のメッセージを送ったが、返信は来ていない。きつとライブの準備で忙しくて携帯をチェックしていないのだろう

完全に詰んだ、と思っていた矢先に声をかけられた。ひよつとすると不審者だと思われたのかもしれない。僕は慌てて振り返って声の主に弁解しようとする、そこにいたのはどこかで見たことがあるような気がするオレンジで短めの髪の女の子

「あれ？ 君って……」

その子を少しだけ観察する。そして記憶を辿って該当する人物を検索する。そうこうしているうちにもう一人別の女の子がやって来た。その子にも見覚えがあった

「あ」

そして、ヒット

「えっと……？ お、お久しぶり、です？」

適当な挨拶をして笑って誤魔化しておく。何故なら二人の顔は知っていても名前は知らないからだ

この目の前に立っている二人は以前、変な男に絡まれていた所に僕が割って入った時の女の子。こんな所で会うなんて偶然も良い所だ

それにしてもこの街に来てから妙な縁に恵まれているというか、世間は意外にも狭いんだと思い知らされている。なんてことを考えていたらオレンジの女の子が勢い良く頭を下げた

「あの、助けてくれたのに凜達だけ逃げちゃってごめんなさい！　ずっと謝りたかったんですけど、その、名前も居場所も分からなかったから……」

「あ、えっと、気にしないでください。僕も何もしてないので……」

事実、僕にできた事といえれば彼女達に代わってボコボコにされたことぐらいだ。恥ずかしくて言えないけどね

「それより助けを、警察を呼んでくれてありがとうございました。僕だけだったらどうなっていたか……」

「せめてそれぐらいはしないとダメだと思つて……怪我とか大丈夫ですか？　警察に

聞いてお見舞いに言ったらもう退院しちやったって言われて……」

「ぜんぜん大丈夫ですよ。僕、頑丈な事だけが取り柄なので」

女の子二人は非常に申し訳なさそうにしている。気持ちは分からないでもないが、そんな顔されてもこっちが困ってしまう

自分達が見捨てて先に逃げてしまった事を申し訳ないと思っっているらしいが、あの場面ではそれが正解だったと言わざるを得ない。三人まとめて不良の餌食にされるのが最悪の展開だった為、先に逃げて助けを求めてくれたのは僕としては迷惑どころか、非常に有難かったのだから

「でも……」

オレンジの女の子は納得できないのか渋っている。そこで二人の名前を聞いていなかったのを思い出して互いに自己紹介することにした

「僕は林堂悠って言います。えつと……」

「凜は……じゃない。私は星空凜って言います。それでこっちは」

「あ、えつと……こ、小泉花陽って言います……」

活発そうな印象を受ける女の子は星空さん。反対に大人しく控えめな印象を受ける女の子が小泉さんというらしい。てか、なんか僕、小泉さんに怖がられてませんか？

「かよちゃんは少し恥ずかしがり屋さんなだけなんだにや。別に貴方の事怖がってるわけじゃないから大丈夫だよ」

かよちゃん？ 小泉さんのあだ名かな。それよりも星空さんの語尾の「にや」ってなんだ。猫属性の女の子なのかな、なんて馬鹿な事を考える

「ほら、かよちゃんもお礼言わないと」

「うう……」

星空さんに促され、体の前で指をもじもじさせながらゆつくりと言葉を発してくれた

「あ、あの時はありがとうございました……」

「あ、いえ、本当に気にしないでください。僕が勝手にしたことですし」

小さい声だったけど、凄く落ち着く声だなって思った。何か変態みたいだけど癒される声だ。歌えば凄く響いて良い声の持ち主かもしれない。そんな事を咄嗟に考えるなんて何か本物のマネージャーみたい。本物のマネージャーの仕事なんて知らないけど

「ところで林堂くんはどうしてここにいるのかにや？」

あ、そうだった。それについて説明していなかったし、せっかく顔見知りの人に会えたんだ。これは穂乃果ちゃん達と合流する千載一遇のチャンスじゃないか！ 星空さんから既に敬語がなくなっていることには僕はつつこまないぞ、うん



「僕はこの学校に来た経緯と、少し恥ずかしかったけど迷子になっていて困っている事を簡単に説明した」

「スクールアイドルのお手伝い!」

「は、はい。それが何か……?」

「す、凄いです! できたばかりなのにマネージャーまでいるなんて本物のアイドルみたいです!」

「予想に反して僕の話に食い付いてきたのは大人しい印象を受けた小泉さんの方だった。というか目つきが先程と全く違って怖いです……」

「かよちゃんはアイドルが大好きなんだよ」

「そ、そうなんですか」

そつと星空さんが教えてくれた。あそこまで人が変わるぐらい好きなんだな。あれ、という事は

「ひよつとして小泉さんはライブを観に来てくれるんですか？」

「ふえ!？」

聞いた途端、何故かとても驚かれました。そしてすぐに先程までの控えめな雰囲気に戻ってしまっていた。好きすぎて性格が変わるなんてかなり失礼かもしれないけど面白い人だな

「あ、えと」

何故かは分からないけど、どうやら小泉さんはライブ観戦するか悩んでいるようだ

「わ、私はこれから凜ちゃんと一緒に陸上部の見学に行くから……」

なるほど、引っ込み思案っぽい小泉さんは友人である星空さんの予定を優先させたくてライブを見たいけどそれを言い出せないといったところか

「小泉さん、良かったら『u's』のファーストライブ……見に来てくれませんか？ もちろん星空さんも一緒に」

「え、凜も？」

出会って間もない人になんか失礼な事を言っているのは承知の上だ。それでも見ってくれる人は多いに越したことは無いのだ。誘えそうな人は誘っておかなければ！

「陸上部の見学が終わってからでも良いです。顔を出すだけでも構いません。ほんの少しの時間でも良いのでぜひ見に来てください。絶対、素晴らしいライブになる事を約束します！」

つい声に熱が入ってしまったけど、素晴らしいライブになるというのは僕の本心だ。

あんなに練習したんだ、あの三人ならきつと素晴らしいステージにしてくれるに違いない

「……なんかお手伝いさんっていうよりも怪しいセールスマンみたいだよ」

「うぐっ」

星空さんに厳しいツツコミを入れられてしまう。それを言われると何も言い返せない。実際それっぽい口調になってしまった

「でも、そこまで言われたら凜も少しだけ気になってきちゃったにや。かよちゃんはライブ見に行きたいんだよね？」

「わ、私は……」

「言わなくても分かってるよ。かよちゃんが見に行きたいなら凜もついていくにや」

「り、凜ちゃん……い！　ありがとう！」

この二人、相当仲が良いようだ。俗に言う親友というやつかもしれない。僕にもいつかそんな人ができるかな

それにしても、アイドルの話になった時に一瞬だけ星空さんの表情が曇ったような気がしたのは僕の気のせいだったんだろうか。今は普通の表情をしているし、僕の見間違いだっただろう

「それで林堂くん、ライブは何時からなのかにや？」

「凜ちゃん、確か十七時からだよ」

「そうです。よく覚えてましたね」

えへへ、と恥ずかしそうに笑う小泉さんのアイドル好きは相当なレベルらしい。ふにやりとした笑顔がかなり魅力的だったと思ったのは口が裂けても言えない。現在の



「いや、凜もかよちんと一緒に行くにや」

「え、でもー」

「いいから！ もう本当に時間がないんだから早く行こう？」

「星空さんも……本当にありがとうございます！」

「林堂くん、こつちです！」

僕と小泉さんは慌てて講堂がある方へと駆け出して行った。そして一人残された星空さんが

「……全く、林堂くんって頼りになるのかならないのか分からない人だね」

締まらない人だにや、なんて呟いてから僕達の後を追いかけてきた事なんて知る由もなかった

――

穂乃果 side

いよいよ私達のファーストライブが始まる時間になろうとしている。あと十分程でステージが開園だというのに

「う〜…はるちゃんやっぱり出ないなあ」



「お母さんとのお話がそんなに長くなっちゃってるのかなあ」

そう、はるちゃんがまだ来ていないのだ。別にはるちゃんがステージに上がるわけじゃないからいなくても問題ないと言ってしまえばそこまでなんだけど

「幸いにもフミコ達を手伝ってくれたおかげでライブの準備は終わっています。後は始まってから彼が来るのを待つしかありませんね」

「そんなあ〜…」

私はがつくりと肩を落とした。せっかく記念すべき初ライブ、はるちゃんには一番近くで見たい欲しかったんだけどな

「穂乃果、あまり我儘を言わないでください。林堂くんにわざわざ来てもらったただけでなくことりのお母さんに無理をしてもらって彼の入校許可をいただいたのですからね」

「……そうだね。今はステージに集中しないとだね」

はるちゃんがいないのは残念だけど、仕方ないよね。本当はこの学校に来る事すらできなかつたんだから

結局開演の時間になってもはるちゃんはやって来ずに私達はステージの幕が開くのを待つだけとなった

ステージに立つとことりちゃんも海未ちゃんも喋らなくなってしまった。顔を見れば、薄暗いはずなのに緊張しているのがすぐに分かった。そう言う私も緊張で身体が震えていた

いや、緊張ではなく恐怖、かもしれない。意外とこの二つの感情は近いものがあるんじゃないかって私は思う。

両方の感情を知っている私からすれば、今の状態はどっちかといえれば恐怖の方に近いと思った

何でだろう、凄く嫌な予感がする

一言で言えば不安だ

はるちゃんがこの場にいないと考えるだけで心細い。別に依存しているわけではないと思うけど、やはり傍にいてくれた方が安心できる

それでも無い物ねだりしてもどうにもならないと頭を横に数回振って、ネガティブな考えを吹き飛ばそうとする。こんなの私らしくない。言いだしつぺの私がこんな感じだったらことりちゃんと海未ちゃんに示しが見つからない

そして幕が開く。いよいよ私達のファーストライブの始まりだ

照明で照らされ、私達の目の前に広がった講堂の座席には

誰も、座っていないかった

「……ええ？」

思わず声が出てしまっていた。見渡しても誰もいなかった

当然、はるちゃんの姿も見当たらない

私は両隣にいる海未ちゃんと同じりちゃんに目をやった。二人とも信じられないといった顔をしていた。きつと私も同じような顔をしているんだろうな

「あ、あはは……」

分かっていたことだった

「そうだよね！」

生徒会長にも言われた

「世の中……そんなに甘くないっ！」

そんな事やっても無駄だと、何回も言われた。実際その通りだった。諦めなければ何とかなると信じて頑張ってきたけど――

「甘く……ないよ……」

「穂乃果ちゃん……」

必死にこらえようとしたけど涙が出る。止まらない。私につられるように隣にいる二人も泣いているようだった

やっぱり無駄な事だったんだ。どんなに私達が頑張っても結果がついてこなければ何の意味もない。観てくれる人がいないステージなんてやる意味もないよ……！

ボタン！

講堂の入り口のドアが激しく開かれて、私達の視線は一気にそちらの方へ集まる。そこに立っていたのは

「はあはあ……ま、間に合っ……た？」

「あ、あれ？ ひよつとしてもう終わっちゃったの？」

——

s i d e o u t

僕は小泉さんに案内されて、慌てて講堂へと駆け込んだ。既に時刻は十七時をとつくに過ぎてている。完全な遅刻だ

勢い良く扉を開いて中の様子を確認すると、穂乃果ちゃん達しか見当たらない

「はあはあ……ま、間に合っ……た？」

「あ、あれ？ ひよつとしてもう終わっちゃったの？」

まさか小泉さんの言う通り、既に終わってしまったのかと思っただが、ステージの上にいる三人の様子を見て違うような気がした。僕は小泉さんと少し遅れてやって来た星空さん連れてステージへと近づいていく

「えっと、すみません。二人は適当な場所に座っていてください」

「う、うん」

「分かったにや」

二人は小さな声で返事をして、近場の席に腰を下ろした。僕はステージの目の前まで歩いて行く

近くで見るとステージに立っている三人の瞳には涙が溜まっていた。その事から察するに

「ステージはまだ終わってないよね？」

「……うん」

代表するように穂乃果ちゃんが答えてくれた。その声は少し震えていた



「そっか、良かった。遅くなつてごめんね？」

「ううん、そんな事、ないよ……」

既に泣きそうになっていた穂乃果ちゃんは俯いてしまったけど、僕は言葉を続ける

「やっぱり僕は、肝心な時に役に立てないよね」

「そんな事ないよ！」

僕の予想に反して、穂乃果ちゃんは強い口調で反論してくれた。正直、そう言ってくれるのは嬉しいが僕の言っている事は事実だ

「お客さん、誰も来てくれなかったんだね」

「……うん」

いよいよ穂乃果ちゃんは泣き出してしまいそうだ。他の二人も同じ。やはり僕ではこういう時にどうやって声をかけてあげたらいいか分からない。慰めるどころか逆に傷つけてしまっている

「でも、僕がいるよ」

「ええ？」

言葉を発した穂乃果ちゃんだけでなく、園田さんや南さんも不思議そうな顔で僕を見る

「講堂一杯のお客さんはいなくても、僕がいるよ。『u's』の最初のファンである僕が」  
上手い言葉を持っていないからこそ、僕は思っている事を素直に彼女達に対してぶつけるしかない

「まだ穂乃果ちゃん達の道は始まったばかりじゃないか。最初から上手くいくはずなんてないよ。ここから始まる、いや、始めるんだ」

そして僕は座っている小泉さんと星空さんの方を見る

「しかも今回の観客は僕だけじゃない。この二人が、星空さんと小泉さんがいる……つて」

そこまで言ってから気づいた。もう一人、後ろの方で立っている人影に。人影は僕の視線に気づいたのか、気まずそうに顔を逸らした

ちなみに人影の正体は目立つ赤い髪のおかげですぐに分かった。全く、本当に素直じゃないんだから。僕は思わず笑顔になる

「とにかく観客がいてくれる以上、ライブはやってほしいな。せつかく観に来てくれたのに何もしないでただ帰しちゃうわけにはいかないでしょ?」

穂乃果ちゃん達は黙って僕の話聞いてくれていた。そして俯いていた顔を上げて  
言い放つ

「そうだね」

目は涙のせいで赤くなってしまうているが、それでも笑顔で

「やろう、ライブ！ 歌おうよ、全力で！！ だって、今日の為に頑張ってきたんだから！！」

穂乃果ちゃん言葉に園田さんと南さんが大きく頷く。一瞬の間の後、音楽が流れ始  
めた。真姫が作曲し、園田さんが詩をつけた『u's』のデビュー曲である

S t a r t   D a s h !!

軽快な音楽と共に、三人の女神が踊りだす

僕はその姿に釘づけになった

練習を重ねたといっても、何年もやってきたわけではないので踊りや歌には拙い部分も確かにあった

しかしそれを補って余りある魅力が、彼女達からは溢れていた。その姿に見惚れている僕は気づかないが、講堂にいた他の人達も同じような感想を抱き、ライブに魅入っていたのだ

先程まで泣いていたのが嘘のような笑顔。心からライブを楽しんでいるといったような顔

ライブは一曲しかやらないので『u's』のファーストライブはあつという間に終わってしまった。音楽が止むと、代わりに講堂に響いたのは拍手。講堂にいた僕達がステージの三人に贈る精一杯の賛辞

「それで、どうするの?」

突然、聞こえたその声の主はゆつくりと会談を降りてステージに近づいていく。とても冷たい声のその主は、声に似つかわず、とても綺麗な人だった。長く伸びる金髪やその整った顔立ちを見るに、純粋な日本人ではないのかもしれない。当然だが僕は全く知らない人だ

「続けます！」

穂乃果ちゃんはその女の人の問いに迷うことなく答えた

「何故？ これ以上続けても意味はないように思えるけど」

「やりたいからです！」

その言葉にはやはり迷いはない。僕も突然来ていちやもんのようなものをつけてきた金髪美女に言いたい事があつたけど、今は穂乃果ちゃんの言葉を待つことにした

「私、今もつともつと踊りたい。歌いたいって思ってます！ それはきつとことりちや

んも海未ちゃんも同じ気持ちだと思います！ 私、ここまで頑張ってきて良かったって初めて思えたんです。もしかしたら、誰も応援してくれないかもしれないし、見向きもしてくれないかもしれない……だけど、こんな私達を応援してくれるって言うてくれた人もいるんです」

そこで一度言葉を切って、穂乃果ちゃんは笑顔を向けてきた。その笑顔は僕が思わずドキツとするぐらい、今まで見た中で一番魅力的な笑顔だった。視線を僕から女の人へと戻して、言葉が続ける

「だから、私達が頑張って一生懸命頑張って、この思いを届けたい！ 今私達がここにいて、この思いを！ 一人でも多くの人に届けたいんです！」

僕は、いや、この場にいる人達が彼女の言葉に心を打たれていた。厳しい言葉をかけてきた女の人は分からないけど、あの人にも穂乃果ちゃんの気持ちが少しでも届いていればいいなと、そう思った

「……そう」

勝手にしなさい、と小さく言ってその人は出て行った。あの人は穂乃果ちゃん達とどういう関係なのだろう。後で聞いてみなきゃ

そうして、彼女達のファーストライブは完璧というには程遠かったけど、僕からすれば充分に成功という形で幕を下ろしたのだった。三人共、本当にお疲れ様!!



## ファーストライブを終えて

ライブを終えて、わざわざ観に来てくれた小泉さんと星空さんとはお礼を言ってから別れた。あの二人が来てくれていなかったらどうなっていたか……無理矢理連れてきた形で申し訳ないんだけど本当に感謝しかない

穂乃果ちゃん達が着替えや片づけをしている間に、僕は同じようにライブを観てくれていた人と会っていた。本来なら僕も片づけを手伝うべきなんだろうけど、この人——西木野真姫お嬢様は僕の意見など聞かずに腕を引っ張って講堂を出た

「ちよ、そんなに引っ張ったら痛いつて」

「……」

あ、無視ですかそうですか。無視されるとかなり傷つくんですけど分かってる？ かな

り強い力で引つ張られているから本当に少し痛いんだけどなあ。でも仕方ないから腕を引つ張られている事は忘れる事にしよう。話題を変える

「観に来てくれてありがとね」

「ふん、偶々学校に残っていてヒマだったから観ただけだしお礼を言われる筋合いなんてないから」

今度はちゃんと返事をしてくれた。しかし暇だったからってわざわざあんな離れた所に建っている講堂に足を運ぶとは思えない。自分が作曲した曲の出来が気になったのかもしれないし、何か別の理由があるのかもしれない。とにかく、真姫は興味があったからライブを観に来てくれたんだ。本当に素直じゃないんだから。ツンデレ可愛いです

「それより！」

真姫が少し声を張り上げて僕の方を向いた。その表情から判断すると、何やら怒って

いるようだ。彼女は僕の方を睨み付けながら

「どうして悠くんがここに居るのよ！　ここは女子校だし、そもそも部外者の悠くんが入って来れるわけないでしょ！」

「あれ、言ってなかったけ？」

「言っていない！」

真姫が怒鳴りながら僕に詰め寄った。うん、顔が近いですよ西木野さん。そんなに顔を近くに寄せなくても良くないですか？

「え、えつと、僕と穂乃果ちゃん……じゃない、高坂さんが知り合いだっていう話はしたよね？　それで僕は頼まれてあの人達のお手伝いをしているの。今日は最初のライブだから特別に入校許可をもらってライブ観戦しに来たってわけ」

ドキドキしている事を何とか隠しながら説明する。こんなに顔近いと僕の顔が真っ

赤なのがばれるんじゃないだろうか。僕のちっぽけなプライド的に言うとなんかまずい、まずいですよ！

「ふーん……別に音乃木坂と何の関係もない悠くんが手伝いを引き受けるなんて、随分と高坂先輩と仲が良いのね」

そう言った真姫は何故か悲しそうだった。寂しそうだったとも言えるかもしれない

「仲が良いっていうか、あの人とは色々あってね」

「色々って何？」

「いや、その……」

「へー、私には言えない事なんだ」

悲しい顔から変わって、明らかにイライラしている事が分かる。ひよつとしてヤキモ

チですか西木野さん。それを言ったら殴られるだろうから何も言わないでおくけどー

「ニヤニヤしない！」

「ぐはっ！ け、結局殴られるのね……」

鳩尾に素晴らしいストレートを喰らった。真姫の身体能力はそんなに高くないはずなのに、僕に暴力を振るう時だけは身体能力が五割増しくらいにはなっている気がする。痛みに唸っていた僕の耳に聞き慣れた明るい声が届いた

「あー！ こんな所にいた！」

その声に真姫と僕はほぼ同時に声が飛んで来た方向に顔を向けた。こちらに走ってくるのは先程までの話に出てきていた人物。真姫に責められるように問い詰められていた僕にとっては救いの光が差し込んだようだった。ありがたい、これで話題を逸らせるかもしれない

「穂乃果ちゃん、ライブお疲れ様！ すっごく良かったよ！」

「うん、ありがとう！ 練習で上手いかなかったステップ、自分では結構上手いって思っただけど、どうだった？……ってそうじゃなくて！」

ビシッ！ と僕を指差しながら

「はるちゃんって西木野さんと知り合いだったの!? ライブ終わったらさっさと二人で出て行っちゃってさ!!」

「あれ、言ってなかったっけ？」

「言っていない！」

怒ったように僕を睨み付けてくる穂乃果ちゃん。あれ？ なんかついさつきも似たような事があったような無かったような。何これデジャヴ？

「それにそんなにくつついてさ！ 二人は一体どういう関係なの!? まさか恋人とか!?」

穂乃果ちゃんの言葉に僕と真姫は顔を見合わせる。そうだった、真姫が先程詰め寄って来たからほとんど密着してゐるみたいな感じになってたんだ

具体的な距離を言うと、二人の顔の距離は十センチも離れていない。僕の腕も真姫に掴まれたままだ

真姫の整った顔がすぐ目の前にある。それに密着しているせいかな、女の子特有の甘い匂いがする。思わずクラクラしそうになった

少しの間、僕の頭の中に空白が生まれた後

「ななっ!?! / / /」

「うええ!?!?!」

ほとんど同時に相手から飛び退くようにして離れた。真姫の顔を見ると林檎みたいに真っ赤になっていたけれど、きつと僕の顔も負けなくらいに真っ赤になっている事だろう。やばい、真姫の顔まともに見れないや……

「そうだ西木野さん、今日は観に来てくれてありがとね。興味が湧いたらまた観に来てくれたら嬉しいな!」

穂乃果ちゃんは明るいい声でお礼を言いながら頭を下げる

「は、はい。それじゃ失礼します……」

真姫は顔を真っ赤にしたまま、そそくさと立ち去って行った。この場の空気に耐えきれなくなつて逃げ出したなあへのタレ……おい、今ブルーメランだと思つた人、怒らないから名乗り出なさい



「それではるちゃん？」

「な、なに？」

穂乃果ちゃんに呼ばれて彼女の方に目をやると、笑顔は笑顔なんだけど目が全く笑っていない。こんなに人の笑顔が怖いと思ったのは初めてだ。でもすぐにいつもの笑顔になっ

「片づけ、手伝ってくれるよね？ まだ結構残ってて大変でさー」

「う、うん！ もちろんだよ」

良かった、いつもの穂乃果ちゃんだ。そんな事を思っただけで内心ほっとしたのも束の間

「片づけが終わったら詳しく聞かせてね？」

「な、何を……？」

「色々と、ね♪」

「はい……」

有無を言わさない迫力に負け、頷くしかなかった。僕の幼馴染はしばらく会わないうちに強く逞しくなっていたみたいだ……穂乃果ちゃんの背後に鬼が見えたのは僕の錯覚だと信じたい

———

「酷い目に遭った……」

「私もあんなに怖い穂乃果は初めて見ましたよ」

「あはは……穂乃果ちゃんかなり怒ってたねえ」

片付けも無事に終わり、今は帰宅の最中だ。僕の隣を歩いてくれているのは園田さんと南さん。話を聞けば彼女達の家は僕の家と同じ方向にあると言うので、途中まで一緒に帰る事になったのだ。文字通り両手に華の状況でご褒美としか言いようがないんだけど、こんな美少女である二人と一緒に帰るなんて普通じゃ考えられないシュチュエーションに僕の心臓は悲鳴を上げている。ちなみに途中まで一緒にいた穂乃果ちゃんとは別方向なので先程別れたばかりだ

「穂乃果ちゃんってば笑っていたのに目が全然笑ってませんでした……久しぶりに命の危機を感じましたよ僕は」

「命の危機が久しぶりなの？」

南さん、そこはツツコまないでくれると嬉しいです

「そうですね。私達も穂乃果との付き合いは長いですがあんな表情は初めて見ました」

あの子もあんな顔するんですね、と園田さんと南さんは苦笑いしているが笑い事じゃないんですよ。本当に殺されるかと思うくらい威圧感だったんですから。何かもう色々穂乃果ちゃんには勝てない気がしてきた……いやいや、諦めたらそこで試合終了ですよ？ 頑張れ、僕

「それで林堂くん？」

「はい？」

南さんがやたらとキラキラした瞳で隣を歩く僕を見た。思わず一步後ずさる

「え〜とね、単刀直入に聞くよ？」

先程まで穂乃果ちゃんに根掘り葉掘り聞かれたというのに今度は南さんから尋問を受けるのか。もう勘弁してほしいのだが、僕に拒否権はなさそうなので頷くしかない

「は、はい」

しかしやばい、僕の本能がこの話を聞いてはいけないと叫んでいる。逃げる事も考えた僕だが、隣を歩いている園田さんの何とも言えない威圧感のせいで下手な事ができない。僕、園田さんに何かしたかなあ……心当たりがまるでない

「林堂くんは〜」

「(イ)くっ……」

「穂乃果ちゃんのこと、どう思ってるの？」

本日何度目かの空白が僕の頭の中を埋め尽くした。言葉を失っている僕を未だにキラキラとした瞳で見つめてくる南さんにやたらと深刻そうな顔をしている園田さん

「え、えつと……どう思っているかと言うと、その……」

「もちろん、一人の女の子として穂乃果ちゃんのことをどう思っているのかなって♪」

—————

「もちろん、一人の女の子として穂乃果ちゃんの事をどう思っているのかなって♪」

全く、ことりときたらこんな道端でそんな破廉恥な質問を……ああ、やはり林堂くんも困ってしまったているではないですか。反対にことりは凄く楽しそうですし、やはり彼女も女の子なのでこういった所謂『恋』の話題が好きなのでしょうね。私達三人の中で恋人と呼べる存在がいる人はいませんし

「どう思っているかと言われても、困ります……」

私の隣を歩く彼は恥ずかしいのか俯いてか細かい声で答えました

「穂乃果ちゃんはただの幼馴染です。それ以上の関係になんてなれませんよ……僕からすれば、穂乃果ちゃんが友達でいてくれるだけで十分すぎますから」

そう小さな声で言った彼の横顔は寂しそうで。どうして彼がそんな顔をして答えたのかは私には分かりませんでした

「と、とにかく！ 僕は穂乃果ちゃんのことを大事な友達だと思っています。それは嘘じゃないです」

「え、ほんとに？」

「本当です!!」

「む……林堂くんのケチ」

「ケチって何ですか!？」 というよりも南さんそんなキャラじゃなかったですよね!？」

そこでこの話はうやむやになり、三人共帰る方向が分かれて私は一人で家に向かって歩いています

ことりは気づいているかどうかは分かりませんが、穂乃果と林堂くんは只の幼馴染という言葉では言い表せられないような気がします。上手く言葉にできませんが……そ



ういえば穂乃果も林堂くんと再会してからというもの、先程の林堂くんと似たような表情を浮かべている時がありました

あの二人、一体どういう関係なのでしょう。気になります……つと、こんな事を考えてしまっている時点で私もことりの事を言えませぬね

それにしても気がかりなのは穂乃果です。今日のライブの後にもあの寂しそうな顔をしていました。そしてそれについて林堂くんが関わっているのは間違いないでしょう。あの時の穂乃果の視線は講堂を出て行く彼に向いていました。ライブが終わった直後はあんなにも晴れやかな顔をしていたというのに……少し心配です

「ふう……」

これは少し気を配らなければいけないかな、と思いながら私は一人で息を吐いた

# 幼馴染の妹ちゃんが反抗期のようで辛い

穂乃果ちゃん達のファーストライブから数日経ったある日、僕の学校では

「なあー、見たか？」

「あれだろ？ 最近出来たっぽいスクールアイドルの動画！」

「それぞれ！ グループ名は何だっけ……」

「μ'sだよ！ すげーよな、音乃木坂にあんなグループあったんだな〜」

なんていう感じで僕のクラスで話題になっている。実は僕が手伝っています、と名乗り出たりはしない。パニックになったりしたら困るしね。皆の話に参加したいのは山々なんだけど、喋り出して下手な事まで喋ったら困るからぐっと我慢する

「顔、にやけてんぞ」

「ふひやあ!？」

話しかけてきたのは東島くん。いきなり話しかけてくるもんだから変な声が出ちゃったよ恥ずかしい……

「ぼ、僕にやけてた？」

「ああ、思いつきりだらしない顔してたぜ。何か良い事でもあったのか？」

うう、スクールアイドルに興味ないフリをしていたつもりだったのに思いつきり顔に出てたのか。でも嬉しいんだもん、仕方ないじゃないか

「ちよつとね、良い事があった……かも」

「なんだそりや、教えろよ」

「んー…」

少しだけ考える。東島くんになら言っても大丈夫かな。というよりもこれは誰かに聞いてほしい

「実はね、僕お手伝いをしてるんだよ」

「ああ、あれだろ？ 例の秘密のボランティア。それがどうかしたのか？」

「そのお手伝いっていうのがね、スクールアイドルの応援なの」

「………林堂」

東島くんは何故か凄く優しい目で僕を見ながら

「夢と現実の区別はつけような」

「え、何それ酷くない!？」

「嘘つくならもつとマシな嘘つけよな」

「う、嘘じゃないよ!？」

「だったらそのお手伝いっていうのは何をしてるんだよ」

「少しだけ考えた。僕が今までしてきたこと……」

「練習を見守ったり」

「ふんふん」

「タオルやドリンクを渡したり」

「ほうほう」

「ライブを観た」

「雑用係とただのファンがやることじゃねーか」

「ふぐう!?!」

凶星。正しくその言葉が僕の胸を貫いた。あまりのショックに机に思いつきり頭を打ち付けてしまった。痛い……言われてみたら僕、マネージャーらしい事全然してないんじゃない？

「そんなんでお手伝いなんて言えるのかよ、全く」

「お手伝いって言うか一応マネージャーなんだけど……そ、そうだ！ トレーニングメニユーも考えたりしたんだ！」

「お、それはなんだかマネージャーっぽいな。てかコーチ？」

「でしょでしょ？」

「いきなりテンション復活させんなよ。ちよつとキモイぞ」

キモイって酷い。というか最近東島くんの言葉がきついです

「ところでどこのスクールアイドルの手伝いしてるんだよ？」

おっと、肝心な事を言うのを忘れていたみたい。僕は少しだけ誇らしげに

「僕が手伝っているのはu'sっていうスクールアイドルだよ」

「薬用石鹸みたいな名前だな」

「言うと思ったけどそんなバタなボケはいらないからね!」

「おお、お前って意外とツツコミキャラなんだな。新発見」

そうさせてるのは君でしょ! と叫びたくなかったけど授業の予鈴がなったのでそれは叶わず、東島くんは涼しい顔で自分の席へと戻って行った。僕はそんな彼の後姿を恨みがましそうに見送る事しかできない。完全に東島くんにからかわれている……

その後も休み時間の度にクラスはμ'sなどのスクールアイドルの話題で持ち切りだった。僕の学校がたまたまなのかもしれないけど、これぐらいの注目度だったら穂乃果ちゃん達が廃校を阻止すると言うのも夢物語じゃないのかもしれない。単純だけどころ思った一日だった



「新しいメンバー？」

「うん、誘ったりしないのかなって思ってた」

日曜日、午前中の練習が終わってこの後はオフだという事でやる事もなかった僕は穂乃果ちゃんの家にお邪魔させてもらっている。時間も時間なのでお昼ご飯を一緒に食べながら気になっている事を聞いてみた

「新メンバーかあ。あんまり考えた事なかったよ」

昼食として机に並べられている野菜炒めを口に運びながら穂乃果ちゃんは考えるように言う。穂乃果ちゃんのお母さんはとても料理が上手で僕もつついっさり箸が進んでし

まう。うん、今日もご飯が美味しいです

話を進めようとする、僕達が食事をしているこの部屋に一つの足音が近づいてきた

「ただいまー…つて、悠さん来てたんだ」

「おかえり雪穂ちゃん、お邪魔してます」

ひよこつと顔を出したのは穂乃果ちゃんの妹である雪穂ちゃん。僕の一個下の中学三年生の彼女も僕の幼馴染に当たり、僕としては本当の妹のように可愛くて仕方ないんだけど

「おかえりつてこの家、悠さんの家じゃないんだけど」

「そ、そうだけどさ。一応帰ってきたんだからおかえりで間違つてないでしょ?」

「ふーん、まあいいや。お母さん、私のご飯はー?」

それだけ言って彼女はキッチンの方に引っ込んでしまった。こ、これが噂に聞く反抗期って奴ですか。言っておくけど僕と雪穂ちゃんはケンカをしたわけでも何でもない。再会したらあんな感じだったというだけだ

「ごめんね、雪穂ったらあんな調子で」

「いや、大丈夫だよ。雪穂ちゃんが言った事もあながち間違いじゃないし」

苦笑いをしながら謝ってくる穂乃果ちゃんに心配されないように、内心ショックを受けている事は隠しておこう。昔は「はるにい」なんて呼んでくれて僕に甘えてくれる可愛い妹分だったんだけどなあ。時の流れはこんなにも残酷です

「雪穂ったらはるちゃんがいなかったら「お姉ちゃん、余計な事言わなくていいから」

言葉を遮ったのはキッチンから出てきた雪穂ちゃん。その顔は明らかに不機嫌そう。手には自分の分の料理が乗ったお皿を持っている。彼女はそのままの足取りで僕

の左向かいに腰を下ろした

「えー、いいじゃん。雪穂ったら本当に素直じゃないんだからー」

口を尖らせて文句を言う穂乃果ちゃんに雪穂ちゃんは冷たく言い放つ

「お姉ちゃんが素直過ぎるの。そんなんじゃないつか悪い人に騙されちゃっても知らないからね」

雪穂ちゃんの厳しい言葉に穂乃果ちゃんはショックを受けているようだった。「とほほ…」なんて言いながら肩を落としている。姉として妹にそんなに簡単に言いくるめられたらいかんでしょう

「そ、それで穂乃果ちゃん？ 新メンバーの話に戻すんだけどね」

「あ、そうだった！ ところで何でまた急に？」

「いやね、調べてみたらグループ名のμ'sって九人の女神から取ったんでしょ？ だったらあと六人いた方が名前負けしないんじゃないかって思ってたね」

「そんな単純な理由でメンバー増やしちやっぺいいの？」

「い、いいんだよ。多分……」

「頼りないなあ……」

雪穂ちゃんの言葉が厳しいです、はい。これはまさか嫌われている？ 考えてみたら年頃の女の子がいる家に全然関係ない男がいたらそりゃ居心地悪いに決まってるよね。穂乃果ちゃんが例外なだけで。今後は高坂家に来るのは少し自重しようかな……

「とにかく、穂乃果ちゃんはどう思う？ 新メンバーについて」

「うーん……難しい事は良く分からないけどさ、人数が増えたらもっと楽しくなるよね！」

「お姉ちゃんの方が単純だった……」

「あはは、穂乃果ちゃんらしくて良いじゃないか」

穂乃果ちゃんは単純というよりもお馬鹿……げふんげふん、ナニモイツテナイヨ？

「よし、そうと決まれば新メンバーを探そう!!」

「決断が早い。流石穂乃果ちゃん。その行動力は僕も見習いたい所です」

「僕が言っておいてあれだけど当てはあるの？」

「うん！ ライブ観に来てくれた眼鏡かけてた子、覚えてる？」

「んー…確か、小泉さん？」

「そうそう！ 小泉花陽ちゃんって言うんだけどね、あの子アイドルが凄く好きみたいだから誘ってみようかと思ってるんだ」

そういえば一緒にいた星空さんもそんな事を言っていたっけ。アイドルに対しての情熱は凄そうだし悪くない人選かもしれない。この調子なら穂乃果ちゃんは小泉さんを誘いに行くだろうから後は本人のやる気次第かな

僕が個人的に気になるのは一緒にいた星空さんの方だ。アイドルの話になった時に少しだけ悲しそうな雰囲気になっていたというかなんというか。相手の感情を読むことに疎い僕には分かりそうにないけど、あの人もひょっとしてアイドルをやってみたいのかな？ 音乃木坂の学生でも星空さんの友達でもない僕にはどうしようもない事だけど、叶うのならもう一回ちゃんと話がしたい

そんな事を考えているうちに穂乃果ちゃんとはとっくにご飯を食べ終わっていた。彼女は、自身の胸の前で小さなガッツポーズを作って

「善は急げ、だね！ 明日学校に行ったら早速誘ってみるよ！」

「おおー、やる気満々だね穂乃果ちゃん」

穂乃果ちゃんのやる気に満ち溢れている笑顔を見ていると僕までやる気が満ちてくる気がする。我ながらなんて単純なんだろう

そこで穂乃果ちゃんは不意に思い出したように

「そうだはるちゃん？ 話は変わるんだけどね、ちよつとお願いがあるんだ」

「お願い？」

「うん。実はこの後、雪穂に勉強を教えてあげて欲しいなーって思ってるの」

「ええ!!」

大きな声で反応したのは僕ではなく、雪穂ちゃんだ



「い、いきなり何言ってるの!？」

「だってこの前勉強で分かんない所があるって言ってたでしょ？ 私が教えてあげられたら良いんだけど、この前見たら私も分からない所があって……」

えへへ、と穂乃果ちゃんは笑う。確かに穂乃果ちゃんが中学を卒業してから二年経っているわけだし、かなり忘れてしまっているのも無理はない。ならば確か少し前まで中学生だった僕の方が雪穂ちゃんの教師役としては妥当と言えるかもしれない

「お姉ちゃんったらすぐに思い付きで変な事言うんだから……ただでさえスクールアイドルのマネージャーなんて面倒な仕事を押し付けてるのにこれ以上悠さんの仕事増やしてどうするの?？」

押し付けられてるだなんて言い方は良くないな。僕が自分からやりたくてお手伝いしているんだし。少しだけ誤解されているのかもしれない

「雪穂ちゃんさえ良ければ分からない所は教えるよ。まあ、先生みたく完璧に教える自信なんてないけど……どうかな？」

「え、でも……」

「ほら、はるちゃんもこうやって言ってくれてるんだからさ！ どうせこの後勉強するつもりだったんでしょ？」

「それはそうだけど……」

休日まで勉強か。やっぱり雪穂ちゃんは真面目な子に育ってくれたようだ。受験生だから当たり前かもしれないけど、この時期は割とまだ気持ちが入っていない人も多かったイメージがある。それを思い出せば、この子は真面目の部類に入りそうだ

「どうしても嫌だつて言うならこの後僕は帰るけど、どうする？」

この後は練習も予定もなく、家に帰って何をするか考えていた所だったのだ。僕とし

でも雪穂ちゃんに教えることによって中学の勉強を復習できるというメリットがあるから悪い話ではない

雪穂ちゃんは難しい顔をして小さく唸っていたが、やがて

「……それなら、よろしくお願いします」

素つ気なく言っただけで頭を下げてきた。やはり嫌われているのかもしれない……僕は好きなんだけど、ってこんな事考えている僕は確実に気持ち悪いな、やめよう

片思いつてこんな感じなのかなあ、なんて思いながら食べ終わった食器を片付けてから雪穂ちゃんに連れられて彼女の部屋へと向かった

勉強を始めてから一時間ほど経過した。特に会話もなく、雪穂ちゃんは黙々と問題集を解いている。これ、僕いらないんじゃないかね？ そう思ったけど教えると言った手前、すぐに帰るわけにもいかないのだから彼女が使っていない問題集とノート、教科書を借りて中学校のおさらいをしている

パラパラと教科書をめくりながら

「そう言えば雪穂ちゃんはこの高校を受験するの？」

これを聞いていなかった事を思い出した。そのレベルに応じて勉強の教える範囲を変えなければならないのだから、これを聞かなければ僕は何もできないのだ

「お姉ちゃんと同じ音乃木坂……って言いたい所なんだけど、もうなくなっちゃうで

しよ?。」

ああ、流石にそれはもう知られているんだね。穂乃果ちゃん以外の口から聞くのは初めてだからやっぱり本当の話なんだ、と再認識した

「UTX学院にしようと思ってる。廃校になる学校を受けてもどうしようもないし」

あの学校綺麗だしねー、と付け加えてさらりと雪穂ちゃんは言った。聞いた話によると高坂家の女の人のほとんどが音乃木坂出身との事だったが、直接関係ない雪穂ちゃんには音乃木坂の思い入れがないのも仕方がないのかもしれない

だけど、僕が気になったのはそこじゃない

「でもさ、穂乃果ちゃん達が廃校を阻止しよう頑張ってるじゃん。まだ、分かんないよ」

「お姉ちゃん達が頑張ってるのは知ってるけど廃校をどうにかできるだなんて現実的

じゃないし」

そう、現実的じゃない。雪穂ちゃんの言っている事は何一つ間違っていない

音乃木坂学院の廃校は大人達の話し合いで決められた事だ。何の力もない学生に過ぎない穂乃果ちゃん達が何をどう頑張ったって、何かが変わるとは思えない。それが大多数の意見だろう

「…………だからこそ」

「えっ？」

僕は真っ直ぐ雪穂ちゃんを見つめて言う。言い返す

「僕は、信じてる。穂乃果ちゃん達なら何とかできるって」

目の前に座っている雪穂ちゃんは僕の言葉に呆気に取られているようだった。何を

言ってるんだろうと思われているだろう。それでも、もう言葉を止められない

「僕には分かるんだ。他の人には絶対できない事でもあの人なら何とかできるって。だって穂乃果ちゃんだから」

「それ、答えになってない……」

「そうだね」

そう言っ僕は笑ってしまった

自分でも滅茶苦茶な事を言っているなど思う。それでも、やはりこれも僕の本心だった

だから決めた

「よし、これから僕が雪穂ちゃんを音乃木坂に入れるように家庭教師をやるよ！」

「ええ!？」

「あ、雪穂ちゃんが嫌がつてもやるからね」

「い、意味分かんない……だから、音乃木坂はなくなっちゃうって」

「だからだよ。これは雪穂ちゃんと僕の勝負だ」

「勝負？」

「ますます意味が分からない、といった様子の雪穂ちゃん。当然だ。僕にだって意味が分からない。今日は凄く口と頭が回る日だなって思った」

「僕は雪穂ちゃんに勉強を教える。UTX学院の受験も問題なく合格できるようなレベルにまで引き上げてあげる。その代わり今だけは雪穂ちゃんには音乃木坂を第一志望として考えてもらう。もしも穂乃果ちゃん達が受験直前までに廃校を撤回できなかつ



たら雪穂ちゃんはそのままUTX学院を受験すればいい。だけでもしも撤回することができたのなら、雪穂ちゃんは音乃木坂学院を受験してもらおう」

「め、滅茶苦茶だよ……」

「ごめん、分かってるよ。だけどまだ僕の伝えたい事を言えてないんだ

「どうしてそこまで拘るの？ 別に悠さんは音乃木坂の生徒でも何でもなし、お姉ちゃんの我儘に付き合う義理なんてないでしょ？」

心底疑問だ、といった感じで言った。そういえばお昼ご飯を食べていた時の話で言いそびれていた事があったっけ

「誤解しているかもしれないけどさ、僕は穂乃果ちゃんに言われて嫌々お手伝いしているわけじゃないんだ。僕がやりたいから、少しでも力になってあげられたらと思って手伝ってるんだよ」

「……」

雪穂ちゃんは黙って話を聞いてくれている。何を考えているかは分からない

「穂乃果ちゃんがやるって言ったら僕はついていきたい。支えてあげたい。間違っている事があつたら教えてあげたい。そう思ってるから」

「こんな事、恥ずかしくて本人には言えないな。そう思っていると雪穂ちゃんは呆れたように」

「よくそんなクサイ台詞、次から次へと出てくるね。聞いているこっちが恥ずかしいよ」

「うぐ」

「……ほんと、お似合いだよね」

あまりにも小さい声だったので雪穂ちゃんがなんて言ったのかを僕は聞き取る事が

できなかった

「今なんて」

「まあ、そこまで自信たつぷりなら、良いよ。はるにいの言う勝負に乗ってあげる。その代わり」

ニヤリ、と意地の悪い笑みを浮かべて僕を見つめてきた。ヤバい、嫌な予感がするぞ  
これは

「他人の高校受験なんていう人生の大事な分岐点に口を出してくるくらいなんだから覚悟はできてるよねー？」

「え」

「この勝負、私が勝ったら私の人生に口出してきた責任……取ってもらうからね♪」

「うええええええ!？」

思わずテーブルに手をつけて立ち上がった。その際に大きな音をたててしまったが耳に入っていない

「え、ちよ、待って。責任って」

「ささ、勉強しなきや。分からない所はしっかり教えてよね? センセト」

開いた口が塞がらない、というのは今の僕の状態を言うのだろう。勢い余って大変な事を言ってしまったのではないか。それしか考えられなくなってしまった

この日、僕にμ'sのマネージャーの仕事の他に、雪穂ちゃんの家教師という新しい仕事が増えられたのだった

「はるにい、ここの問題が分からないんだけどさ」

「ん？ どこどこ……つて今呼び方！」

「どうしたのそんな大声出して」

「雪穂ちゃんの、反抗期が終わった……ッ!!」

嬉しさから思わず天井を見上げガツツポーズまで決める僕を呆れたように見つめながら雪穂ちゃんはポツリと

「意味分からない事言わないでよね……ほんと、締まらないんだから」

マナージャーに筋肉や体力は必要ないなんて思っ  
ていてもそれを口に出す事はできない

とある日の早朝

いつも通り穂乃果ちゃん達の朝練を眺めている僕です。今僕が読んでいるのはスポーツ医学の小難しい本です。さっぱり意味が分からないので今度もっと分かりやすいものを買った方が良さそうだ

そんな事を考えていた僕に休憩に入ってタオルで汗を拭いていた園田さんが一言

「林堂くんって細いですよね。運動とかしていないんですか？」

「ぐはあ!？」

いきなり僕の心にクリティカルヒット。バットで頭を殴られたぐらいの衝撃を受けた僕は地面に這いつくばるしかできないのだった！

「え、ちよ、ちよつと林堂くん!? どうしたんです!?!」

「今まで見たこともないような綺麗な倒れ方だったね」

「ひよつとしてはるちゃん、まだ運動苦手なの?」

その言葉に倒れている僕はコクコクと頷くことでしか返事ができない。僕の数多くあるコンプレックスの一つを指摘されたショックからしばらく立ち直れそうもない

「えつと……穂乃果。どういう事か説明してもらえますか?」

「うん。はるちゃんはね、運動が苦手なの。そりやもう悲しいぐらいに」

「ぐふう!!」

「そうそう、小さいときなんか雪穂にまで腕相撲負けてたもんね！」

「ぐはあ!？」

「穂乃果ちゃん……」

「全く、追い打ちをかけてどうするのですか……」

純粋に悪気もなく酷いことを言った穂乃果ちゃんに苦笑いを浮かべている南さん、呆れたように頭を押さえる園田さん。三者三様の反応を見せてくれるが、今の僕にそれを見る余裕はない。地面にひれ伏して啜り泣くことしかできない

「まあまあ、そんなに落ち込む事ないよ。人には向き不向きがあるわけだし。はるちゃんも運動音痴だからって気にする事ないよ」

「穂乃果ちゃん……」



「そうだ、人には向き不向きがあるんだ。僕が壊滅的に運動ができないからと言って何が悪いと言うのだ。そんな言葉をかけてくれた穂乃果ちゃんには僕の目には天使に見える」

「そういう訳にはいきません」

「へ？」

顔を上げた僕の前に立ち塞がったのは園田さん。その顔は妙にやる気と自身に満ち溢れている

「……ヤバイ、これは何だか嫌な予感がする!!」

「これから私が林堂くんの運動音痴を叩き直してあげます！」

「ええ!？」

な、なんでまた？ 別に僕が運動苦手だからって園田さんに迷惑はかからないんじゃないや

……

「私達のマネージャーたる貴方が運動ができないようでは指導に支障が出てしまうかもしれないかもしれませんからね。林堂くんの場合まずは身体作りからでしょう。そうとなれば専用のトレーニンングメニューを考える必要がありますね。今日の夜までに考えておきますから楽しみにしてください」

目が!! 園田さんの目が燃えている!! 普段は穂乃果ちゃんと南さんに向いている鬼教官としての瞳が僕をターゲットとして捉えているじゃないか!!

「林堂くん返事は!?!」

「は、はいー!」

反射的に返事をしてしまった。逃げるなんていう愚かな選択肢は、園田鬼教官の瞳の

前には存在しない。これは……死ぬな、僕

RPGで言えば選択肢はこんな感じ

戦う

仲間

道具

↓死ぬ

穂乃果ちゃんとか南さんから向けられる同情の視線が余りにも辛かった、そんな朝練で  
の  
一  
コ  
マ  
だ  
っ  
た

――

園田さんに死の宣告をされてから数日

「あの、大丈夫ですか……？」

「……」

神田明神の階段を上がった所で死んだように倒れている僕です。南さんの心配する声に返事をする気力すらありません。穂乃果ちゃんも面白そうに僕の体を指先で突っついてくる。全身が筋肉痛なので軽く触られただけでも痛い。ちなみにそれに文句を言う気力すらありません

「海未ちゃん、これは流石にやりすぎじゃないかなあ？」

「そうは言ってもまだことり達のメニューの半分程度しかやっていないんですよ？」

これは壊滅的ですね、なんてさらっと言い放つ園田さんは正しく鬼。僕の身体能力の無さは筋金入りだというのに、いきなりこの練習量はないでしょう。僕を本当に殺す気ですか

「とりあえず、朝練はこのぐらいにしておきましょうか。最初からあんまり飛ばして練習しても逆効果ですし」

最初は、つていうワードがとてつもなく不穏なんです。これ以上激しくされたら本当に死ぬ自身がありますよ、僕は

ともかく休憩を頂いた僕は這うように日陰へと移動する。肩を貸してくれようとした穂乃果ちゃんをやりわりと断り、何とか一人で近くに立っていた木を背凭れに座り込むことに成功した

「はあ……」

何とも情けない。たかが数日でこのザマだ

園田さんの言っていた事は本当で、僕の練習量は彼女達がこなしているその半分程度なのだ。完全に普段練習というか運動をしていないツケが回ってきている、というよりもあの三人、薄々気づいていたけど身体能力高くね？ よくあんなに激しいトレーニングを続けられるな、と呆れながらも感心する

三人は少し離れた所でまだ練習に精を出している。その時不意に、呆然と練習風景を眺めていた僕の隣に誰かが立った

誰だろう？ と思ってその人の顔を見たが、知らない女の人だった。巫女服を着ている事からここ、神田明神の関係者だろう

「ふふ、お疲れ様。今日も頑張つとるやん？」

「は、はあ……」

「そんなに警戒しなくてもええで？ 別に取って食おうなんて考えてないから」

これは警戒しているのではなく、知人ではない貴女と喋るのに緊張しているだけです  
「あの子達だけじゃなくてキミまで練習始めるなんて思ってたんよ。まさかス  
クールアイドルにでもなるつもりなん？」

「……」

「え、無言？ 少しは反応してくれないとウチも傷つくんやけど」

「……」

「え、ちよ、ちよつと、本当に無視するつもりなん？」

お返事したいのは山々なんですけど巫女さん。貴女は僕を見誤っている。僕は初対  
面の相手とペラペラと饒舌に喋れるほどのコミュ力は持ち合わせていません

「……よっぽどウチの事警戒しとるんやね。仕方ないから話だけでも聞いてくれる？」

巫女さんは少し悲しそうにそう言った。女の子のその目はズルい……僕が悪い事をしている気分させられる

「あ、えっと、すみません」

とにかく無視し続けるのは最低だと分かっていたので何とか声を絞り出す

「僕、初対面の人と喋るのが苦手で……別に警戒してるとかじゃないんです」

「あ、そうだったん？ それだったらいきなり話しかけちゃったウチが悪かったね」

「ごめんな？」 と申し訳なさそうな笑顔でそう言う巫女さんは多分僕より年上だろう。同じ年だと言うには体の一部が成長し過ぎている。どこがとは言わないけど



「……キミ、人見知りのくせにえっちなんやね」

「はう!? そ、そんな事ないですよ!？」

巫女さんは服の上からでもはつきりと分かる母性の象徴を腕で隠すようにして僕を見つめる。その瞳には確実に軽蔑の色が映っていた。あ、これ通報されるな

「女の子はそういう視線には敏感なんやから気をつけなあかんよ」

それは分かっているけどこれはある意味男の性だ。仕方がない、だって男の子だもん

しかしそうは思っても悪いのは十中八九、僕なので巫女さんに頭を下げて

「はい……ごめんなさい」

「うん、素直でよろしい。ところでキミの名前は林堂悠くんではないのかな?」

「はい……っつてどうして僕の名前を」

まさか知り合い？ どこかで会っていただろうか。しかし、少し考えてみても目の前の女の人の事は思い出せそうもない

「ああ、キミと知り合いとかじゃなくてあつちにいる子達が名前呼んでるのが聞こえてただけなんよ。そんなに深く考えんといて」

「あ、そうだったんですか。てつきりどこかで会っていて僕が忘れていただけかと思いました。えつと……」

「そういえばこつちも名乗ってなかったね。ウチの名前は東条希。あの子達と同じ音乃木坂学院の三年生なんよ」

よろしくね、なんて言って笑顔を作る東条さんはなんと穂乃果ちゃん達と同じ音乃木坂の人だった。しかも三年生。僕の二つ上の学年だ

「東条先輩、これからよろしく願います」

「そんなかしこまらんでもええんよ。別に同じ学校の先輩後輩でもないんやから、ね？」

無理です。一個上の園田さんや南さんですらやと慣れてきたのに今日会ったばかりで二個上の東条さんに馴れ馴れしくなんてレベルの高い事はできません

「それで、お話っていうのは何でしょうか？」

「そうそう、それなんやけどね。林堂くんは穂乃果ちゃん達のマネージャーやんな？」

「はい」

マネージャーらしいことをできていないので、一応ですけど

「えっと。それが何か？」

「そしてあの子の知り合いなんよね？」

「あの子？」

誰ですか、と聞く前に東条先輩の視線が僕の顔からずれる。僕の後ろの方を見ているようだった。そちらの方を見ると神社の本殿があつて――

「……あ」

その陰から特徴のある赤い髪がぴよこつとはみ出している。ひよつとしてあれで隠れているつもりなのかな……昔からちよつと抜けている所がある人だったからな

「真姫？」

はみ出していた赤い髪の毛がピクッ！ と揺れた。やっぱり真姫だったか。メールとか電話では興味ないとか言ってたけど、やっぱり気になってるんじゃない

「やっぱり知り合いやったんやね。と言つてもウチはライブの時に講堂を仲良く手を繋いで出て行くの見てたんやけどね♪」

「ええ!? 東条さんあの場にいたんですか……つてそうじゃなくてそんな言い方しないでください語弊があります!!」

「いやー女子高に忍び込むだけやなくて生徒と駆け落ちするなんてキミもなかなかやるやん♪」

「そんなんじゃありませんから!!／／／」

東条先輩は楽しそうにいやらしい笑顔を浮かべている。この人Sかよ。Sな先輩に對する僕の免疫は無いに等しいので対処法が分からない

僕をいじめてそんなに楽しいですか先輩!!

「いじめてるだなんて人聞き悪いなあ。ただ弄りがいがあるなあって思っただけなんよ。」

心まで読めるのかこの人は。僕の心の声が完全に筒抜けじゃないか。ひよつとしてエスパ―…？ 巫女さんだけにね

……あれ、気がついたら真姫がいなくなってる。真姫も弄られてたからね、きつと恥ずかしくなって逃げたのだろう。ひよつとしたらいるのがバレて恥ずかしくなって帰ったのかもしれないけど細かい理由はエスパ―などではない僕には分からない

「そ、それで真姫が一体どうしたんですか？」

「おっと、危うく本題を忘れるところやった。危ない危ない」

おどけて言ってみせるこの人はどこまで本気で言っているのかイマイチ分からない。今は凄く真面目な顔をしているし、これが食わせ者って言われるような人なのか

「さっきまでそこにいた……確か、西木野さんやったかな。あの子と知り合いの林堂くんからも言っていてあげて欲しいんよ。スクールアイドルになってくれって」

「……どうしてそんな事を僕に？」

「あの子が穂乃果ちゃん達に……μ'sに必要やから」

「どうしてそれが分かるんです？」

真姫の今後の高校生活に関わる話だ。僕も自然と真面目なトーンになる

「カードが告げるから、かな」

「カード？」

巫女さんはどこからかタロットカードを取り出す。占いででもできるのかもしれないが、スピリチュアルな方向には詳しくない僕はカードの絵柄を見せられても意味など分

からない

「西木野さんって素直に自分の言いたい事が言えないタイプやろ？ だから知り合いの林堂くんから言ってあげて欲しいんよ」

東条さんと真姫が友達だとは思えないが、この人は真姫の事はある程度理解できているようだ。 فقط…

「だからキミがあの子の背中を押してー」

「その必要はないと思いますよ」

この人は僕のもう一人の幼馴染の事を理解していないみたいだね



――――

希 s i d e

「その必要はないと思いますよ」

ウチの言葉を林堂くんの言葉が遮った。その声は今までの彼の声とは違い、自信に満ちていた

「僕が真姫にそんな事言わなくても、真姫はμ'sの一員になると思います」  
「どうしてそんな事言い切れるん？」

しかもそんなに自信満々に。ウチはそこまで言う彼の真意が気になった

「別に僕は先輩みたいな占いとかできませんから、簡単な事です」

「簡単な事？」

はい、と林堂くんは真面目な顔から一転、笑顔になつて

「信頼です」

その言葉の意味を理解するのに数秒かかった。信頼といえは林堂くんから西木野さんに対する信頼という事だろうか

「それもあります。真姫は確かに素直じゃない所はありますが、しつかりとした自分を持つていますから。言いたい事ははつきりと言つてきますよ。そしてもう一人」

林堂くんはウチから視線を外した。その視線を辿れば、いるのは未だにトレーニングを続けている三人の女の子。その中の一人、高坂穂乃果ちゃんという女の子を指して

「穂乃果ちゃん、真姫を放っておかないと思います。ちょっと前に一緒にスクールアイドルをやりたいたって言ってましたから。東条先輩はあの人の口癖知ってますか？『やるつたらやる！』ってよく言うんですけどね」

かなり強引なんですよ、と苦笑する彼も、きつと穂乃果ちゃんに振り回されてきたんだろう。林堂くんの腕を引つ張る彼女の姿が簡単に思い浮かんでしまう

「だから僕がこの話に出しゃばる必要はないと思います。どうしても話が進まなかったら変わってくるかもしれないですけど……多分、大丈夫ですよ。穂乃果ちゃんも真姫も、二人ともやる時はやってくれる人ですから」

「へえ……」

そう言いながら笑う林堂くんを見て、意外と強い芯を持っている人なんだと思った。最初に話した時のような頼りなさというか自信がない感じは今では全く存在しない

別人のような雰囲気と言っても過言ではないと思う

「随分と信頼しとるんやね、あの二人の事」

「はい、信じています」

これも即答。しかも恥ずかしげもなく。ウチとしたことが、西木野さんに関しては何も憂やったかもしれないね

「それにしてもあの二人は幸せやなあ」

「え？」

意味が分からない、といった感じの林堂くん

「だって……近くにこんなにも真剣に自分を想ってくれる人がおるんやからね♪」

「やっぱり意味が分からないという顔をしていた彼だったがそれは一瞬で、すぐに顔を真つ赤にした。ふふ、初手で可愛いやん？」

「わ、ばっ?! その言い方は良くないです非常に良くないですよ!」

「でも事実だし? ウチは間違った事なんも言っていないと思うんやけどな」

「せ、先輩〜!!」

涙目で訴えてくる目の前の少年には先程までの堂々とした様子は全くない。あまりのギャップが逆に可愛く見えてくるほどだった

目の前であんなに惚気話にも近いもの聞かされたんやから、これぐらいはえええよね♪

結局、朝練が終わる時間になるまで林堂くんを弄り倒しちやっただけ……彼と関わる事になって、これから面白い事になりそうだとウチは何となくだけど思った

分かれ際に涙目で恨みがましい視線を送ってくる彼にぐっ、とくるものがあつたのは  
内緒やね

――

真姫 s i d e

私は走った

運動がお世辞にも得意とは言えない私はすぐに息切れしてしまっただけ、それでも  
走った

一刻も早くあの場所から離れたくなったから

わざわざ早起きしてあの場所に出向いたというのに。どうして今度は逃げるようにそこから離れたのか

理由は簡単

あの人、他の女の人と楽しそうに喋っているのを見ていられなくなったからだ。あの巫女服を着た女の人は音乃木坂の三年生。いつの間に彼と知り合いになったのだろうか？

少し離れた所にいた私には二人の会話までは聞こえてこなかったけれど、それでも表情から楽しそうな雰囲気は伝わってきた

それを見ているだけで胸が苦しくなった。無性にイライラした。彼が高坂先輩の話をした時に感じたものと似ているけどそれよりも強烈だった

今までこんな感情知らなかったのに。一体私はどうしてしまったんだろうか？

「はあ、はあ……」

流石に体力の限界で立ち止まると、家のすぐ近くまで来ていた。我ながらよく走ったものだ、なんて思った

とりあえず家に戻ったらシャワーを浴びて汗を流して一旦落ち着いて頭の中を整理しよう。こんな状態ではとてもじゃないが授業に集中できるとは思えない

彼——林堂悠くんは私の小学校時代からの友達。異性の友達がほとんどいない私にとって、彼は唯一と言っていい位の友人

その友人が他の女の子と喋っているのを見てイライラする？



それじゃあまるで

「嫉妬、じゃない……」

掌をギュツと握りしめて自分の頭を軽く叩く

本の中の世界でしか知らなかったものが今自分の中にあるということを見舞いし  
られてしまった事を認めたくない私は、とりあえず次に彼と会ったら一発お見舞いしよ  
うと心の中で誓ったのだった

# 人を見た目で判断してはならない、 というのとはもはや常識

学校が終わり、僕は一人秋葉原にいた。穂乃果ちゃん達の練習にも顔を出してあげたいのだけれど、今日は音乃木坂で練習をしているので部外者である僕は音乃木坂に入る事ができない。こればかりは致し方ないね

そして一人で秋葉原にやって来た理由はというと、スクールアイドルの情報仕入れる為に新しいCD及びPVを探しにやって来たのだ。ダンスや作詞を考える上で全くの素人である僕は他のスクールアイドルのものを参考にして勉強しているのだ

…パクリじゃないよ。オマージュ、またはリスペクトだからね

最近になってアイドルの曲を聞き始めたわけだが、これが意外と悪くない。以前に真姫が『軽い音楽』と馬鹿にしていたが、それは間違いであると思いはじめた。確かに

色々な曲があるのでイマイチなものもあるが、それ以上に素晴らしいものも沢山ある。トップクラスの人気を誇るスクールアイドルの曲はプロのアイドルのものと比べても遜色ないと僕は思う

と、いうわけでやってきましたアイドルグッズ専門店。スクールアイドルのCDは普通の店にはなかなか置いていないのでこういった専門店に足を運ぶ必要がある

「えっと……」

スクールアイドルのコーナーに着き、目当てのものを探す。今日はどこのグループのを買おうかな。プロではなくアマチュア扱いの彼女達のCDは比較的安く購入することができるので僕の財布にも優しいものとなっている。いつかはμ'sのグッズやCDもお店に並ぶようになったら嬉しいなあ

「あ」

そんな事を考えながら探していると気になるCDを見つけた

以前に偶然ライブを観戦した『A—RISE』というグループの新曲PVだ。あの時は知らなかったが、彼女達は全国に群雄割拠するスクールアイドルの頂点に立つグループなのだ。言わばこれからμ'sが目標としていくグループの一つである

これを買わない手はないな、と思いCDに手を伸ばすと

「あ」

「んっ」

ほとんど同時に僕とは逆の方から手が伸びてきた。見れば僕より小さい女の子で髪の毛をツインテールにして結んでいる子だった

見た所、どうやらこのお店に置かれているラスト一枚らしい。僕とその子はCDを手に触れたまま少しの間見つめ合う。二人の間には会話はなく、お店で流れているとあるアイドルの軽快な曲だけが僕の鼓膜を打った

しかしその静寂は長くは続かない

「にこの方が早かったわよね」

「え」

「だから、私の方が早かったんだからこれは私が買っていつでも問題ないわよねって  
言ってるのよ」

な、なんだこのちびっ子!? 初対面の相手に対してやけに高圧的じゃないか!……少  
し怖いなんて思ってないですよ、ええ

「ほとんど同時だったと思うんですけど」

言った瞬間、ギロツ! と可愛らしい容姿には似合わない瞳で女の子に睨み付けられ  
た。先程の言葉訂正いたします。この子、怖いです

即座に逃げ出したい衝動に駆られるが、同時にこのCDが欲しいという葛藤に苛まれる。どうかこの子からCDを頂く良い手段はないのか……なんて考えていると

「まあ、いいわ。はい」

なんと、意外にもあっさりと譲ってくれたのだ

「何をマヌケな顔してんのよ。いらないうって言うんなら私が買っちゃうわよ」

マヌケ……初対面相手に失礼にも程がある。でも譲ってくれたのはありがたく受け取ろう

「いいのよ、私はそれもう何枚も持つてるから」

「へ？」

なんだって!? だったら尚の事僕が優先して買うべきだろう。先程からの暴言を言われる筋合いは全くないではないか

え? さつきからどうして言葉にしてないのかって? そんなの目の前のちびっ子が怖いからに決まってるじゃないですか

「ど、どうして何枚も買うんですか?」

「はあ? アンタ何も知らないのね」

呆れたようにジト目で僕を見つめるちびっ子。ぐぬぬ……温厚な僕でも我慢の限界があるんですよ

「このCDには抽選券がついているのよ」

「抽選券?」

「そ。A—RISEのメンバーと会う権利が当たる抽選券」

なん、だと……それならばこのCDがこの店に一枚しかなかったのも納得できる。この人のようなファンが沢山買っていったのだろう。それにしても実際に会う権利だなんて本当にプロのアイドルみたいだ

「これで当たったらここに感謝しなさいよね」

「にん？」

「そ、私の名前」

にこさん、か。変わった名前だと思ったのは内緒にしておこう。ちびっこもといにこさんは怖い人だが同時に良い人っぽい。譲ってくれたのだからありがたく買わせていただく

「ありがとうございます」



「気にしないでいいわよ」

素っ気なく言うにこさん。そういう感じなら最初から大人しく譲ってくれば良かったのに……なんて思っけていても声に出せない

「場所は……あ、ここでやるんですね。抽選会」

「そうよ。当たるのは三人までだから多分当たらないと思うけどね」

「三人ですか……」

何人がCDを買っているかなんて知らないけど三人しか会えないとなると、確率はかなり低そうだ。でも宝くじが当たるよりは高い確率だろう。そんな安直な考えから抽選会に行ってみるだけ行ってみようかな、なんて思った

「にこさんも行くんですね？ 抽選会」

「当たり前じゃない。その為にCD買ってるんだから」

プロのアイドルでも似たような事をやっているわけだが上手い商売だなんて思った。買う方も好きで買っているんだから文句はないだろうけど、何枚買っても会いたくないという気持ちは凄い。僕にはまだ理解できない領域の話だ

そういった面で言えばこの目の前にいるにこさんは凄い。ミーハーという言葉の方はあまり良くないかもしれないが、一つのものにどんな形であれ情熱を注げるのは凄い事だ

そうだ、ちよつと一つ聞いてみようかな。ちようど無関係な人の意見を聞きたいと思っていたし

「にこさんはスクールアイドルにも詳しくそうですね」

「ん？ まあ、ね。にこぐらいになれば大体のスクールアイドルは分かると思うけど。」

それがどうかしたの？」

「μ、sってスクールアイドル知ってますか？ 最近できたばかりみたいなんですけど」

聞いた瞬間だった

にこさんの表情が一変する。怒りとも妬みとも言えないような複雑な表情に

「μ、s……ですって？」

俯いてわなわなと震えだしたかと思えば一気に僕に詰め寄って来て

「アンタ、あんな連中に興味があるっていうわけ？」

「ひっ!?!」

先程睨み付けられた時とは比べものにならないほどの形相。僕は情けない声を出し

てしまった。自分より身長の小さい女の子に首元を締められている図はかなりシユールだろう。周囲にいる他のお客さんの視線が集まるが、にこさんの目には入っていないようだ

「あんな奴らねえ……ッ！」

「に、にこさん……？」

苦しそうに声を出す僕を見て我に返ったのか、にこさんは慌てて首元を締めていた手を離れた。そしてバツが悪そうに目を逸らして

「……………めん」

小さくそう零すのにこさんは店から逃げるように飛び出して行ってしまった。呆然とする僕だけがその場に取り残される。騒ぎを聞きつけた店員がやって来て「大丈夫ですか？」と言われたので「大丈夫です」と言っておく。店員さんに手に持っていたA—RISEのCDを手渡して、一緒にレジへと向かう

会計を済ませながら考える

どうしてにこさんはあそこまで怒ったのだろうか。アイドルが好きだと言っても好みは別れるので、にこさんがμ'sを嫌いだったとしても不思議ではないけど……それだけじゃない気がする。僕の当てにならない勘でしかないけれど

アイドルショップを後にして帰り道をのんびりと歩きながらも僕は今日の出来事で頭が一杯だった。顔を不特定多数の人間に見られる活動だからこそ、見てくれるのは応援してくれるファンだけとは限らない。アンチと呼ばれる心ない人も必ずいるのだ。それを再認識させられた形になった

……そう言えば、聞くのを忘れたんだけどにこさんって何歳だったんだろう？

数日後の、僕は再びアイドルシヨップへとやって来た。目的は買ったCDについていた抽選券。その抽選会が今日だったのだ。数日前に買った僕は運が良かったのかも知れない。にこさんに感謝しなきゃいけないね

今日は休日だという事もあってか、アイドルシヨップには凄い数の人が集まっていた。これ、全員が抽選会の為に来てるの？ 流星人気ナンバーワンスクールアイドルのA—RISE、文字通り規模が違う

いやー、目標は遠いなあ。なんて思っても僕が勝手にA—RISEを目標にしているだけなんだけどね。でもμ'sがこれぐらい人気になれば廃校阻止という穂乃果ちゃん達の目標も現実味を帯びてきそうだし、本当に目標にしてもいいかもしれない

「抽選会にお越しの方はこちらに集まってくださいーい!!」

そんな事を思っていると店員のお兄さんがマイクを使ってそう言った。人が集団となってお兄さんがいる方に移動していく。集まっている半分以上の人間から殺気を感じるのは気のせいだと信じたい。これはもしも抽選に当たったら後ろから刺されないように気をつけなきゃ、なんてね

お兄さんに連れられて僕達はそのままお店から出た。そこには小さなステージが設けられていて、お兄さんはそこに上がって

「本日はお越しいただきましてありがとうございます!! これより抽選を開始しますので、皆さんお手持ちの番号を確認してくださいーい!!」

ポケットに入れてあった抽選券を取り出して数字が書いてある部分へと目を落とす。えーと、僕の番号は何番だったかなー…

「ちよつと」

「はい? ……つてにこさん」

袖を軽く引つ張られたので振り返るとそこにいたのはなんと先日C Dを譲ってくれたにこさんだった。ひよつとしたらまた会うんじゃないかと思つていたけれど、まさか向こうから声をかけてくれるとは

「えつと、何か用ですか?」

「特に用があるつてわけじゃないわ。ただ見かけたから声をかけとこうを思つただけよ」

「あ、そうですか」

「……」



「……」

「ちよつと！ 何か喋りなさいよ！」

「え？」

「え？ じゃなくてせっかくにこが話しかけてあげたんだから何か気の利くような話をしなさいって言ってるの！」

「……えつと、今日は良い天気ですね？」

「そのどどこが気の利いた話なのよ！ ただの挨拶どころか語尾が疑問形のせいで挨拶にすらなつてないじゃない！」

凄い剣幕でまくし立てるにこさんに僕は思わず後ずさる。知らないから仕方がないとは思うけど僕から気の利いた話が咄嗟に出てくるわけがないじゃないですか。無茶ぶりも良い所ですよ

「けどそんな事を微塵も知らないにこさんは納得しそうにない。だから僕は少しだけ話題の種を探した」

「……そうだ。にこさんの抽選番号は何番ですか？」

「私は……203、093、145、024……」

「ちよ、ちよっと待ってください。何枚買ったんですか？」

「……内緒よ」

「内緒ってどれだけ買ったんですか……」

「うるさいわねえ、良いじゃない別に。それよりアンタこそ何番なのよ」

「僕の番号は111番です」

「うわ、ゾロ目じゃない。ひよつとしたら当たるかもよ?」

「あはは、これだけの中から選ばれたら僕の今年の運氣が全て吸い取られちゃいそうですね」

そうは言いつつも抽選番号がゾロ目だと知った時には思わずテンションが上がってしまっていた。コンビニとかのお会計でもたまたまゾロ目とかだと何となく気分が良  
いよね?

「あ、抽選始まるみたいよ」

にこさんの言葉の通り、それらしい事をマイクを持った店員のお兄さんが喋っている。いつの間にかお姉さんの店員までいて、その人は大きめの箱を抱えていた

「この箱の中に皆さんの抽選番号が書かれた紙が書いてあります! これから引かれた紙に書いてある番号をお持ちの方が見事当選者になるわけですが……今回皆さんの中

からラッキーな人を選ぶのは自分達ではありません」

店内がざわつき始める。店員さんが選ぶのではないとしたら誰が選ぶと言うにしろ。まさか……

店員さんは、してやったり、といった感じの意味深な笑みを浮かべて言い放った

「もう予想のできた人もいるかもしれませんがね！ それではどうぞ、A—RISEの三人でーす!!」

「え」

言われて店の中から出てきたのは本当にA—RISEだった。僕の小さな驚きの声は周囲の爆発的な歓声によって完全に掻き消されてしまった。驚きで声も出ない僕とは対照的に、にこさんはすごく嬉しそうに声を出している。この人は本当にA—RISEが好きなんだなあ

A—RISEは観衆に手を振りながらステージへと上がる

うわあ……二回目の生A—RISEだ。ミーハーなファンではないと思うけど正直かなり興奮しているのが自分でも分かった。あ、店員さんが綺羅ツバサさんと握手してる。純粋に羨ましい

「これからA—RISEのメンバーに一枚ずつ紙を箱から取り出ししてもらいます。さあさあ皆さん、自分の番号を引いてもらえるように祈っていてくださいねー！」

そこで軽快な音楽がBGMとして流れ始めた。これはA—RISEの新曲だ。やっぱりカッコイイ

しかしこの曲は……μ'sの三人にはあまり似合わなそうなタイプな曲調だな。でも、こういうカッコイイ感じの曲も歌えると良いと思う。だからこそやっぱり新メンバーは必要だね

「それでは最初のラッキーな人を選んでいただきます！ 最初に引いてくれるのは誰で

すか？」

「じゃあ最初は私が引こうかしら」

名乗り出たのは優木あんじゅさん。おっとりとした雰囲気を持ついかにもお嬢様、といった印象を受ける人だ。もちろんすぐく可愛い。南さんもこの人と似たタイプだと個人的に思っている。甘々な声質とかね

会場で流れているBGMが少しだけ小さくなり、彼女が箱に手を入れるのと同時に観衆の声も無くなっていた

誰もが息を？む

僕も期待していないとはいえ、もしかしたら、という思いでここにいるわけで

当たれ当たれ当たれ当たれ当たれー！！

「私の引いた番号は……」

そこで完全に周囲の音が消えた。周りを見るとほとんど全員が祈るような体勢になっている。隣にいるにこさんも両手を胸の前に置いて祈るように目を瞑っている

静かなのもあつてドキドキする。その場の静寂はあんじゅさんの声によつて破られる

「……174です」

あんじゅさんが読み上げた番号は僕のものではなかった。当たり前と言つては当たり前なんだけど、やっぱりシヨックだ

遠くの方で女の人の歓喜の声があった。羨ましいなあ、きつと当たったんだ

隣にいるにこさんはがっくり肩を落としている。あんなに沢山買っているにこさんですら当たらないのか。これは分かっていたけど絶望的だ

「174番の方、おめでとうございませう！ 抽選会が終わったらスタッフが誘導しますのでステージの方へといらしてくださいね。それでは次の番号いってみましょう！」

「次は私が引こう」

言って、前に出たのは統堂英玲奈さん。黒髪のロングヘアで背が高い、かなりカッコイイ雰囲気の人だ。余談になるけどクールな雰囲気と見た目から女性のファンがかなり多いらしい。男の僕から見ても格好良いんだから女の人から見たらもっと格好良く見えるのかもしれない

遠目から見る感じでは身長は僕と変わらない気が……いや、自分の身長の話はやめよう。虚しくなるだけだ。あれ、なんだろう目から汗が

そんな馬鹿みたいなことを考えている間に、英玲奈さんは箱の中に手を入れていた。うう、どうにか当たらないかな。神様、お願いします何でもしますから僕にA—R—I—S



Eと会うチャンスをご覧ください

あ、やっぱり何でもは無理ですごめんなさい

既に彼女は箱の中から番号が書かれた紙を選び終わっていた。それをまじまじと見  
つめてからゆっくりと、その番号を発表した

「私の引いた番号は」

再び静寂。誰もが自分の番号であることを祈っているだろう

僕も当たらないと薄々分かっていながらも、心のどこかで期待していた

もしかしたら、と

そして生きていけばもしかしたら、なんてことは山ほどあるのだ

「……111番だ」

聞き間違いかと思った

その為僕は名乗り出る事ができないでいた。司会を務める男の人が何かを言っているが、やはり僕は反応できないでいた

隣にいるにこさんに目を向けると、口を大きく開けてパクパクとさせていた。それを見て僕はようやく我に返って

「あ、当たった……?」

いつの間にか握り締めていた抽選券に目を落とすとそこに書かれている番号は間違いないく111番だった。ほ、本当に当たった!?

「……111番の抽選権をお持ちの方いらっしゃいませんか?」

聞こえてきたお兄さんの声と、横にいたにこさんに肘で突かれたことよってようやく名乗り出る事ができた

「は、はい僕です!!」

言った瞬間、周囲から殺気と羨望の視線が僕に集まる。思わず身を縮めてしまったが何とかステージの方へと視線を向けた

ステージの上にいるA—RISEのメンバーと目が合った：気がした。やはり三人共美人だよなあ

これからこの三人と話せるかもしれないと思うと嫌でも心が舞い上がるのを感じてしまう

そんな事を考えていると、ステージ上の綺羅ツバサさんの表情が気になった

何故か驚いているというか、嬉しそうにしているというか。何とも表現しづらい表情

を浮かべている

彼女がどうしてそんな顔をするのかエスパーでも何でも僕に分かるはずもなく、その理由を考えているうちに抽選会が終わってしまった

僕を含めて当たった三人はこの後、店の奥にある事務所に来てほしいと言われてその場は解散になった

ううー…なんだかんだで凄く楽しみになってきたぞ!!

ちなみにあんなに買っていたにこさんに神は微笑んでくれなかった。がっくりと頷垂れるにこさんの背中はいつもより二回りほど小さく見えた

僕はそんな彼女を見かねて思わず声をかけることにした

「あ、あのにこさん」

「…なによ」

振り返ったにこさんの瞳には嫉妬と羨望、悔しさがはつきりと映っていた。いくら当たりたかったからってそんな目で見なくても良くないですか？

しかしその瞳に臆しては話が進まない。僕は握っていた抽選券を差し出した

「…何のつもり？」

「これ、にこさんがCDを譲ってくれたおかげで当たったんです」

そもそも僕の当初の目的はCDそのものであつて抽選券は副産物でしかないのだから

「だからこれはにこさんに」

「いらないわ」

「あげま……つて、ええ？」

僕の声に被せる形で断られてしまった。え、本当にいららないんです？

断られるとは思っていなかった僕は思わず呆けてしまった。僕の手の上にある抽選券が受け取り手を失って風によって虚しく揺れる

「な、なんでー」

「簡単な事よ。それ、アンタが買ったものじゃない」

言葉の意味が分からない。僕があげると言ったのだからにこさんが断る理由にはならないのではないか？

「にこが譲ったおかげなのかもしれないけど、アンタが買った時点でその抽選券はアンタのものなのよ。それに……アンタだってA—R—I—S—Eに会いたいんでしょ？」

「まあ、それは……そうですけど」

「だつたらなおさら受け取れないわね。ここに比べたらまだまだにわかだけど、アンタもファンの端くれとして精一杯楽しんでくることね。そうじゃないと外れた他のファンやA—R—I—S—Eにも失礼つてもんよ」

言うだけ言って、彼女は僕に背を向けて立ち去ってしまった。そして僕はその後ろ姿を見送る事しかできない

小柄な僕よりもさらに小さなその背中が何故か今は凄く大きく見える……にこさん、何だかカッコいいです

好きだからこその拘りがあるのだろう。本当にあの人は尊敬できる人かもしれない

ともかく、にこさんと別れた僕は店の奥へと向かうべく歩きだした。こうなつたらにこさんの言う通り全力で楽しむべきだろう。なんだかんだで僕もA—R—I—S—Eに会え

るのはかなり楽しみなのだから

ウキウキした気持ちを抑えながら僕は「スタッフ以外立ち入り禁止」と紙が貼られたドアの中に入っていった

……あ、またにこそさんが何歳なのか聞くのを忘れてた



## 座談会にて

にこさんと別れ、店の奥のスタッフルームに案内された僕を含めた三人の当選者は、スタッフのお兄さんから説明を受けていた

A—RISEとの座談会とも言うべきこのイベントには当然だがいくつかのルールがある

- 1、
  - ・握手やサインなどを求めるのは不可
- 2、
  - ・写真やビデオ撮影をした場合は即退場
- 3、A—RISEのメンバーが不快だと感じるような言動をしてはいけない

他にも細かいルールはあるがおおまかに言うところな所だ

僕以外の二人は最初に当たった僕より少し年上だと思われる女のひと、最後に当たった中学生風な男の子だ。僕達三人を見るだけでも様々な年齢層がスクールアイドルに興味を持っているのだと分かった

会場には僕よりも遥かに年上だと分かる人達も沢山来ていたし……A—RISEが特別なのもかもしれないけど、本当に色々な人が見ているんだなと思った

僕ら三人は知人でも何でもないので当然会話などなく、メンバーが部屋に入って来るのを黙って待っている事となった

「……あの」

はずだったのだが

隣に座っていた女の人が声を発した。僕ともう一人の男の子は彼女の方を向く

「ふ、二人は誰推しなんでしょうか。もちろん三人共好きだとは思いますが、特に誰が好きなのか気になってしまってます」

推しだなんてあまり考えた事なかったな。僕はA—R—I—S—Eというグループのファンだから特別誰が好きっていうのはないからね

僕が少しでも回答に困っていると、先に隣に座っていた男の子が答えた

「俺はあんじゅさん推しです。見た目の可愛さもそうなんですけど、あの柔らかかそうな雰囲気……たまりませんよねえ」

ほう、と物憂げに息を吐く少年は正直少しだけ気持ち悪かった。これがアイドルオタクというものか、と僕が圧倒されていると、やや興奮した様子の女の子が

「あんじゅさんも良いですよね！ おっとりした雰囲気も声も可愛いですし。でもでも、私はやっぱり英玲奈様が一番なんですよね！」

英玲奈『様』？ A—R—I—S—Eほどのトップクラスのスクールアイドルになるとメンバーを様付けで呼ばなければならない決まりでもあるのだろうか？

「身長高いし綺麗だしカツコイイし！ 美しさと凛々しさを兼ね備えたあの感じ……堪らないんですよねえ……」

こちらの女性もうつとりとした様子で、ほう、と息を吐いたのを見て先程の少年と同じ人種なのだと僕は悟った

……こんな濃い人達と一緒にだなんて無事に座談会を終える事ができるのかと猛烈に心配になってきました

「それで貴方は誰推しなんですか？」

「ぼ、僕ですか。えっと……」

ついに僕に白羽の矢が立ってしまった。この二人のような歪んだ(?)感情など持ち

合わせていない上に、初対面の人間と会話のキャッチボールをしなければならぬというダブルパンチだ。僕の胃がギリギリと悲鳴を上げている気がして仕方がない

二人の視線が僕に突き刺さっている。これは下手な事を言える雰囲気ではないと察した僕は必死に言葉を探した

「ぼ、僕はですね、その……綺羅ツバサさんが一番好きですね。顔も可愛いですし笑顔がとっても素敵ですし、それに、その……言葉では上手く言い表せられない魅力があると思いますか……」

「ああ分かりますよ！ ツバサさんには他のスクールアイドルからは感じられない絶対的なカリスマ性がありますよね!!」

「あんじゅさんや英玲奈様のようなトップクラスのアイドルが傍にいてなお色褪せないその魅力……A—R—I—S—Eのリーダーは彼女にしか務まらない!」

熱く語りだす二人にすっかり置いて行かれています。この人達コミュ力高すぎです。

オタク怖い

その時、扉が開いて女の店員さんが入ってきた。彼女はニコニコしながら喋り始める。「はいはい、大変お待たせいたしましたー。これからA—RISEのメンバーとの座談会を始めたいと思います。マナーを守って有意義なものにしてくださいね！」

言って、店員さんはすぐに部屋から出て行った。それと同時に別の人間が入れ替わりで入ってきた

それは当然

「三人共初めまして！ 私はA—RISEの綺羅ツバサよ。よろしくね」

「私は藤堂英玲奈だ。よろしく頼む」

「優木あんじゅよ。今日は短い間だけどよろしくね♪」

当然、A—RISEの正規メンバー

当たり前なんだけど、本物のA—RISEだあ……心なしか眩しいオーラのようなのが見える気がする。気を抜くと圧倒されそう。ふと、横の二人を見ると卒倒寸前のように見えた

え、この三人つてとんでもない覇気でも纏ってるんです?? 凄むだけで並の人間は意識を保ってられない的な覇気とかやめてください僕如きじゃ耐えられるわけがないじゃないですか

「皆さんそんなに緊張しないでください。今日は気軽に、そうですね……友達と話す感じで私達と接してくれたら嬉しいんですけど」

ツバサさんがそんなことを言っていた気がするけど、僕の心臓の音がうるさすぎてそれどころではなかった

「え、えっと！ それじゃあ、質問してもいいですか!？」

「はい、どうぞ。答えられる範囲でなら何でもお答えしますよ」

「そ、それじゃあ……」

アイドルオタクの少年の言葉を皮切りに、座談会というかA—RISEを質問攻めにする会は進んでいった。最初は緊張していた様子だったアイドルオタクの二人も時間が進むにつれて緊張もほぐれていったようで、ガンガン質問をするようになった

え、僕ですか？ これまで緊張し過ぎて何も喋れていません。それどころか周りがない質問をしてどんな回答をしているのかさえ把握できていません

はるか の めのまえが まっしろに なった！



冗談抜きで今の僕はそういう状態に陥ってしまったている

こんな貴重な、僕の人生で二度と起こらないであろうイベントだというのに。僕は自分の人見知りの性格を呪った。てかこれはもはや人見知りとかのレベルでは無くて病気かもしれない

「ねえ貴方、緊張しているの？」

「ひゃい!？」

僕の目の前に座っていたツバサさんからそう声をかけられて思わず変な声が出てしまった。しかも「ふふ、変な声ね」なんて笑われてしまったので凄く恥ずかしい……本当に穴があつたら入りたいよ……

「おいツバサ、あまりからかうのはよせ」

「ごめんね、つい面白くって」

小さく笑うツバサさんに呆れたようにしている英玲奈さん。スクールアイドルの頂点である綺羅ツバサにからかわれるというのはある意味凄い事なんじゃないだろうか。少しというかかなり情けなくはあるのだけど

しかしおかげである程度、緊張がほぐれたので会話のネタを探すことにした

「あ、あの僕少し前にあった秋葉原でのライブ観たんですけど」

「やっぱり!!」

「へ?」

何故か大きな声を出して座っていた椅子から身を乗り出しそうになったツバサさんを「ツバサ」と英玲奈さんが手で制した

「えっと……」

困惑する僕を置いて、隣にいたアイドルオタクの二人組が「羨ましい」とか「私も行きたかった」とか言っていた。二人はあまりにも興奮し過ぎていてツバサさんの様子がおかしい事が気になっていないようだった。気づいても良さそうなものだけどね

「それでそれで？」

「は、はい？」

「ライブの感想とか聞かせて欲しいのだけど」

ああ、と僕はツバサさんの言葉の意味を理解して

「素晴らしかった……です。実はあれがスクールアイドルのライブを観たのは初めてだったんですけど、それでもA—R—I—S—Eが一番だつていう理由が分かった気がしました」

「ふうん……具体的な理由は教えてもらえる？」

### 具体的な理由

実はそんなもの僕には分かっていたいなかった。言葉では言い表せられない何か、穂乃果ちゃん達にも感じる輝きのようなものをA—R—I—S—Eの魅力であると思っっているに過ぎないのだから

しかし僕はそんな恥ずかしい、中二病臭い台詞をこの場で喋る勇気を生憎と持ち合わせていなかった。え、今まで散々言ってきただろうって？ それは言わないで欲しいかな……思い出したら恥ずかしいから

とにかく僕が言い淀んでいると

「ごめんなさい、困らせてしまったかしら」

「あ、いや……その、上手く言葉にできなくて」

そう、と小さく言ってツバサさんは他の人との会話に入ってしまってしまった

結局、僕がツバサさんと、というよりもA―RISEとまともな会話をしたのはこれだけだった。座談会の終わる時間になって僕は少しだけ後悔したけど、それよりも雲の上の人達と一瞬だとしても同じ時間を過ごす事がつできたという満足感で一杯になっていた

今度にごさんと会う機会があつたら自慢しよう、なんて思っていたら不意にツバサさんが手を差し出してきた

あれ？ 握手は禁止なんじゃなかったっけ？

「あの握手は禁止なんじゃ……」

僕と同じ事を考えたらしい少年がそう訊ねたところ、あんじゅさんが笑顔で

「せっかくの機会だもの。握手ぐらいで罰は当たらないと思うわ。いいでしょ、英玲奈？」

「……まあ、そうだな」

あんじゅさんが意味深な視線と言葉を英玲奈さんに投げかけると、彼女はどこか諦めたように小さく肯定の言葉を発した

ファンからすれば歓喜のサプライズに、僕の隣に座っている二人はかなり喜んでいようだった。僕からしてもかなり嬉しいんだけど。天下のA—RISEはファンサービスも凄いいみいだ

そして僕ら三人は順にA—RISEと握手と同時に一言を交わしていく。その内容は「これからも応援してます」とか「頑張ってください」とかありきたりのものばかりだったけど急な展開だったので仕方ないね

僕はあんじゅさん、英玲奈さん、ツバサさんの順に握手をしてもらった

あんじゅさんからは何故か逆に「頑張つてね」と言われ、英玲奈さんには何故か無言でガン見された。意味が分からなかったのとおりあえず彼女には、頑張つてくださいと言っておいた

そして最後のツバサさんに至っては

「……ん？」

「しっ」

握手した際に何かを握らされたのだ。それを尋ねようとしたら喋るなどというジェスチャーをされた。手触りのに小さな紙のようだったが確認していないのでまだ分からない

最後にウインクをしてツバサさんは僕から離れていった……何だったんだろう今は

最初にA―RISEが部屋から出て行って、入れ替わりで店員さんが入って来てこの座談会は終了したという説明を受けて僕達も解散という事になった

まだ夢見心地といった感じのアイドルオタク×2と適当に挨拶をして別れて、僕は掌の中にあるものを確認した

ツバサさんが僕に握らせたのは小さく折りたたまれた紙だった。それを開いてみるとメモのようで、綺麗な字で短くこう書いてあった

——お店の裏で待ってる

[ho……]

これはあれですか、トップアイドルである綺羅ツバサと冴えない男子高校生である僕



と の禁断の恋愛の始まりですか。運命の出会いか何かですか。期待しちやっついていいんですかてかこのシユチュエーションは嫌でも期待しますよ???

先程の座談会とは比べものにならない程気分が高揚している僕は周囲から見ればさぞかし気持ち悪いだろう。しかし今の僕にとってそんなものなど気にもならない。柄にもなく鼻歌でも歌いたい気分だ

手渡された紙を握り締め、ツバサさんが待っているというアイドルショップの裏へと向かった

――

指定された場所に到着した僕だったけど

「……誰もいない」

人気のないアイドルショップの裏手で僕は一人でポツンと立ち尽くしていた。そこには待ち人である綺羅ツバサなど存在しておらず、通りかかった猫が僕を憐れむように気怠そうに鳴いているだけだった

少し待つてみたけれど、誰かが来そうな様子はない

「やっぱりからかわれたのかな……？」

そう考えるのが妥当だろう。僕と何の接点もない彼女が突然呼び出して何らかの話があるなど、普通に考えてあり得ない

……もう少しだけ待つてみよう。どうせ今日は帰つてする事もないんだし

え、お前いつも暇してるなwww だって？ うるさいなあ放っておいてよ

にやー、と鳴き声のした方向へと目を落とすといつの間にか僕の足元に先程の猫が近づいて来ていた。僕の足に顔をすりすりとしこすりつけてくる事から判断すると、エサでも欲しいのかもしれない

僕はこの世渡りが上手そうな猫と視線を合わせるようにしやがみ込む

「お腹減ってるの？」

聞いても猫語しか喋れない彼（彼女かもしれないがそれはそれとして）の鳴き声の意味は分からない。そういうえば前にあった星空さんは猫属性を持っていそうな感じだったのでひよつとしたらこの子と会話とかができたりして……なんてね、それは流石にないか

しかしあれだ。何だかこの猫が可愛く見えてきたので背負っていた鞆の中に何かな

いかと漁ってみる

「……ごめんね、今は水しかないや」

残念ながら鞆の中には飲みかけのミネラルウォーターしか入っていないなかった。僕はそれを買った時にもらったビニール袋を器にするように少しだけ入れてやった

猫は「え、水だけ？」と言わんばかりに僕を見上げてくる。ふてぶてしい猫だな、と思いつつも僕は彼の顎を撫でるように軽く触つてやった

それで気を許したのか、水を少しずつ舐めるように飲み始めた。ふふふ、やつぱり猫は可愛いなあ。今度は頭を優しく撫でてやった

その時、突然僕の横に凄く速さで何かがやって来た

「あ、可愛い猫！」

「わひやあ!？」

「さつきも思っただけどその凄い声、貴方のどこからそんな声が出ているの?」

突然の声に驚いて本日何度目かの変な声が出てしまった。僕の声に驚いた猫がビクツ! と大きく震えた。うう、申し訳ないことをしたな……ともかく、僕はいきなり現れた声の主の方を向いた

「やつほ、お待ちせ」

同じようにしやがみながら僕に小さく手を振ってくれているのは、待ち人であつた綺羅ツバサさんだつた

「ミーティングが思っていたよりも長引いちやつて……待たせちやつてごめんなさい」

「あ、いえ。僕も今来た所なんで……」

「座談会が終わったのが三十分も前なのに今来たの？ それじゃ逆にキミが遅刻じゃないかしら」

「や、それは」

「ふふ、冗談よ」

それだけ言うと綺羅さんは猫とじゃれ合い始めた。どうやら僕の恋愛に関する僅かな知識にあつた『別に今来たから気にしないで』作戦はこの人には通じなかつたようだ。それでもあの場はああ言う以外なかつたので、気にしない事にしよう

それにしても僕を呼び出してどうして猫と戯れているんだろうか、なんて思つたけどそんな事より……おい猫さんや、僕が撫でている時よりもご機嫌なのはどうしてなんだ。さてはお前オスだな？ 現金な奴め……う、羨ましいなんて思つてないんだからね!!

「あ、あの〜…」

「ん？ ああ、この子が可愛かったものだからつい夢中になっちゃったわ」

猫との戯れを一頻り堪能したらしい綺羅さんは立ち上がった。僕もそれに合わせて立ち上がる

彼女は笑顔で手を差し出して

「改めて初めまして、綺羅ツバサよ」

「あ、初めまして。林堂悠です」

「悠くん……良い名前ね」

ニツコリ笑ってそう言われたら嫌でも照れてしまう。お世辞だと分かっているけど

すぐつたい

「それで悠くんを呼び出した理由なんだけど、単刀直入に言うわね？」

ゴクツ……と思わず息を？む

さて、何だろう？ 僕からすれば綺羅さんとの接点など無いに等しいので理由など想像もできない

「悠くんに興味があったからよ」

「きよ、興味ですか？」

どうして、と聞くより早く綺羅さんが言葉を紡ぐ

「実は私ね、悠くんの事を知っていたの」



「そ、そうなんですか!？」

彼女の口からあっさりと放たれたその言葉に僕は驚いた。ひよつとしてどこで会っていたのだろうか？ 小学校か中学校時代の同級生だったとか？

「違うわ、そういうのじゃなくて前に見た事があって」

「……見た事があるぐらいで僕の事を覚えていてくれたんですか」

それはとても光栄というか、嬉しいというか。

「実はその事で謝りたい事があったの」

その事で謝りたい事だった？ 見た事があるぐらいで何を謝るといふんだらうか。先程から綺羅さんの言葉の意味がイマイチ分からない

「私はあの日、私達が秋葉原でゲリラライブをした日にキミが不良に絡まれているのを

見ていたの」

え!?! あのボコボコにされていたみつともない姿を見られていたというのか。驚いて目を見開く僕から綺羅さんは視線を外すことなく言葉が続けた

「ライブの後のミーティングが終わったら私は気分を切り替える為によく近くを散歩したりするんだけど」

もちろん軽く変装をしてね、と悪戯っぽく笑う彼女の服装は先程までのステージ衣装とは違って普通の女の子らしい服だった。その頭にはサングラスまで乗っている。綺羅さんぐらいの有名人となると、少しコンビニに買い物に行く事も大変そうだ

「でね、その時に何人かの男に絡まれている女の子たちを見かけたの。すぐに飛び出そうと思ったんだけど私が飛び出したところで逆にやられそうだったから警察に連絡して陰から様子を見ていたの……情けないんだけどね」

「情けないだなんて……そんな事ないですよ」

「ふふ、ありがと。でもその女の子達を助ける為に飛び出して行ったキミが言っても説得力ないんだけど？」

「いや、僕は大した事はしてないですよ」

現に僕がした事は星空さんと小泉さんの代わりにボコボコにされたぐらいだし。漫画や小説の主人公の様に格好良く悪人を撃退するなんて真似はできなかったのだから

「ううん、そんな事ないよ」

しかし綺羅さんは僕の言葉を即座に否定した

「あの時間、あの場所で私を含めた沢山の人間がいたのにも関わらず飛び出して行ったのはキミだけだった。これがどれだけ凄い事か分かるでしょ？」

「で、でも女の子が殴られそうになっているのを見たら誰だって」

「そうね。私も流石に間に割って入ろうと思つたわ。だけど実際に間に割って入つたのは貴方だったの……ねえ、教えて。どうしてあの時飛び出す事ができたのかを」

「どうしてつて……」

「何か理由があるはずよ。貴方はきつとケンカが極端に強いわけじゃない。きつとあの女の子達と仲が良かったわけじゃない。なのにどうして？」

綺羅さんはやはり僕から目を逸らさない。どうしてそんな事に拘るのかは分からな  
いけど、これは下手に言葉を濁して逃げられる空気ではないという事は僕にも分かつた  
「破滅願望でもあるの？ それとも女の子達を助けたヒーローにでもなりたかつたの  
？」

そういう理由であの時飛び出したわけじゃない

僕には当然だが破滅願望などない。破滅どころか普通に痛いのは嫌いだし

もちろんヒーローになった自分に酔いたいわけでもない。それどころかあれはヒーローなどではなく小泉さん達の身代わり人形になったようなものだったのだから

しかし何かを言わなければ綺羅さんは退いてくれそうにない

「お願い、教えてもらえないかしら」

僕の心の動きを見透かしているかのような綺羅さんの瞳

僕は何と答えたら良いのか悩んだ。あの時、僕はどうして飛び出して行ったんだっけ

……

「えっと」

悩んだ末に僕は短い言葉を発した

「僕はあの時……」

――

ツバサ side

最近、練習中に集中できていないのが悩みだ

今のところ、ライブのステージに支障が出るほどではないが集中力が散漫になってしまっている。英玲奈には『弛んでいる』と怒られてしまったし、あんじゅには『倦怠期

かしらね』と茶化される始末。私も何とか改善したいとは思っているが原因が分からない以上どうしようもない

「僕はあの時」

だけど私の目の前に、あの日の少年がいる

自分の身を顧みず、他人の文字通り盾となったあの少年が

私はずっと知りたかった。この人があの場面で飛び込んで行く事が出来た理由を

他の誰にもできなかった事をやってのけた彼にどうしても話を聞いてみたかったのだ

それを聞くことができたのなら、私の中にあるモヤモヤも少しは晴れる……気がする

「僕は」

彼の言葉を待った。真っ直ぐ見つめる私の視線に耐えられなかったのか目を逸らさ  
れていたが、意を決したように彼もまた真っ直ぐに私を見つめ返してきた

そして返ってきたその答えは私の予想と全く違うものだった

「……何も、考えていなかったと思います」

彼は、よく覚えていないんですけど、と困ったように小さく笑いながらそう言った  
何も考えていない？

何も考えずにあの状況の中に飛び込んで行ったというのか？

「……本当に？」

「は？」



「飛び込んで行ったら自分があの連中に絡まれることが分かっていたのに？」

「はい」

全部即答。私は彼の真意が分からずに少しだけ困惑していた。そんな私の考えを読み取ったのか、少しだけ気恥ずかしそうに頬を掻きながら

「恥ずかしいんですけど僕も最初は綺羅さんと同じで警察に電話だけしてあの場所から離れようと思いました。僕にはあの人達に勝てる腕力どころか飛び込んで行く勇氣もなかったもので……」

「で、でも実際にキミは」

「はい。だから多分、何も考えていなかったんです」

……ああ、なるほど

そこで私はようやく彼の言葉を理解し始めた

「警察に電話を掛けようとした時に、ちょうど男の人が女の子に掴みかかっているのを見ちゃって……そこからは無我夢中でした」

助けを呼ぶツールだった携帯電話をポケットに突っ込んで、全速力で女の子と不良の間に割り込んで

そんな事、簡単にできる事じゃないでしょ……

「そ、そうですかね？」

私の思考が口に出っていたのか、彼は反応した。私はこの際だから聞きたい事をぶつける事にした

「だって、他人を助けた結果としてキミが危ない目に遭ったのよ？　ましてや見ず知ら

ずの他人相手に」

「それじゃ綺羅さんは、人を助けるのに理由がいると思うんですか？」

「あ……」

私の言葉に被せるように放たれた彼からの質問に、今度こそ私は納得してしまった

……そうか

「よくマンガとかアニメの主人公は『他人を助けるのに理由はあるのか』みたいな事言うんですけど、僕もそう思うんです。綺麗事だつて思われるかもしれないんですけど、そう思うんです……あと、それから僕の友達が『やるつたらやる』つて言葉をよく言うんですけど、時と場合によって考える前に動く、動ける事が大事なんじゃないかなーつて僕は思うんですよね」

「そっか……」

私の中のモヤモヤが晴れていくのが分かる

こんな簡単な事だったんだ

「き、綺羅さん？　どうかしました「ありがとう！」へっ!？」

私は嬉しさの余り、悠くんの手を取った。彼が驚いて目を真ん丸にしているが、そんなものお構いなしだ

「そうよね。何かをするのに理由なんていらぬわよね。私がやりたい事をやりたいようにやれば良いのよね！　そっかそっか！　こんなに簡単な事で悩んでいたなんて馬鹿な話はないわ！」

一人で納得してしまっていた私は、目の前で呆然としている悠くんにようやく気がついた。いけないいけない、つい舞い上がっちゃったわ

「取り乱しちやつてごめんなさい。みつともない姿見せちやつたわね」

「あ、いや、そんな事はないですけど。どうかしたんですか？」

「ちよつと悩んでいる事があつただけど、キミのおかげで解決しちやつた！ だから改めて言わせて」

「へ？ いや僕は別に何もしてないですけど……」

「ううん、そんな事ないわ。訳が分からないと思うけど。とにかく悠くんのおかげなの」

「は、はあ……」

「何かお礼がしたいんだけど……今日はもう時間も遅いしまた今度何かお礼をするわ」

「え」

「だから連絡先交換しましょ。LAMEやってる？」

「え？ あ、はい」

「だったらIDを教えるから登録しておいて」

「は、はい？」

「……これでよし、と。それじゃ私はもう行かなくちゃ。今日は本当にありがとう」

「い、いや別に良いですけどってかホントに何もしてないよな僕……それより連絡先は」

「ああ、勝手に他の人に教えたりしたら駄目よ。こんな私でも一応有名人なんだから」

かなり押し付けるように連絡先を交換したから、悠くんは困っているようだ。あれ、  
そう言えば

「私ってずっと女子校だったから男の子の連絡先は悠くんが初めてだわ。ふふ、何だかそうやって考えたらドキドキするわね」

「いい!? ぼ、僕なんかに教えちゃって良かったんですか!？」

「いいのいいの。キミの事信頼してるから」

そこで手に握っていた私の携帯が震えた。相手は見なくても分かっている、英玲奈だ。ミーティングを半ば無理矢理切り上げて抜け出した私に怒っているんだろう。これはそろそろ戻らないとマズい

「それじゃまたね!」

「あ、はい……また?」

彼に別れを告げると全速力で走り出す。すぐさま携帯を取り出して英玲奈に折り返しの電話をかけた

『もしもし』

一回呼び出し音が鳴っただけで英玲奈は出てくれた

「もしもし英玲奈？ ごめんなさい。ちょっと手が離せなくて」

英玲奈は明らかに不機嫌そうだ。それもそうか、理由も説明せずにミーティングを抜けだしてきてしまったのだから

「戻ったらちゃんと説明するわ」

『……はあ。いや、その必要はない』

「え、なんでよ」

『お前の悩み、解決したんだろう？』



その言葉に私は走るのを止めた

「それはそうなのだけど……どうして分かったのよ。英玲奈にそんな超能力あったっけ？」

『馬鹿な事を言うな。これでもそれなりの付き合いなんだ。それぐらい分かるさ』

それはそうかもしれないが、電話越しの声だけで判断できてしまうなんてある意味超能力なのではないだろうか？

「英玲奈、帰ったら言いたい事があるの。あんじゅにもなんだけど」

『……了解した。気をつけて帰ってくるんだぞ』

通話を終えて、携帯をポケットに突っ込むと再び走り出す

思えば私は少し焦っていた

A—RISEという強豪スクールアイドルのリーダーを任され、今年はスクールアイドルの頂点を決めるラブライブでも優勝を確実視され、そのプレッシャーから自分の方向性を見失ってしまっていたみたいだ

しかし、そんなものはもう関係ない

余計な事を考えずに私がやりたい事を、やりたいようにやればいいのだ

そんな当たり前の事に自分で気がつけないなんて余裕なさすぎでしょ、と自嘲する

私は彼には感謝しなければならない。きっと私は——私達はまだまだ上に行けるのだから。後で改めて悠くんにお礼を言っておかなければならないわね。それから『やるつたらやる』という単純だけど難しい事をやってのけて見せるという彼の友人にもお礼を言いたいな

……とにかく、次に会えるのが楽しみね、林堂悠くん

## 幼馴染に友達ができたらしい

先日のA—RISEの座談会は今思い返しても信じられないことばかりだった。抽選に当たっただけでもラッキーなのにグループのリーダーである綺羅ツバサさんと二人きりで話をした上に彼女の連絡先までゲットしてしまったのだ。LAMEのIDは押し付けられたようなものだったけど……本当に良かったんだらうか？

そんな事をずっと考えていた僕だったけど、それは杞憂だったと知る

何故ならそれなりの頻度で綺羅さんからメッセージが飛んでくるからだ

と、言ってもその内容は大した事ないものばかり。『道端で見つけた猫が可愛い』だの『英玲奈に怒られちゃった』だの『あんじゅとデート』だとかそういう類のもので、しかもやり取りは数回で終わってしまうのだ。綺羅さんの真意はどこにあるのだろうか？

しかし綺羅さんからそういうメッセージが来るたびに綺羅ツバサというトップアイドルである彼女も普通の女の子なんだと認識させられる。僕は他のファンは知らないであろう一面を僕が知っているというつまらない優越感に浸っているわけだ

そして今もその綺羅さんからメッセージが来ているのだが、その内容が

『次の金曜日って何か予定ある？ もしも空いているんだっただどこかへ出かけない？』

僕はしばし画面を見つめたままフリーズした

……これは？

これは!?

もしかしなくても綺羅さんからのデートのお誘いですか!?! ついに彼女いない歴〓年齢の僕にも春が来たんですかね!?! しかも相手は超絶美少女と来れば僕はもう死ん

でもいい。天にも昇る気持ちとは正に今の僕の状態を指すのだろう

「なんで携帯を見てニヤニヤしてるのよキモチワルイ」

そんな事を考えていた僕の隣を歩いてきた赤毛のお嬢様から胸に突き刺さる非常に痛い攻撃を受けた。本当のことかもしれないけどそんなにはつきりと言わなくても良くないですか傷つくんですけど

「それで？」

「それで、って何？」

「だから、どうして携帯を見てそんなに嬉しそうにしてるのよって聞いているのよ」

「別に嬉しそうになんかしてないけど？」

「してたわよ」

うーむ、困った。こうなると真姫はなかなか退いてはくれないからな。何か答えないと納得してくれそうにないが、馬鹿正直に綺羅さんと連絡を取っているだなんて答えられるわけがない。さて、どう答えようかな……

考えているうちに真姫の表情がどんどん険しくなっていくのが分かった

「何よ、私には言えないってわけ？」

「や、そういうわけじゃないよ」

そんなに不機嫌そうな顔をしなくてもいいじゃないか、とは思っても口には出さない。そんな事をしては余計に彼女の機嫌を損ねてしまうからだ

「実はね、最近新しい友達ができてね。来週くらいにその人と遊べるかもしれないって話になったの」

自分なりに無難に答えた所、真姫は驚いたような表情を浮かべて

「……悠くんにも友達できるんだ」

「なっ?! その台詞は真姫にだけは言われたくなかったよ!!」

「ヴェ!! ちよつとそれどういう意味よ!!」

「そのまんまの意味だよ馬鹿真姫! ツンデレ!! 意地っ張り!!」

「何よそれイミワカンナイ!! 馬鹿って言う方が馬鹿なのよ! 最低! ムツツリスケ

べ!!」

「むっ?! む、ムツツリつてなんだよ! 僕は別にそんなんじゃないぞ純粋な僕に対してその言いぐさはあんまりじゃないか!」

「へ〜純粋、ね。ふーん……」



真姫は若干蔑んだ目で僕を見た。そんな社会のクズを見るような目で見られるような心当たりはないんですが

「ふーん」

「な、何さ真姫。言いたい事があるならはつきり言つてよ」

「別に、何でもないわよ」

素っ気なく返事をして真姫は少しだけ歩く速度を速めた。この話はここで終わり、というこころらしい

言い忘れていたけど僕達は今、神田明神に向かって歩いているわけで

「でもや」

僕も歩く速度を速めて真姫の隣に並んだ

「真姫がスクールアイドルをやるだなんてね」

そう、神田明神に向かっている目的は朝練をする為だ。実は数日前に真姫を含めた三人の新メンバーがμ'sに加入していたのだ

「やっぱり意外だった？ 私がアイドルだなんて」

「うん、まあ。正直に言うかね」

「貴方ね……」

呆れたように真姫は言う。本音を言えば絶対に真姫は穂乃果ちゃん達と一緒にやつてくれるとは思ってはいいたけど、それは言わないでおこう。これを言うと東条先輩に茶化された事を思いだしてしまうから。うう、恥ずかしい……

「悠くんが私にやりたい事をやれって言ったんじゃない」

「そうだったけ？」

「覚えてないの？ あの喫茶店で」

そんな事を言ったような言っていないような

「自分の言った言葉に責任持ちなさいよね、全く……ねえ、悠くん」

「ん？ どうしたの改まって」

真姫は立ち止まって、僕の方を見た。僕も歩くのを止めて真姫と向かい合う。どこか不安そうな目をしているように見える

言葉を探しているのか、言いづらそうにしているが僕はその先を急がせるようなことはせずに黙って真姫が言葉を発するのを待った

「……その、ね」

「うん」

「前に先輩達のライブがあつたでしょ、ウチの講堂でやったやつ。その時に悠くんが高坂先輩に言った言葉なんだけど」

僕が穂乃果ちゃん達のライブの時に言った言葉？

「ほら、『μ'sの最初のファンである僕がー』ってやつ」

ああ、思い出した。そういえばそんな事も言ってたっけ。あれは紛れもない僕の本心ではあるんだけど、他人から改めて言われたら結構恥ずかしいな

それにしてもそれがどうしたと言うんだろ

「言って」

「え？」

「言って！」

「え、は？ な、何を？」

脈絡もなく放たれたその言葉の意味が分からずに思わず聞き返してしまった。気づけば真姫の表情が不安そうなものから一変、いつものように目を吊り上げて僕を睨んでいた

「だから！ 私にも同じことを言っつて頼んでるの！」

同じこと？

先程までの会話から、どう考えても僕が穂乃果ちゃんに言った言葉の事を言っている

のだろ。真姫も僕に『何があっても味方だ』とか言っても欲しいのかな？　なんて、まさかね……どうして真姫がそんなに拘るのかイマイチ判断できないけど、とりあえず僕の言いたい事は

「え〜…恥ずかしいからやだ」

「ちよつと！　そこは素直に言ってくれる所でしょ!？」

「だって恥ずかしいんだもん」

「どうしてあの人にはサラツと言ったくせに私には言ってくれないのよ!」

「僕からしたらどうして真姫がそこまで執着するのかが分からないよ!」

僕と真姫は、ぎゃあぎゃああと早朝にも関わらず道端で騒ぎ合う。近所迷惑極まりないが、今の僕達の頭の中にそんな考えは全く思い浮かばなかった

そんな修羅場(？)に更なる刺客が現れる

「二人ともおっはようになー!!」

「きゃっ!!」

「うわっ!……っって星空さんか」

猛スピードで突っ込んできた刺客の正体は星空凪さんだった。擬音で、ドドドドドツ!! っって聞こえてきそうなくらいのスピードだった。この人朝から元気だなあ

「凪、朝からあんまりくっつかないでくれる?」

「えー、別に良いじゃん。真姫ちゃんだっって朝から林堂くんと仲良く遊んでたんだから」

「あれのどこが仲良く見えるっって言うのよ……」

それには激しく同意です。あの光景は誰がどう見ても言い争っているようにしか見えなと思うんだけど

「せっかく真姫ちゃんと友達になれたんだから凜だつて真姫ちゃんと仲良くしたいんだにゃー！」

「だから抱きつくのは止めてつて……全くもう」

止めてと言っている割に真姫が嫌そうではないと見えるのは気のせいではないだろう。むしろ満更ではなさそうだ

この光景を見たら分かる通り、真姫に星空さんという同級生の友達ができたのだ。それともう一人、こちらに向かって走って来た

「はあはあ、凜ちゃんつてばいきなり走り出すんだから……」

「あ、かよちゃん遅いにゃー」



「凜ちゃんが早すぎるんだよ……」

「小泉さん、おはようございます。いや、お疲れ様です、かな？」

「お、おはよう林堂くん。これぐらい、へっちゃらです……」

走って来て息を切らせて全くへっちゃらそうではない女の子は小泉花陽さん。彼女もまた真姫の新しい友達である

先程、僕が真姫にだけは言われたくなかったと言われたのはこれの事で、真姫はどうも高校生になってからクラスに馴染めていなかったらしく、友達と呼べるようなクラスメイトがいなかったらしいのだ

「おはよう花陽。貴女も朝から凜に付き合わされて大変ね」

「む、その言い方はまるで凜がかよちゃんに迷惑かけてるみたいない方じゃないかにや

「？」

「迷惑かけてるみたい、じゃなくて実際に迷惑かけてるじゃない」

「にやー!? それは納得いかないにやあ!」

迷惑というか、かなり振り回しているように見えるのは確かだけど星空さん的には納得がいかないらしい

「真姫ちゃんおはよう。凜ちゃんも、花陽は迷惑だなんてちつとも思っていないから大丈夫だよ」

そんな星空さんを慰めるように笑顔で優しく言う小泉さん。うん、朝から素敵な笑顔をありがとうございます

「ほーら! かよちゃんもこう言ってるんだから迷惑なんかじゃないにや!」

ドヤ顔で胸を張る星空さんと呆れたように首を横に振る真姫、それを笑顔で見守る小泉さん。この三人組ならこれからもっと仲良くなつていけると思う

え、僕が空気だつて？ そんな事分かつてるから言わないで悲しくなつちやうからさ

とにかく、真姫、星空さん、小泉さんの三人が新しくu'sに加入した三人である。全員が一年生ということで僕も喋りやすいのはありがたい。未だに先輩である園田さんと南さんと話すときは少し緊張してしまうからだ

「それにしても早起きは苦手だよ……まだ眠たいにや」

欠伸交じりでそう言う星空さんはまだ眠そうだ

「朝、苦手なんですな」

「そう言う林堂くんは得意なのかにや？」

「得意と言うか、慣れてるんで眠たくはないですよ」

「林堂くんって真面目そうだもんね。それなら早起きもできそうだよ」

真面目だからといって早起きが得意とは限らないんじゃないのかな。現に真姫も真面目な分類に入るけど、朝は弱かったはずだ。これはもう個人差だろう

「そういえば、小泉さんは眼鏡外したんですね。コンタクトにしたんですか？」

「う、うん……あ、やっぱり変かな……？」

「あ、や、そんなことないですよ。えっと、良いと思います」

「はつきりしないわね。そこはそっちの方が可愛いって言ってあげなさいよ、全く」

「そんなことをこの僕がサラッと言えるとも思ってるの？」

「思っていないから言っておけるの。本当に甲斐性がないんだから」

「ぐぬぬ、真姫つてば最近生意気過ぎだな。もう……」

小声で言つたつもりだったのにしつかり聞こえていたらしく、思いつきり脇腹を抓られた。変な声が出てしまつて星空さんと小泉さんに笑われた……くそ、真姫め。いつか絶対ぎやふんと言わせてやる

そんなこんなで神田明神に到着した僕達は長い階段を上がつて頂上へと到着した。早朝にこの階段は少しきつい

境内の広場に着くと、既に園田さんと南さん。穂乃果ちゃんが準備体操をしていた。流石に早いなあ。僕は挨拶をするために三人に駆け足で近づいた

「おはようございます」

「おはよう林堂くん」

「おはようございます」

「おはようはるちゃん！　へっへー、今日は穂乃果の方が早かったね！」

「むう、今日は穂乃果ちゃん珍しく寝坊しなかったんだね」

「ちよつと！　その言い方だといつも穂乃果が寝坊してるみたいじゃん！」

「実際その通りではありませんか。今日だつてことりと私が起こしに行かなければ寝坊していたのはどこの誰だったんでしょね？」

「う、海未ちゃん!？」

園田さんのカミングアウト。やっぱりね。でも、穂乃果ちゃんらしいと思つてつい笑つてしまう

「もー、はるちゃん笑い過ぎだよー！」

「ごめんごめん、なんか想像した通りで可笑しくつてさ」

怒ったらしい穂乃果ちゃんが僕をポカポカと叩いた。叩かれたと言っても、全く痛くない。むしろ可愛らしいくらいだ

「穂乃果、一年生も来たことですしそろそろ練習を始めますよ」

「はーい」

園田さんの一声で僕らは練習をするためにそれぞれストレッチを開始した。新メンバーが増えても練習を仕切るのは相変わらず園田さんだ。最初の頃に比べて慣れてきたのか、指示する姿も様になっている

なんて半ば感心していた僕の所に怖いくらいニコニコしている園田さんがやって来た……今日も来たな鬼教官め。彼女が目の前に来ると僕の背筋も自然と伸びる

園田さんはいつものように僕にメモ用紙を一枚渡してきた

「これが今日のメニューです。怪我をしないようにしっかりと準備体操をしてから取り組んでください」

渡されたメニューに目を通したら、眩暈がした

「最近ようやくトレーニングに慣れてきたみたいですからね。少しだけウエイトを増やしてみました」

少し……？ 腕立て五十回は今までの倍の数なんですけどそれは少しとは言わないと思います

「とは言つても林堂くんが最初からこのメニューをこなせるとは思っていないので自分でできる所までやってください」



逆らう事は許さない笑みを浮かべている園田さんに、僕は頷くことしかできない。せつかく筋肉痛にならなくなってきたのに、また悶え苦しむ日々が始まるのか……

だけど、このままこれが続ける事ができればモヤシ男という不名誉極まりない称号を返還できるかもしれない。ふふふ、もう二度と真姫にモヤシだなんて言わせるものか！

「林堂くん、顔が怖いけど何かあったのかな？」

「悠くんは偶に、というかよくああなるのよ。一々気にしていたらキリがないわ」

「ふむふむ、真姫ちゃんは林堂くんのことよく分かってるみたいだけど、どういう関係なのか凜、気になるにや〜？」

「ヴェ!? ベ、別に何でも……ただの幼馴染よ！ 変な意味なんてないんだから！」

「そんなに焦って言っても何の説得力もないにや」

「ふふふ、いいなあ真姫ちゃん。私もそういう人がいたらなあ……」

「ちよつと花陽まで変な事言わないで！ だから私と悠くんはそんなじゃー」

「なになに？ 何の話してるの？」

「悠くんには関係ないから黙って一人で練習してて!!」

「ぐはっ!? な、なんで殴るの……?」

「真姫ちゃん容赦ないにや」

「さ、流石に少し可哀想だね」

いきなり真姫から鉄拳制裁を受けた僕は仕方がなく言われた通りに、少し離れた場所  
で体操を始めた。小泉さんと星空さんから向けられる同情の視線が胸に染みるよ……

そういえば話は変わるんだけど、真姫達がメンバーになった時、穂乃果ちゃんが真姫によく分からない事を言われたとか言ってたな。どういう意味だったのかそれとなく聞いておいてと頼まれていたのにすっかり忘れてたや

チラツと真姫の方を見れば真剣な表情で筋トレに励んでいた。今はとてもじゃないけど聞けるような雰囲気ではない。そのうち聞くチャンスがあるだろう、と考えて僕も準備体操の方へと意識を戻した

――

話は数日前に戻る

## 音乃木坂学院の屋上

そこでいつものように穂乃果達が練習していると勢い良く扉が開け放たれた。見ればそこに立っていたのは先日と一緒にアイドルをやろうと声をかけた眼鏡をかけた少女、小泉花陽

どうやら友人達に勇気づけられて一緒に活動をしてくれる気になったらしい。三人では少し寂しいと思っていたところだったのでそれは有難い申し出であった

こうして小泉花陽は晴れてμ'sのメンバーになったわけだが、穂乃果達はさらに彼女の付き添いで来ていた星空凛と西木野真姫をも勧誘する

穂乃果達から差し出された手を掴んだ凛と真姫も同じようにμ'sの一員になったのだった

「やったー!! メンバーが三人も増えたよ!」

「やったね穂乃果ちゃん♪」

「うんうん！ ねえねえ海未ちゃん、今日はもう練習切り上げてさ、何か甘いものでも食べに行こうよ！」

「穂乃果、しかしですね……」

「いいんじゃないかなあ？ 一年生の歓迎会みたいな感じで」

「ほら、ことりちゃんもこう言ってるしさ！」

「全く、仕方ないですね……と、言うことなのですが。三人共この後の時間は大丈夫ですか？」

「凜は大丈夫です！ かよちゃんは？」

「私も大丈夫だよ」

「私も、まあ、この後は暇ですけど」

「よっし！ それじゃあ決まりだね！」

「三人共、これからよろしくね」

「多少きつい事もあると思いますが、一緒に頑張つて行きましょう」

それぞれが改めて握手を交わしていく。その際に真姫と穂乃果が握手した時に、真姫の方がポツリと

「……絶対負けないから」

「……え？」

言葉の意味が理解できずに呆ける穂乃果を尻目に、真姫を背を向けて隣の海未の方へと行ってしまった

何だったんだろう？ と首を傾げる穂乃果。歓迎会と称して行ったファミレスで聞いてみたが、言葉の意味を答えてはくれなかった

ひよつとして嫌われているのかも、と不安になった穂乃果だったが話をしている感じ、そんな事はないような気がした

穂乃果はこれ以上の追及を諦めた。そのうち理由を話してくれるだろうと楽観的に考えて

「……ま、いっか」

「どうしたの？」

「何でもないよー。さ、食べよ食べよ！」

「……」

その為穂乃果は自分を見定めるような視線に気づかないフリをしたのだった



## 閑話休題 1

「あら？ ひよつとして真姫ちゃんじゃない？」

下校中、不意に声をかけられて振り返ると、そこにいたのは幼馴染の母親だった。久しぶりに会った私を後ろ姿だけで分かるなんて凄い、なんて思いながら私は小さく頭を下げた

「お久しぶりです、おば様」

「そんなおば様だなんて呼ばないですよ。真姫ちゃんだったら『お義母様』って呼んでくれてもいいのに！」

ニコニコしながらサラッととんでもない冗談を言い放つ女性に、私は頭を抱えたくなくると同時に小さい時の記憶にある人物と変わっていないという懐かしさを覚えた

「ねえねえ真姫ちゃん。これから暇ならちよつとウチに寄ってかない？」

「え？　でも……」

再会の挨拶もそこそこに、いきなりのお誘い

「これから私は暇でねー。お茶の相手とか欲しかったんだよ。だからさ、どう？」

私はこの人の子供と同じ年だというのにまるで友達を誘うような気軽さだ。確かにこの人の見た目はかなり若いけども。私が久しぶりに会ったというのにすぐに誰か分かったのは昔の記憶と何も変わっていない見た目が原因だ。事情を知らない人が悠くんのお姉さんと言われても納得してしまいそうならいだし

「……あの、悠くんは」

「ああ。あの子ならまだ帰ってきてないわ」

それを聞いてほっとしたような残念なような複雑な気持ちになる。どうしてこんな気持ちになるのかは自分でも分からない

そんな私の気持ちを読み取ったらしい目の前の女性は服のポケットから携帯を取り出して

「どうせだったら悠も呼ぶ？」

「いや、いいですよ。あの人にも予定があるだろうし」

「真姫ちゃんが家に来るってなったら飛んで帰ってくると思うんだけどな」

色んな意味で、とおば様は意味深に笑った。色々な意味とはどういう事だろうか

「それってどういう意味ですか？」

「悠もあれでお年頃だからね。色々あるのよ」

「はあ……」

結局意味は分からずじまいだったが、とりあえずここはお言葉に甘えることにした

と、いうのも私の母親に挨拶するように言われていたのを思い出したからだ。家の場所が分からないので大人しく後に着いていく

「すぐそこだから。昔の家よりは大きいのよ」

悠くんもそう言っていたな、なんて感想を抱きながら歩いているとすぐに到着した

……なるほど。確かに昔の家と比べたらかなり大きめの家だ

「今回の家は二階もあるから広くていいのよねー。さ、入って入って」

「お邪魔します」

「そのソファにでも座ってて。飲み物持ってくるけど、真姫ちゃんコーヒー飲める？」

「はい。ブラックで大丈夫です」

「あら、大人ね。悠なんて砂糖とミルクをたつぷり入れても飲めないのに」

そう言って笑いながらリビングの奥の方へと引っ込んでいった。一人になった途端、急に落ち着かなくなってしまう

新居である為か、家具はそれほど多くない。必要最低限な物しか置いていないようだ。きつとこれから増えていくんだろうな、と考えていると、あるものに目が留まった

「これって……」

ソファから立ち上がり近くに寄ってよく見てみる

「お待たせー…つてああ。その写真ね。少し古いけど良く撮れてるでしょ」

戻ってきたおば様が説明してくれた通り、昔の写真だった。そこには小学生くらいの子と女の子が写っている

「うわあ……懐かしい」

「でしょ？ これは確か小学校五年生の時ね。真姫ちゃんのピアノの発表会の打ち上げを一緒にやった時に撮ったやつだわ」

「そっか。だから私はドレスなんか着ているのね。着替えてからパーティーすれば良かったのに」

「あら？ 真姫ちゃん覚えてないの？」

ニヤニヤしながらおば様は私を見て

「悠が真姫ちゃんのドレス可愛いって言ったからー」

「も、もう良いです！ 思い出しましたから！／＼／＼」

そうだった。あの時、彼にドレスを褒めてもらって嬉しくなった私は一日中ずっと着ていたんだっけ。すっかり忘れてたけど……それだけで舞い上がっちゃうなんてどんだけ単純なのよ、小学五年の私……

「今思えばただどウチのバカ息子、小さい時の方が積極的だったわね。ほらこの写真なんて仲良く手まで繋いじやってるし。今だったらあのヘタレには絶対できないわね」

「そうですか？ 手を繋ぐのはともかくあまり変わっていないような気がするんですけど」

「あの子も色々あったからね……ってそれは一旦置いておいて、お茶にしましょー！」

再びソファに座って目の前のテーブルに置かれたコーヒーに口をつける

「真姫ちゃんのお母さんは元気かしら？」

「はい、おかげさまで。ママ……じゃなかった。母も久しぶりに会いたいと言っていました」

「本当に？ それじゃあ今度遊びに行っちゃおうと」

「それならこれ、母の連絡先です」

「いいの!? やったー！ これで私のお茶相手が一人増えるわー」

連絡先を教えたら凄く嬉しそうにしている

「……失礼ですけど、普段暇なんですか？」



「うん」

失礼な事を聞いたというのに彼女は不快そうな表情などしない。それどころかどこか楽しそうに見える

「たまくに昔のツテで仕事したりするけど基本的には暇してる。真姫ちゃんのお母さんと違ってね」

「母も最近は落ち着いてきたみたいだからそれほど忙しくはないですよ。パパ……父の方は相変わらずですけど」

「真姫ちゃん、いつも通りに喋って良いのに。私相手に何を遠慮しているの?」

「べ、別に遠慮しているわけじゃないですけど……」

「まあ、それはそのうち直してもらおうとして……最近、どう?」

「どう、ですか？」

「うん。新しい学校、楽しい？」

「……はい。それなりに」

「入学したばかりだと何をしていいか分からないでしょ。高校は中学と何か違うからね。雰囲気とか色々」と

「まあ、そうですね」

「いいなー、女子高生。卒業したら分かると思うけど、あれは一種のブランドよ。卒業しても進学すれば学生はできるけど高校は本当に掛け替えのない期間なのよね……」

お婆様はどこか遠くを見つめながらそう言った。きつと自分の高校時代でも思い出しているんだろう

「……つてこんな年寄り臭い話は今度真姫ちゃんのお母さんとしなきゃね。ごめんごめん」

「でもおば様の高校時代の話はちよつと興味あります。ママが一度話してくれたんですけど」

「ちよつと真里ちゃんつてば勝手に人の黒歴史を喋っちゃったわけ？」

「黒歴史だなんて……純粹に凄いなと思いましたけど」

「なんか私つてあの辺りの世代で半ば伝説っぽくなっちゃつててさ。特に真里ちゃん達の代より下は私が卒業してからの子達だから噂に尾ひれがついちやつてるのよ」

なるほど。ママはおば様と入れ違いだったのか。通りで話の中に憧れのようなものが含まれていたわけだ

……ん？

おば様と入れ違いでママが入学したということはママとおば様は三歳違

い？　ということはおば様の年齢は――

「真姫ちゃん」

呼びかけに思わずビクッ！　と震えた。おば様はニコニコしている。にも関わらず、有無を言わせないような威圧感も放っている

「それ以上考えない方がいいわ。私、真姫ちゃんと仲良くしたいもの」

「は、はい！」

圧力に負けて反射的に返事をしてしまった

……あれ？　私はおば様の年齢の話など全く口にしていないというのに。どうして私の考えている事が分かったんだろう

「おば様ってエスパーなんですか？」

「そういうわけじゃない。ただ会話の流れで真姫ちゃんの考えてそうな事を予想しただけ」

言いながら目の前に置かれていたコーヒーを飲んだ。おば様のコーヒーにはミルクと砂糖が入っている

「おば様」

「ん？」

「一つだけ聞きたい事があるんですけど」

「なにに？ 悠が隠してるつもりの恥ずかしい本の隠し場所とか？」

「……それはとても興味深い話ですけど、そうじゃなくて」

「何故かイラツとしたが、それについては今度悠くんに直接問い詰めるとしよう

「私、悩んでいるんです。このままでいいのかなって」

主語はない。何の話かさっぱり分からないだろうにおば様は先を促さない。静かにコーヒーを啜っている

「中学校の時も、その、友達付き合いがあまり上手くなくて。卒業するまでには仲良い子も何人かできたんですけど。その人達とも高校では別々になって」

こんな話は家では絶対に話せない。理由は単純に両親が心配するから

将来はパパと同じ、医者にならなければならぬ私は必然的に普通の人よりも勉強しなければならぬ。勉強なんてどこでもできると思ったから、母の希望通りに音乃木坂に進学して

周囲が部活やら友人関係やらでコミュニティを形成しているのに、私だけ取り残され

てる気がして

それで良いと思っていたけど、悠くんに「それでいいのか」と喫茶店で言われてから余計な事を考えるようになってしまった

「ふむ、どうしてそれを私に？」

「それはママがおば様の事を『何でも答えを知っている人』だって言ってたから」

私がママから聞いたおば様の逸話の一つ

この人は正真正銘の天才だということ

勉強ができるという意味での天才、だけではなく場面において最適な『答え』を知っているのだと

だから本当に頭が良いのだと、ママが興奮気味に語っていたのを思い出したからだ

「まあ確かに私は天才だよ。これは冗談でもなんでもなく」

手に持っていたコーヒークップを置いてからおば様は簡単に言い放った。その口調には先程までのおどけた感じなど全く感じられない。自分で心の底からそう思っているのだと分かった

「だから私は何だって教えてあげられる。真姫ちゃんが望む答えを。それどころか真姫ちゃんの人生そのものを最適なものに導いてあげることだって不可能じゃない」

……なんだかスケールが壮大になってきた。自分が天才だと言ってもそこまで言うだろうか

「でもね真姫ちゃん」

おば様は真面目な、見る人によっては怖いと感じる表情から一変、優しく微笑んだ



「最適な答えⅡ幸せな答え、とは限らないのよ。これは私が最適な答えを選んできた上で得た結論」

言い切った。しかし私としては最適な答えを選んでいたら勝手に幸せになっていけそうだなと思うけど

「いいえ、そうじゃないの。最適な答えを選ぶのは確かに大事なんだけど時には間違っていると分かかっていても、その選択肢を選ばないといけない時もある。こんな簡単な事に私は長い間気づけなかったんだけど……真姫ちゃんは大丈夫そうね」

言葉の意味が分からなかった私は思わず首を傾げた。大丈夫じゃないから相談に乗ってもらおうと思っていたというのに

「だって最初に言ってたじゃない。このままでいいのかって」

「あ……」

「このままじゃいけないと思うから私に話をしてくれたんでしょ。だったらまずやってみよう。自分がやりたい事を。お母さんやお父さんが望むことじゃなくて真姫ちゃん自身が望んでいる事をさ」

「私が望んでいる事……」

少しだけ、考えた。私は高校生になって何がしたいのだろう

「高校生活は始まったばかりだし、ゆっくり探していけばいいんじゃないかな。でも高校三年間なんてあつという間に終わっちゃうんだからおばさんの口から言えるのは後悔しないように、つてだけね」

おば様はそこで置いていたコーヒーに再び口をつけた。この人はやはり悠くんのお母さんだなんて思った。だつて話をしている時の顔が彼とそっくりなんだもの

「? 何かおかしかったかしら」

「いえ、何でもありません。それよりありがとうございます。」

「私は何にもしてないよーん。それにしても、若い子のお悩みを聞いてあげる相談室ってのは良いねえ。この為に歳を取ってるんだなって思うわ」

おば様はケラケラと笑った。それにつられて私も笑う

「ま、頑張ってみてよ真姫ちゃん。どうしても駄目だったらまた相談して。それと……お母さんにもこういう話してあげて。貴女としては心配をかけたくないかもしれないけど可愛い子供に頼られて悪い気のする親はいないんだから」

「……はい」

「うん！ 真姫ちゃんは素直で可愛いなあ！ ……うちの子もこれぐらい素直になれば良いのに」

最後の方の声は小さすぎてこの距離なのに上手く聞き取る事ができなかつた

「あの、何か？」

「ううん、何でもない。それよりも少しで悠が帰ってくると思うからアイツの部屋で待っていてよ」

「へ、部屋で!？」

「うん！ 悠のビックリする顔……ママ見たいなあ♪」

「ちよ、ちよつとおば様！」

悪戯つ子のような顔をするおば様にほとんど無理矢理連行されるような形で悠くんの部屋に私は押し込まれた

「それじゃあちよつとだけ待っててね！」

それだけ言っておば様は部屋から出て行ってしまった。先程までコーヒーを飲みながら話をしていたというのに、あの人の突発的な行動にはついていけそうにない。普段から悠くんが振り回されるのが目に浮かぶ

それにしても

「……」が悠くんの部屋……」

部屋の中身を軽く見回す

置かれているものといえば、勉強机に本棚がいくつか、衣服が入っていきそうなタンス、それからベッド。余計なものは余り置かれていないようだった

他人の部屋を見回すというのはあまり行儀の良い事ではないが、もう一度だけ見渡してみた

昔の悠くんの部屋にはあったヴァイオリン関連のものは一つもなかった。ヴァイオ

リンも、あんなに沢山あつたコンクールの表彰状も

ヴァイオリンをどうして辞めたのか、当時も再会してからも聞いてみたが上手い事はぐらかされていた

近くにあつたベッドに腰を下ろす

何回聞いても「自分には才能がなかった」としか答えてくれない

「……私は好きだつたんだけどな」

だからヴァイオリンを辞めたと聞いた時はショックだった。どうして、と彼に詰め寄つたりしたつけ

悠くんはずるい。私の考えている大抵の事は見抜いてくるくせに自分の事は何も教えてくれない

いつか、話してくれるのかな。ひよつとして私って意外と彼からの信用がないのかもそんな事を考えていたら少しだけ憂鬱な気分になってしまったて私はベッドに倒れこんだ

「……悠くんの、匂いがする」

普段、彼が寝ているベッドだから当たり前なんだけど。特別良い匂いとは言わないが何故か安心する気がした……ってこれじゃ私、変態っぽいかしら……？

で、でももう少しだけ。もう少しだけ横になってるくらいは良いわよね！ だってベッドなんだもの寝る為の道具だもん

そんな言い訳にもなっていない理由でベッドから起き上がる事を拒絶した私は、そのままの体勢で彼が帰ってくるのを待つことにしたのだった

「ただいまー」

「あ、やっと帰ってきたわね。随分と遅かったじゃない」

「ちよつと鬼教官にしごかれててね……」

「それは良いわね。アンタあまりにも貧弱だからそれぐらいが丁度いいわよ」

普通息子に向かった貧弱とか言うか？  
今更だから気にもしないけど



「とにかく早く着替えてご飯の支度してー。私なんだかお腹減っちゃったー」

そう。母上は夕食を作らない。それは中学校の途中から僕の仕事になったからだ

「たまには作ろうって気にはならないの？」

「ならない。だって悠くんのご飯の方が美味しいんだもん」

「全く……」

半ば呆れながらも、これも今更なので何も言わない。とりあえず汗をかいたから先にお風呂と考えていたけど予定を変更しよう。先に夕食の支度だ

冷蔵庫の中身を思い出しながら自分の部屋の扉を開いた

「………」

思わず間拔けな声を出してしまったがそれも仕方がないと思う。部屋の中に広がる光景が信じられずに僕はそつと扉を閉めた

「園田さんのきつい練習で疲れてるのかな。うん、そうに違いないね」

今日もトレーニングはきつかったし、きつと幻覚でも見たのだろう

自分に言い聞かせてもう一度扉を開ける。部屋にあるベッドの上に見覚えのありすぎる制服を着た女の子が横たわっているのが目に入った

「……なんで真姫が僕のベッドで寝てるの？」

近くに寄ってその正体を確認してみると幻覚なんかではなく、確かに幼馴染である西木野真姫だった。何故、僕の部屋に彼女が寝ているのか。そもそもどうして我が家に彼女がいるのか。全く見当もつかない

それにしても、と僕はすやすやと気持ちよさそうに寝息を立てている彼女の顔を覗き

込んだ

「爆睡してる……」

軽く頬を叩いてみたが起きる気配は全くない。真姫が一度寝たらなかなか起きないのは知っていたけれど。僕の枕を大事そうに抱きしめているのを見るに、真姫の自宅のベッドにはまだ抱き枕代わりの巨大なクマのぬいぐるみが置いてありそうだ

しかし、そんな事よりもこれはあまりに

「無防備過ぎじゃない?」

僕はベッドに手をつき、彼女に覆い被さるような体勢になった。ベッドのスプリングが重みに耐えかねて大きめの音を立てるがここまでしても真姫は起きない

スカートからスラリと伸びる長い脚。身長は僕とそれほど変わらないのに間違いない。僕よりも狭い肩幅。綺麗で何故か良い匂いがする真っ赤の髪。彼女の何もかもが僕

の中の黒い衝動を煽ってくる

当たり前前の事だがこんなに近くで真姫を見たのは初めてだった。思わず、ゴクリと息を？んだところで

「……………なにやっつてんだろ」

我に返った僕は未だに眠っている真姫から離れて静かにベッドから降りた

先程まで頭を支配していた最低な思考を頭を振って吹き飛ばす。寝込みを襲おうだなんて只の変態だよ……………ほんと、何やっつてるんだか

しかし真姫も真姫だと思ふ。幼馴染とは言え、勝手に人の部屋に上がり込んで人のベッドで勝手に寝るだなんて。僕も仮にも男だというのに無防備ではないだろうか

……………裏を返せばそれだけ信頼してくれている、のかもしれない。それだったら嬉しいんだけどな

男として見られていない可能性も大いにあり得るがそれは考えない事にした。もしもそうだったら僕はもう立ち直れない

僕は部屋を出てこの状況を楽しんでいるであろう人物に文句を言おうと下に降りた

「母さん」

「そんな怖い顔してどうしたの？ 何かあった？」

「何かあった、じゃないよ全く！ どうして真姫が僕のベッドで寝てるのさー！」

「あら。真姫ちゃんってば寝てたんだ。道理で静かだと思っただわー」

「それだけ？ 息子の部屋に女の子を送り込んでおいてそれだけなの？」

「久しぶりなんだからいいじゃない。私としては二人がより仲良くなる為のお膳立ての

つもりだったんだよ？ どうせ悠の事だから真姫ちゃんに手を出すなんて真似はできないだろうし」

酷い言われようだけどその通りです。しかし母上様、僕の親としてそれでいいんですか。息子と幼馴染が一線超えたらどうするんですか

「万が一そうになったら純粋に嬉しいわ。真姫ちゃん良い子だからむしろ悠をもらってくれてありがとうって感じ？」

まさか高校生になって母さんに泣かされそうになるとは思わなかった。僕は沈んだ気持ちのまま夕食の支度をすべくキッチンへと向かった

「ついでだから真姫ちゃんの方も作ってあげて。お母さんには連絡しておいたから」  
準備の良い事で。というか真姫のお母さんの連絡先知ってたんだ

「真姫の分も作るのは良いんだけど、それならトマトソースの Pasta でも良い？」

リビングの方から了承の返事がしたので早速取りかかる。真姫はトマトが好物なのだ。喜んでくれると良いな

パスタなので完成までにそれほど時間はかからない。慣れた手つきで皿に盛りつける

「母さん、もう少しでできるから真姫を起こしてきてくれない？」

「いんや、私が準備しておいてあげるからアンタが起こしに行つてあげて」

「はあ？」

「悠が起こしてくれた方が真姫ちゃんも嬉しいってもんでしょ。本当に乙女心が分かってないんだから」

そんなものなのだろうか。どこかズレてると思ったけど既にテーブルに皿を並べ始

めている母さんを見て諦めた僕は真姫を起こしに行くことにした

「真姫、入るよ？」

返事はない。まだ眠っているみたい

仕方がないので部屋に入って起こす事にした。未だに真姫は気持ちよさそうに眠っている……冷静に見たら僕の枕を抱きしめて寝ているのって結構恥ずかしい気がするな、うん

「真姫、起きて。ご飯作ったから一緒に食べよう？」

「んー……」

とにかく、起こそうと声をかけてみても寝返りをしただけで起きない。頬を叩いたら嫌そうな顔をする。ふふ、可愛いじゃないですか西木野さん



「つて、遊んでる場合じゃないか。真姫、起きて！」

「うえ………?」

体を強く揺すつてやったらようやく目を覚ましてくれた。未だに半分は夢の世界にいるであろう瞳が僕を捉えた

「おはよ」「きやあああああああ!?!」がふつ!?! な、なんでパンチ………?」

絶叫と共に放たれた真姫の寝起き渾身のストレートが僕の鳩尾にヒット。僕はこの日、母さんの言う乙女心は全く理解できないと悟ったのだった

教え子が二人に増えるようですよ？

僕は今、穂乃果ちゃんの家に行つて来ています。目的はもちろん、彼女の妹の雪穂ちゃんに勉強を教えるためです。この勉強会は既に何度か行われており（その数回は穂乃果ちゃんも加わつて一緒に勉強した）、教える側の僕もかなり慣れ始めたと感じ始めていたのだけど

「え、友達も一緒に？」

「うん。私のクラスの子なんだけどね、はるにいに勉強を教えてもらつてゐるっていう話をしたら自分も教えて欲しいって言いだしてさ」

なん、だと……雪穂ちゃん一人でも不安だというのに人数が増えたらやっていける気がしないんですが

特にもしも不良みたいなガラの悪い女の子がやって来たら僕は終わりです。大人し

く帰ります

「大丈夫だよ、大人しくて優しい子だから。それに多分毎回来れるってわけじゃないし。その子も都合が良い日に一緒に勉強しようって話になったの」

そ、それなら良かった……雪穂ちゃんの友達だから不良はないと思っていたけどね。大人しい子か。仲良くなれるといいなあ

「もちろんはるにいがどうしても嫌だつて言うんなら我慢してもらうんだけどね。どうか？」

「僕は嫌なんかじゃないけど、むしろ僕が教える立場でいいのかな。偉そうな事言っておいてあれだけど、大して教えるの上手じゃないし」

「はるにいの教え方、自分で思っている以上に分かりやすいんだから自信持って。それに偉そうな口叩いたくせにそんなんで本当に大丈夫なの？」

物凄いジト目で僕を見る雪穂ちゃん。うう、そんなゴミを見るような目で見ないでください興奮するじゃないですか。冗談ですよ机の下から蹴らないでください

「……というかサラツと僕の心読むの止めてもらえないかな?!

「別に読んでないよ。ただはるにいが分かりやすいだけで」

「嘘だ! 僕はそんなに分かりやすすくない! いくら雪穂ちゃんでもプライバシーの侵害で訴えるぞ!」

「はるにいうるさい。集中できないから黙ってて」

「はい。ごめんなさい」

反抗期だ。終わったと思ったのに雪穂ちゃんの反抗期は未だに続いているようです。しかし今のは完全に僕が悪いので彼女の言葉の通り黙る事にする

僕自身も持ち込んでいる予習用の教材をこなしながら、雪穂ちゃんが苦手な分野を特定し、出題する。今の時間は雪穂ちゃんの家家庭教師としての時間なのでむしろ後者がメインだ

「自分の勉強もやってるの？」

雪穂ちゃんは僕の目の前に置かれている教材を興味深そうに覗き込んでいる

「うん。手が空いた時に少しずつだけどね」

「へ〜…器用だねえ。てかがり勉？」

「そういうわけじゃないよ。音乃宮は普段の授業でも難しいからしっかり予習復習しておかないと大変なんだ」

「はあー…その勉強に対する姿勢、ほんの一ミリでもいいからお姉ちゃんも見習えばいいの？」

「そ、それはちよつと難しいんじゃないかな？ 穂乃果ちゃんだし」

「だよー」

穂乃果ちゃんの勉強に対する評価はあまりにも低いらしい。自業自得だけどちよつと可哀想……いつか勉強で困る時が来ないと良いけど

「そんなに真面目に勉強できるなんてね。初めてはるにいの事ちよつとだけ尊敬したよ」

初めてのうえにちよつとだけかい！ とツツコミを入れたかったが雪穂ちゃんが勉強に戻ってしまったので心の中で叫ぶだけにしておいた

ちなみにその頃、学校で練習に励んでいた穂乃果ちゃんが数回くしゃみをしていたとかかしていなかったとか

数日後、噂の雪穂ちゃんのお友達が都合が良いという事で再び高坂家へとやってきました。今日は顔合わせなのでそれほど長い時間勉強するつもりはない。まずはその子と打ち解けなければ勉強に支障が出てしまうかもしれないからだ。主に僕の人見知り体質が原因なのだけど

「お邪魔しまーす……」

「あ、悠くんいらっしやい。二人とも待っているわよ。早く上がりなさいな」

高坂母……確か名前は志穂さん、だったか

志穂さんに促されて居間に通される。どうして僕が穂乃果ちゃん達のお母さんを名前で呼んでいるのかと聞かれれば、昔の呼び方である『お母さん』は恥ずかしいし、『おばさん』と呼ぶにはこの人の見た目は若すぎる。なので名前で呼ばせてもらう事にしたのだ

ちなみに「お義母さんって呼んでくれてもいいのに！」とからかわれたのは余談である。その冗談に高坂姉妹が全力で抗議していたのには流石の僕も傷つきましたよ、ええと、まあ僕の悲しい回想はこれぐらいにしておいて居間の状況を説明したいと思う

雪穂ちゃんはいつも通り居間の中央に置かれた机を前にしてちよこんと座っている  
そして当然、彼女の隣に座っている少女が例の大人しくて優しいお友達なのだが……

「あ、貴方が雪穂が言っていたお兄さん？ 初めまして♪」



礼儀正しくお辞儀をしてくれる。金髪碧眼の美少女。僕は呆然と彼女を数秒間見つめてから呟いた

「天使だ……」

そう、正しく天使。恐らく穢れ一つない少女。純真無垢という言葉が似合いすぎる少女に目を奪われていると

「はるにいデレデレし過ぎ！ キモイ！」

「ぐはっ!？」

雪穂ちゃん、君の言う事は間違っていないませんが殴った上にキモイは酷すぎじゃないですか。しかも僕、殴られるほどデレデレしてましたかね？ 女の子って難しいです

「だ、大丈夫ですか？」

痛みに悶えている僕を心配して声をかけてくれる金髪美少女もとい天使ちゃん。あ、この子の優しさが眩しいよ……

「大丈夫だよ。その人、無駄に頑丈だから」

「無駄について酷いな……でも、本当に大丈夫だよ。心配してくれてありがとう」

「それなら良かったです！　もう、雪穂ったらいきなり叩いたりしたらお兄さんが可哀想でしょ？」

「うっ、それはそうだけど……うう、ごめんねはるにい」

あの雪穂ちゃんをこうも簡単に屈服させたけど？　この天使ちゃん……やはり只者ではないな。なんて思っていると雪穂ちゃんが割と本気で落ち込んでいるように見えたのでフオローしておく

どうして被害者のはずの僕が加害者の雪穂ちゃんのフォローをしなければならないのか。考えたら負けな気がしたので思考を放棄

「それより、そろそろ自己紹介してもらってもいいかな？」

金髪少女はまだ名乗っていない事を思い出したらしく、もう一度頭を下げてくれた

「雪穂のお友達で綾瀬亜里沙って言います！ 今日からよろしくお願いしますお兄さん！」

天使のような微笑み。この子……男を駄目にしてしまう魔力を持っていそうな気がしてならない。それも無自覚に

それにしてもお兄さんかあ。僕は一人っ子だからお兄さんと呼ばれるのは慣れていなくて凄くくすぐつたい。当然、悪い気はしないけどね

「まーたニヤニヤしてる」

「はっ!？」

「……ばか」

雪穂ちゃんのジト目に慌てて顔を引き締めるがもう遅かったらしく、すっかりへそを曲げてしまった。確かに悪かったし気持ち悪かったとは思うけどそんなに怒らなくても……少しへこむ

雪穂ちゃんには後で何かしらでご機嫌を取ることにし、まずは僕も自己紹介をするこ  
とにした

「僕は林堂悠つて言います。こちらこそこれからよろしくお願いします」

「お兄さん、亜里沙の方が年下だから名前で呼んでくれませんか？ その方が嬉しいです！」

「分かったよ。えっと、亜里沙ちゃん？」

「はい！」

いきなり名前呼びは抵抗があるかと思っただけど、意外とすんなりできたな。彼女が年下だというのは大きいかもしれない。最近、色々な人と関わる機会が多いからか僕のコミュ力も少しだけ上昇している気がする

「それじゃあ早速だけど勉強しよっか。亜里沙ちゃんは自分の得意科目と苦手科目を教えてください？」

「はーい。えっと……」

「はるにいい。亜里沙ばっかりじゃなくて私にもしっかり教えてよね」

亜里沙ちゃんが答えるよりも早く、雪穂ちゃんが不満の声を出した

確かに偉そうな事を言つて半ば無理矢理彼女の家庭教師になつたというのに、自分を放つておかれては堪らないだろう。雪穂ちゃんからすれば当然の不満だ

もちろん僕としても何も考えていなかったわけではない

「分かつてるよ。前に出した宿題はやつてあるよね。僕はその丸つけするからその間に英語の長文を読み込んでおいてくれるかな？ 分からないところがあつたらすぐに聞いてね」

「はい」

素直に返事をしてくれたので僕は亜里沙ちゃんの勉強を見る事にする。話を聞くと彼女はロシア人のクォーターであり長い間ロシアに住んでいたのだという。その為日本語があまり得意ではなく、国語全般が苦手なのだとか

「それにしても日本語凄く上手だね？」

「お姉ちゃんに教えてもらって頑張って覚えたんです！」

亜里沙ちゃんにはお姉さんがいるのか。きっとこの子と同じように優しい人なんだろう。一人っ子の僕からすれば仲が良い姉や兄がいるという事に少し憧れる

「日本語と学校の勉強の国語は別物だからね。読解とか作者の気持ちを読み取る問題とか難しいよね」

「はい……書いた人の考えた事を答える問題はちよつと苦手なんです。それから古文とかも難しくくて……」

しゅん、と項垂れる亜里沙ちゃん。作者の考えを正確に読み取ったり古文や古典などは日本人でも苦手な人は多くいるので仕方がないだろう

「とりあえず今日は亜里沙ちゃんの実力を見たいからこの問題をやってみてくれるかな。時間計っておくから僕が終わりって言うまで自力で解いてみて」

「うう、頑張ります……」

難しい顔で僕が持つて来た問題と睨めっこし始める。ちなみにこの問題は僕が雪穂ちゃん用に用意した自作の問題である。様々な問題集から抜粋したり過去問を引つ張ってきたりしたのだが凄く大変だった。問題を自分で作る教師つて凄いと改めて思った

さて、二人が問題をやっていている間に雪穂ちゃんの宿題の採点を済ませて彼女へのアドバイスも考えておく。どうすればより分かりやすく教えられるかを考えるのは大変だけれど意外と楽しい

当然二人に与えた課題が終わるよりも僕の仕事が終わる方が早い。僕は二人が終わるのを待つ間にμ'sのマネージャーとしての仕事をする。実は新しい曲の作詞を園田さんと一緒にやる事になってしまったのだ。作詞経験なんてあるはずないので思っていたワードをひたすらノートに書き留めてみる。最近はや作詞のヒントを得る為に小説



はもちろん絵本などを積極的に読むようにしている

……まあ、そこまですてもなかなか捗らないんだけどね。園田さんは凄いなあ

今度図書館で何か参考になりそうな本でも探しに行こう。なんて考えているうちに設定した時間になり、様子を伺うと二人とも課題が終わったようだった

「終わった？」

「うん」

「はいー！」

早い、と思う。雪穂ちゃんも亜里沙ちゃんも今までコツコツと勉強してきた積み重ねの成果だろう。非常に優秀である

「じゃあ早速亜里沙ちゃんの方の採点始めようかな。その間二人は休憩していい」

「え、いいの？」

雪穂ちゃんが意外といった声を上げるが

「この時期からあんまり根詰めて勉強してもあんまり意味ないよ。それより適度に休憩を挟みながら効率良く勉強した方が身に付くと思う」

「なるほどね。それならお母さんからお茶菓子でももらってくるからちよつと待って」

「あ、ごめんね」

気にしないでよ、と雪穂ちゃんは部屋から出て行った。あの子はやっぱり気の利く良い子だ。将来は良いお嫁さんになるだろう、なんて言ったら雪穂ちゃんに殴られるだろうから言えないけども

「お兄さんは優しいですね」

「へ？」

雪穂ちゃんが出て行ったタイミングを見計らってかのように亜里沙ちゃんがそんな事を言ってきた

「雪穂が最近学校でもお兄さんの話ばかりするんです。だから亜里沙も気になっちゃって、我儘を言って今日呼んでもらったんです」

雪穂ちゃんが学校で僕を話題のネタにしているって？ それは嬉しいというよりも恥ずかしいと感じる気持ちの方が大きい。小さい頃の恥ずかしいエピソードなんて話してないだろうな……僕はあることないこと雪穂ちゃんに言いふらされていないか祈るばかりである

「実際今日こうして会って、お勉強を教えてもらって、雪穂が言っていた通りの人なんだって思いました。他人を思いやれる優しい人だって」

今日出会ったばかりの男に恥ずかしげもなく笑顔で言い切れるこの子は将来大物になるだろうと思つた。言われた本人である僕の顔はちよつぴり赤くなっていることだらう

これはクラスの男子を勘違いさせてしまつて勘違いする子が大量に出てくる未来が容易に想像できる……頑張れ亜里沙ちゃんのクラスメートの男子達よ、強く生きてください

「あ、それから！」

目の前にお行儀よく座つていた天使ちゃんもとい亜里沙ちゃんの雰囲気が一変。興奮した様子で僕の目の前に迫つて来た。ちよつと近すぎやしませんかねえ？別に嫌とかじゃなくて女性に対する免疫が絶望的に足りない僕からすれば年下の女の子であつても破壊力がありすぎる

「お兄さんってμ'sのマネージャーやっていますよね！」

「ま、まあね。それも雪穂ちゃんから？」

「はい！ 私、μ、sが大好きなんです！」

「そうなんだ。それはなんとというか……ありがとうございます」

音乃宮のクラスメートにもμ、sのファンはいるのだがこんなに面と向かってファンの人と喋るのは初めてだ。それに僕自身がμ、sで何かをしているわけではないので返答に少し困ってしまう

「雪穂、言っていました。お兄さんがμ、sの為に色々頑張ってるって……お兄さんをお願いしても良いですか？」

「お願い？」

「はい。実は私のお姉ちゃん、音乃木坂なんですけど」

そうなんだ。ひよつとしたら真姫や穂乃果ちゃんの同級生かも……つてあれ？　そういえば音乃木坂に行った時にライブが終わった後に現れた金髪美女がいたけど。ひよつとしてあの人かな。暗がりでも顔が良く見えなかったから確信はないけどね。でも亜里沙ちゃんとは違って冷たい印象を受けた人だから違いかもしれない

「お姉ちゃん、最近全然楽しそうじゃないんです。生徒会長として音乃木坂を守りたいって、そればかりで……」

喋っていくうちにどんどん元気がなくなっていく亜里沙ちゃん

ううむ、亜里沙ちゃんのお姉さんは生徒会長なのか。それで廃校を阻止するために頑張っているけれど頑張りすぎて逆に心配になる、と

「お姉ちゃんには笑っていてほしいんです。だけど何をしてあげたらいいのか分からなくて……」

それでお姉さんを元気づける為のアドバイスが欲しいと。亜里沙ちゃんが言いたいのはそういう事だろう。今日会ったばかりだが、目の前に座っているこの子がとても思いやりのある子だというのが伝わって来た。ここまで妹に想ってもらえるお姉さんは幸せ者だろう

しかし、そこで一つ問題がある

「うーん……僕はお姉さんと喋った事がないからな。具体的にどうしてあげたらいいかはちよつと分かんないかな」

そう、僕が綾瀬姉の事を全く知らない事である。アドバイスしてあげようにもその人の事を知らなければ的確なアドバイスはできないのである。まあ、仮に知っていたとしても僕が他人に的確なアドバイスをするなどという高度な技を放てるかどうかは別にして

「そう、ですよね。すみませんお兄さん変な事言っちゃって」

目に見えて落胆する亜里沙ちゃん。ああ！ そんな顔しないでください。何だか僕が悪い事したみたいじゃないですか！

「……えつと、だったらお姉さんにはやりたい事を聞いてみたらいいんじゃないかな」

え、と亜里沙ちゃんは意外そうな顔をする

「お姉さんが楽しくなさそうに見えるのは多分やりたい事を我慢して自分の仕事をしようとしているからだよ。生徒会長として廃校を阻止したいって考えて行動しているのは凄く立派な事だと思うんだけど、どうせやるなら自分も楽しい方がいいよ。僕はそっちの方が良い方向に進んでいくと思うな」

亜里沙ちゃんは何か思う所があるのだろう。考えるように俯いている

「あ、そうだ。廃校を阻止したいって気持ちはμ'sのみんなと同じだから僕の方からも生徒会長さんの力になってあげてつて頼んでおくよ。あの人達ならきつと力を貸してくれるはずだから」



ほぼ無関係の僕がどうこう言うよりも直接関わりのある穂乃果ちゃん達の方がお姉さんの力になりやすいはずだ。もし、綾瀬姉がμ'sに入るなんて事になったら面白いんだけど。そんな事を考えてしまったのは内緒である

「お姉ちゃんがやりたい事……そうですね！ 家に帰ったらすぐに聞いてみます！」

「うん、そうしてあげて。ああ、それから僕からもお願いなんだけどお姉さんにμ'sが迷惑かけると思うけど応援してあげてくださいって頼んでおいてくれないかな？」

「μ'sがお姉ちゃんに迷惑かけちゃうんですか？」

「あはは……多分ね」

μ's、というよりもこの家の姉妹の姉の方を思い浮かべてしまい、思わず苦笑いしてしまふ。亜里沙ちゃんの話聞く限り、お姉さんは相当融通が利かなそうな性格をしていそうなので穂乃果ちゃん達にはかなり振り回されると思う

「とにかく、お姉さんによろしくね。応援してますって言うておいて」

「はいー」

亜里沙ちゃんマジ天使。今まで後輩なんていたことないから分からなかったけど年下って良いですね

え、雪穂ちゃんも年下だろうって？ あの子はもう年下って感じじゃないんだよなあ。なんていうか、友達？ 言葉じゃ上手く表現できないけどそんな感じ

この後、戻ってきた雪穂ちゃんが持つて来てくれたお饅頭に舌鼓を打ち、そこそこ三人でお喋りを楽しんで解散してしまった。勉強？ 今日だね、いいんだよ。二人には宿題も出しておいたしね。雪穂ちゃんも亜里沙ちゃんも真面目だから教えやすくて助かるなあ……

それにしても亜里沙ちゃんのお姉さんが音乃木坂の生徒会長、か。もし今度音乃木坂

に行く機会があつたら挨拶位はしておきたいところである

ちなみに二人ともお喋りの中で姉自慢をしまくっていたので一人っ子の僕だけ話についていけなかった。どのぐらい自慢していたかというと、シスコンか！ ってツッコミたいぐらい姉の事が大好きだというのが伝わって来た程度には自慢していた。一人っ子の僕には理解できない領域の話だった

……二人の話聞いて優しいお姉さんが欲しいな、と思つたのは内緒である

油断すると感傷に浸ってしまふ性格をどうかしたい

「外部顧問？」

「うん！　なんかそういう役職？　になったら放課後や土日に限ってはるちゃんも音乃木坂に来て一緒に練習できるようにするんだって！」

今や日課となった朝練を終えてストレッチをしている時に穂乃果ちゃんがそう切り出した。確かに僕も音乃木坂に入る事ができたらいいなって思った事は何度もあるけどさ。

「僕も学生だけど顧問なんてなれるもんなの？」

「うん。ことりちゃんのお母さんが許可くれたから大丈夫だよー」

なんていい加減なんだろう、と思ったけどあの人なら言いかねない。簡単に許可をくれても不思議ではないと思った。

「林堂くんが考えてくれているパートも教えてもらいやすくなりますし、いいのではないのでしょうか？ もちろん林堂くんが良ければの話ですが……」

そう。実は僕の仕事が更に追加されて、ダンスまで考える事になったのだ。これまた主に園田さんと一緒に。その為、最近は園田さんと一緒に行動する機会が多くなっていくのだがそれはまた別の機会に話す事にする。

「うーん……やっぱ朝練の時しか僕の考えた部分を練習できないんじゃないじゃ効率悪いですよね」

「ね、ね、はるちゃんも一緒に音乃木坂で練習しようよ。ね、ね？」

「穂乃果、あんまり駄々をこねないでください！ 林堂くんにだって都合があるんですから」

「だつて〜」

不貞腐れた感じで園田さんに対して不満の声を上げる穂乃果ちゃん。そこまで言われたら僕としても断るわけにはいかないかな。

「良いんですよ園田さん。その話、受けますから」

「ほんと!?!」

「うん。南さん、お母さんによろしくお願いしますって伝えておいてください。僕も学校に行った時に挨拶しに行きますけど」

「は〜い。ふふ、良かったね穂乃果ちゃん♪」

「うん!」

穂乃果ちゃん……凄く喜んでくれてるな。悪い気はしないけど。

——その好意は、僕には眩しすぎるよ。

「林堂くん？」

「あ……」

いつの間にか近くに来ていた小泉さんに声をかけられて我に返る。

「うー、凜の事無視しないでほしいにや！」

星空さんに話しかけられてたのか……全然気づかなかったな。

「ちよつと、何ボーつとしてるのよ」

「ご、ごめんごめん。ちよつと考え事してた」

「全く、すっかりしてよねマネージャーさん？」

返す言葉もごさいませんお嬢様。今はμ'sのマネージャーとしての仕事に集中しな  
くちや。

「それで星空さん。何の話でしたっけ？」

「これから朝練の時だけじゃなくて部活の時も林堂くんと一緒にいられるから嬉しい  
ねって話だにや！　ね、かよちん。真姫ちゃん」

「そうだね。人数が多い方がきつと楽しいよね」

「私は別に。悠くんがいてもいなくてもどつちでも良いけどね」



「うわ。その言い方酷くない？」

「だって本当の事だもの」

あつさりと言い切る真姫。素つ気ない態度に少しだけ悲しくなる。しかし横にいる星空さんがニヤニヤと、

「そう言う真姫ちゃんがこの話を聞いた時に一番嬉しそうだったくせにー。全く素直じゃな……いたたっ!？」

「凜! 適当な事言わないでよね!」

「ま、真姫ちゃん痛いにやー! 耳引つ張らないでー!」

「貴女が適当な事言うからでしょ! 花陽と悠くんもニヤニヤしてるんじゃないわよ!」

真姫が僕達を睨み付けてきた。僕は小泉さんと目を合わせる

「別に花陽はニヤニヤなんて」

「僕もニヤニヤなんて」

「してません」

「してないよ？」

「ねー？」

「ナニソレイミワカンナイ！ それに二人はいつの間にそんなに仲良くなったのよ!？」

「それはね」

「内緒です！」

「ほんとにイミワカンナイ！」

「いたたた!! そろそろ離してほしいにやー!!」

真姫は未だに星空さんの耳を引っ張り続けている。流石に少しだけ可哀想だ。かと言つて止めるつもりはあんまりないんだけどね。八つ当たりだにやー! と叫んでいる星空さんの声は聞こえない聞こえない。

ちなみに僕と小泉さんが少しだけ仲良くなつた話なんだけど、特に内緒にするほどのものでもない。作詞の参考に図書館に本を借りに行った時にバツタリ会つて、少しだけお喋りをするようになって。それが何度かあつただけである。この話も詳しい事はそのうち話す事にするよ。

とにかく、僕とこの三人は一年生ということもあつてすぐに仲良くなることができた。真姫とは前から知り合いだったし、星空さんは人懐っこい性格だし、小泉さんとは図書館の件で打ち解ける事ができたし。

「林堂くん」

「あ、南さん。どうしたんですか？」

「林堂くんさえ良かったら早速今日の放課後から来てもらえないかな？」

今日か。自分の予定を頭の中で思い浮かべる。特に講習とかの用事はなかったはずだ。

「それなら今日から行きます。学校に着いたら最初に理事長室に行った方が良いでしょう？」

「そうだね。その方が良いかな。場所は覚えてる？」

「た、多分大丈夫です！」

「ふーん。でも、前に来た時は迷子になっちゃったよね？」

「う、それは」

「ことりが案内してあげますね♪」

「……よろしくお願いします」

南さんの謎の圧力に負けて、学校が終わったら音乃木坂の校門で待ち合わせてから理事長室へと案内してもらった。実際の所、理事長室の場所が曖昧だったので助かるのだが……この人には何故か逆らえない。その素敵な笑顔が今は怖いです。

この後、ストレッチを終えてから解散して学校に向かったのだった。

と、いうわけで放課後です。今日は学校で飼っている動物の世話の担当でもないので真つ直ぐ音乃木坂に向かう事ができた。

校門の前に到着すると、既に南さんが立っているのが見えた。事前にメッセージを送っておいたのだが、少し遅かっただろうか？　ちなみに今回は学習して自転車に乗つて来た。音乃宮から音乃木坂は割と遠いのだ。

僕は自転車を漕ぐスピードを早めた。

「ごめんなさい！　ちよつと待たせちゃいました？」

「ううん。別にことりはさつき来たばかりだから大丈夫だよ。あ、自転車を停める場所

に案内するから着いてきて？」

南さん、やっぱり優しいなあ。なのにどうして時々恐ろしいと感じる事があるんだろうか。その答えは今の僕には分かりそうもない。

南さんに案内された駐輪場に自転車を止め、再び歩きだす。放課後になって間もない時間だからか、結構な数の生徒がいる。ここは女子校なので全員が女の子。以前来た時もそうだったが、好奇の視線が僕に突き刺さっているのを感じる。

「あの時もこんな感じだったよね。ことり達のファーストライブの時も」

僕の少し前を歩く南さんがそんな事を言った。あの時もこうして南さんに理事長室まで連れて行ってもらったんだっけ。

「あはは……気になるのは分かるんですけど。僕としてはそんなに見られると落ち着かないって言うか……」

「ふふ、そうだよな。でも、これから林堂くんが良く来るようになったら皆気にならなくなると思うな」

これから用事がなければ毎日のようにこの場所に来れるようになるのだ。そうなたらこの視線も少しは和らぐと信じたい所。

「……ありがとう」

「え？」

突然お礼を言われて、思わず聞き返してしまう。僕は南さんから何かお礼を言われるような事をしただろうか？ 心当たりは全くないのだけど。

「ファーストライブの時ね。きつと貴方がいなかったらあのまま終わっていたと思う。正直、ステージの幕が上がって誰もいないって分かった時、凄くショックだったから……」



僕の前を歩いているので南さんの表情を伺う事はできない。

「貴方が来てくれなかったらどうなっていたか分からない。あのままあのステージで泣く事しかできなかったかもしれない。だって、穂乃果ちゃんや海未ちゃんや泣いていたあの場面で、ことりは何もできなかったから……貴方の声が私達に勇気をくれたんだよ？」

表情は分からなくても、南さんの肩が僅かに震えている事ぐらいは分かった。

「だから、改めてお礼が言いたかったの。他の人がいる所では何となく言いにくかったし……」

振り返った南さんは笑顔だった。しかしそれは僕の目には無理をして笑っているようにしか見えない。

強い女性ひとだ、と思う。だけど、

「大丈夫ですよ！」

「え？」

大きな声を出したせいで、南さんは驚いたような表情を浮かべた。

僕はこういう時に気の利いた言葉なんてかけてあげられない。

「南さんがそうやって思ってくれて、僕にお礼を言ってくれるのは凄く嬉しいですし光栄に思います。だけど、南さんは。南さん達のライブは僕がいなくても大丈夫だったと思います」

言っていて自分が必要ないのでは、と自分で認めている気がして少し悲しくなるがこれは僕の本音だ。

「だって、南さん達三人はあんなに仲良しじゃないですか」

僕の言葉に、南さんの目が先程以上に大きく開かれた。

「確かにあの時は僕の言葉がきつかけで立ち直ってもらえたかもしれませんが。でも仮に、僕があの場合にいなかったとしたら。きつと僕の代わりに誰かが声をかけたでしょう？ 穂乃果ちゃんに、園田さんか南さんが。二人は泣きそうになっている穂乃果ちゃんを放っておいたりなんかしない。自分も泣きたいのを我慢して、穂乃果ちゃんを励ましてくれたはずですよ」

きつと穂乃果ちゃんだつて、二人が泣きそうになつていたら同じように励ましてあげるはずだ。

「だから、お礼なんて言わないでください。僕は、その……マネージャーとしてだけじゃなくて一人のファンとして言いたい事を言っただけだったので」

面と向かつてファンだと宣言するのはなんだか恥ずかしくて最後の方になるにつれて声が小さくなっていってしまった。南さんを励まそうと思つてたのに僕が恥ずかしくてどうしてどうするんだ。

南さんは驚いた顔をしていたが、すぐにいつものような笑顔になってくれて、

「……君は優しいね」

「そ、そんな事」

「ふふ、ごめんね変な話しちゃって。でも林堂くんと話したらスッキリしちゃった！」

言葉の通り、彼女はとても晴れやかな様子だった。僕は特に何もできないけどマネージャーとして。彼女達の一人のファンとして。少しでも力になれたのなら本当に嬉しいと思った。

「それじゃあお母さん待たせちゃってるし、そろそろ行こっか」

言って、南さんは僕の方に近づいてきて僕の手を握って歩き出した。

「み、南さん？」

余りにも突発的な行動に上手く対応できずに僕は南さんに引つ張られて歩く。女の子と手を繋いで歩くというのは初めての経験で、恥ずかしさからその手を振り払おうとした時、

不意に、

前を歩く南さんの後ろ姿が、誰かと重なる。

今よりももっと小さい頃、今よりも人見知りが激しかった僕の手を同じように引つ張って色々な所に連れて行ってくれた太陽の様な少女と。僕の手を引つ張っている南さんの親友である少女と。

南さんは僕の声のおかげで立ち直れたと、お礼を言ってくれたけどそうじゃない。お礼を言うべきは僕の方だった。

僕は今も、手を引っ張ってもらっている。南さんを含めた六人の女の子に。

きつとこの人達は、僕が今まで見たこともないような景色が見える場所へと引っ張っていつてくれるんだろう。僕一人なんかじゃ到底辿り着けないような場所へと。

気づけば僕は南さんの手を握り返していた。恥ずかしさなんて、とつくに無くなっていた。

「ありがとうございます」

「え、何が？」

「言いたくなかったんです。気にしないでください」

「……うん。どういたしまして、かな？」

「はい」

僕達の会話がおかしくて、二人とも笑った。今まで只の先輩だった南ことりという人と僕の距離が縮まった、そんなワンシーンだった。

ちなみに僕達はうっかり手を繋いだまま、理事長室に入ってしまったので軽く騒ぎになったのは余談である。

理事長室を後にして僕は音乃木坂のとある空き教室に移動していた。そこでは穂乃果ちゃんを始め、他のメンバーが僕を迎えてくれた。

「はるちゃん、音乃木坂にいらつしやーい……って、何か疲れてない？」

「ん……ああ、ちよつとね」

「南先輩、何かあつたんですか？」

「んー……お母さんと喋るのに緊張してたみたいだから疲れちゃったんじゃないかな？」

「ふーん……そうなの？」

真姫の問いかけに僕は曖昧に笑って

「まあ、そんな所かな……」

まさか南さんと手を繋いでいたからお母さんに根掘り葉掘り聞かれたなんて言えな



い。下手に喋ってしまったら僕の命に関わる気がする。

「林堂くんも来てくれたことですし、本題に入りましょうか」

「そうだね！ はるちゃん、実はね……」

海未さんが促した事で穂乃果ちゃんが説明を始めた。

何でも、練習場所を確保したり学校内でライブをやったりするには正式な部活動として認められなければいけないらしく、穂乃果ちゃん達は人数等の条件はクリアしているのだが大きな問題が一つあって、

「アイドル研究部ねえ……」

「そうなの！ 同じような部活を二つも作るわけにはいかないから話をつけて来いって言われちゃってさ」

なるほど、確かに廃校が決まって生徒数が少なくなっているのに部活ばかり悪戯に増やすわけにはいかないという事なのだろう。

「それじゃあそのアイドル研究部の人達と一緒にスクールアイドルをやりましょう！  
って誘いに行くってことかな？」

「まあ、大体そんな所ですね」

「でもでも、アイドル研究部って今は一人しか部員いないんですよ？ だったらすぐに良いよって言ってくれそうだと思うけどにや〜」

一人？ 一人で部活が成り立つのだろうか？ アイドル研究部って名前を聞いただけだとしてもメジャーな部活だとは思えないから少なくとも大丈夫なのかもしれない、と勝手な事を考える。

「ひ、一人しか部員がないんだったら今日部室に行ってみてもいるかどうか分からな  
いってことですよね……」

「いなかっただらまた明日行けばいいし、とにかく行ってみないと話が始まらないからと  
りあえず行ってみよう！」

言うが早いか、穂乃果ちゃんは教室を飛び出して行ってしまった。高坂さんや、廊下  
を全力疾走してはいけませんよ、なんて言葉は当然の如く届かない。そしてその少し後  
に「凜も行くにゃー!!」と叫びながら誰かが飛び出して行った。

「あの二人は団体行動ができないんでしょうか……」

園田さんの呟きはこの場にいる全員が思った事だが、今更の事でもある。特に穂乃果  
ちゃんに関しては。

「僕達も行きましようか。あの二人だけだと話をややこしくしてしまいそうですし」

「林堂くんってたまに酷い事言うよね……」

「南先輩、この人はこういう人なんですよ」

真姫、うるさいぞ。本当の事なんだから仕方がないじゃないか。

とにかく、僕達も先走ってしまった二人を追いかけてアイドル研究部の部室へと向かった。僕は部室の場所など分からないので一番後ろを歩いている。

「えっと、あの教室だね」

「……あの二人は私達が追い付くまで待っているという選択肢を思いつかなかったのでしょうか」

園田さん、それを言うてはいけません。南さんが差した教室の扉は既に開かれており、穂乃果ちゃんと凜ちゃんの声が聞こえてくる。それに混じって知らない人の声も。

『……と、いうわけなんです！』

『はあ？ 意味分かんないわ！ どうして私がアンタ達に協力してあげないといけないわけ？』

……あれ？ この声、どこかで聞いた事あるような……どこだったけ？

「穂乃果ちゃん、星空さん。急に話をしても相手の人も困っちゃ……」

僕がようやくアイドル研究部の部室の入り口に立った時、中にいたのは先に行った穂乃果ちゃんに星空さん。

そして入口から一番遠い椅子に座っていたのは、忘れるわけもない。

「に、にこさん？」

「は？ ……つてアンタ！ なんでここにいんのよ！」

小さな背中にカッコよさを漂わせていたツインテールが特徴のアイドル大好きな女

の子。A—R—R—I—S—Eとの座談会で大変お世話になったにこさんだった。